

兼雅一條西の對に遺題の歌を見て宰相上の行方を尋ねんと志す。俊隆女之を仲忠に謀る。

まことや、三條の右の大殿の、かの一條殿の對どもに居給へりし御方々、宮、むかへられ給ひて、今は限なめりて、思ひくくにわたり給ひにし中に、西の一の對に、源宰相の君、

(語釋)

(二)兼雅

(三)兼雅の妾の一人也

(四)兼雅には「年をまちわびて」とあり

(五)三途の川

(七)多くの妾たちが居られしに

(八)「さうくしき」歟

(九)兼雅がかくく仰せらるる故

(一)嵯峨院の女御也

(考異)

(一)まことや一ナシ

(六)をば一「ば」ナシ

(一〇)とマめて一「て」ナシ

宰相上ふるさとおほくの年は住みわびぬわたりがはには訪はじとやすると書きつけ給へりしを、殿おはして見つけ給ひて、兼雅心ふかくをかしう、容貌などもことに難なかりしを、いかでこればかりをば、在處を聞かましかば、尋ねてしかな」と宣へば、内侍のかみ、俊隆女いとよき事なり。宮のおはしける所に、あまた然てもものし給ひけるを、女子もなく、さうくしき。處は、廣うおもしろう、めでたきに、元のやうにて物し給はど、聞え交してあらむ」とて、右大將の參り給へるに、俊隆女「こよに宣ふめる事なほ御心とどめてたづね給へ」と聞え給へば、けにながくと思す。

かよる程に、朱雀院の御同胞、

承香殿の女御と聞えし御腹の齋宮にておはしつる

(語釋)

(一)伊勢より京に

(二)誤あるべし「右大臣殿」歟

(三)我が親族故

(四)齋宮を

(五)誤あるべし

(六)齋宮になりて伊勢に

(九)齋宮に通ひたし

(一〇)女一宮が不快に思はるべし

(一一)誤あるべし

(一二)宰相上

(考異)

(七)せしに又一せしをや

仲忠石作寺に參詣して宰相上とその子とに邂逅す。

(八)大將殿げに物せられなば一大將殿だにものせられずば一大將の侍りしけに物せられなば

が、其の御母女御のかくれ給ひぬれば、のほり給はむとす。右大將殿宣ふやうこの宮の御母方も、離れ給はねば、はやう、ちかうて時々見奉りしに、御かたち清けにて、をかくおはせしが、折々に聞えかはしよに、何かは思し契りしを、俄にくだり給はむとせしに、又かく見つけ奉りて、他事おほえでなむ」大將殿、仲忠「けに物せられなば、忍びてたまさかにさやうに有りなまし。まだ御年も若うおはすらむかし」兼雅「何かは。今も然おはせかし。宮いかどおほさむ。忝けれども、こよには、大將の年の程見給ふに、今にあらねばこそ」と聞え給へば、仲忠「いさや。なほすさめ事なり。今の一條西の對の君は、尋ね侍らむ」と聞え給ふ。かくて、石作寺の薬師佛現じ給ふとて、多くの人まうで給ふ。大將殿御物忌し給はむとて、いと忍びて一所、御供に人多くもなくて參り給へり。けにいみじう騒がしきまで人まうでたり。

曉には、皆出でぬ。この御局のかたはらに留まりたる人、いとあてはかに故々し

〔語釋〕
〔一〕仲忠の心

〔三〕仲忠が此兒を見れば
兒が目を見合せて

〔考異〕
〔二〕男子の「」の「ナレ

き聲して、上に人二人ばかり、下仕なめり、人にいたうも隠れで、几帳のほころびより見えたるも目やすし。大徳の、御堂のうちより來たれば、乳母なるべし、さやうの大人々々しき聲にて、「此の君の御事よかんべく祈り給へや。親におはする殿に知られ奉り給へと申し給へと、いと心苦しうなむ、おほし歎くを見奉る」など言ふ。逢ふ期あるにやあらむ、哀なる事なりや。親子と見ず知らざらむよ、誰ならむと聞き給ふ程に、八つ九つばかりなる男子の、髪も鬢ばかりにて、かいねりの濃き袿一かさね、櫻の直衣のいたう馴れほころびたるを著て、白う美しけにて、あてに美しけなるが、假粧もなく、たゞ見に立ち出でて、外のかたに立ちたり。よう見給へば、宮の君の顔に似たり。聲はいとあてになまめかしう愛敬づきて幼げに物など言ふ。いと美しけに、み給へば見あはせ給ひて、扇して招き給へば、うち笑みて、ふとおはしたり。内に、いとあてなる聲にて、「かれ呼び給へ。かの君は、何方ぞ。あな見苦し」と言へば、「おはしませく」と言へど

〔語釋〕
〔一〕仲忠の心

〔二〕兼雅が

〔六〕宰相上が

〔考異〕
〔三〕承りにしー承り給ひにし

〔四〕近くー近う

〔五〕賜うてー賜うとて

〔七〕なりーなめり

〔八〕おもひーおぼえ

も肯かず。大將、膝にする給ひて、仲忠「母君は此處にか」と宣へば、見おはすめり」仲忠「誰が御子ぞ」見「知らず」仲忠「御父は、誰とか人はきこゆる」見「右の大殿とかや人は言へど、まだ見え給はず。呼ぶなり。まうでなむ」とて立ち給ふ。あやしき事かな、「西の對の君にこそ見ありしを、たゞ一目見ずて、伯母君なむ、かなしうして取り籠めてし」と宣ひしにやあらむ、あはれにもあべきかな 其にやあらむ、なほ氣色見む、とおほして、硯召し寄せて、

仲忠わたり川いづれの瀬にか流れしと尋ねわびぬる人を見しかな

おはしまさせ給へや。まめやかには、いかでか承りにしがな。しるべは、

いと善うこよに。

とかき給ひて、上に近く使ひ給ふ童して、奉り給ふとて、仲忠「この御返賜うてなむ、わか君を」と聞え給ふ。取り入れさせて見給へば大將の御手なり。いとみじう恥かしう、いかに見給ふらむとおもひ給へど、佛の御驗もあらむと、嬉し

(語釋)
(一) 仲思の心

(二) 兼雅が

(四) 出家などして居給はずば

(五) 私を

(考異)
(一) 思う—思ひ

うおほす。白き色紙に、

宰相上いとおほつかなく思ひ給へらるれど、

わたり川たれか尋ねむうき沈み消えてはあわとなりかへるとも

え覚えすぞ侍る。

とかき給へり。思ひあてに、かの見たまひし手よりは、いとなまめかしう、あてに書きたれど、それなめり、けにまがへる心かな、と思す。たちかへり、

仲思心憂く、もてはなれては思されじものを。今よりは親などこそ頼み聞え

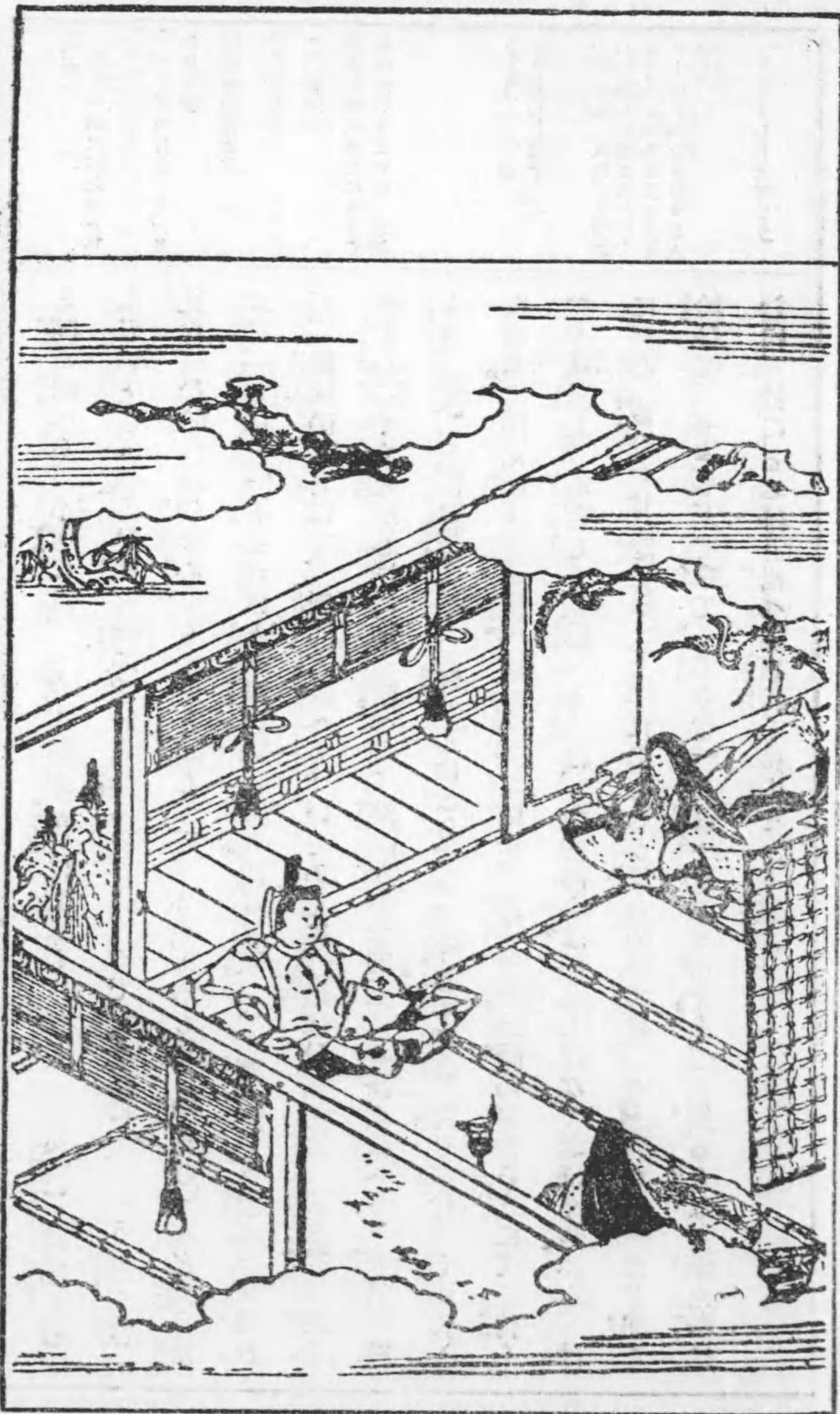
させむと思ひ給へらるれ。いとまめやかに、年頃「いかで物せさせ給ふら

む」となけき聞え給ひて、「思の外ならぬ御さまにて物せさせ給はど、御迎も

いかでか」などなむ聞え給ひたる。心細く思ひ給ふに、いと嬉しく見奉る

も、いと頼もしくなむおほえ侍る。殿をば、忝けれど、然る方に思ひきこえ

給ひて、心やすく思さば、とりわきてとなむ、君には語らひ聞えさする。



樓の上(上)

〔語釋〕
 (一)宮の君に似たりといへる兒
 (二)小君の目より見たる仲忠の儀
 (三)宰相上より
 (四)仲忠が
 (六)兼雅が
 (九)小君の身上につきては兼雅はあてにならぬ故

〔考異〕
 (五)御上―御壁
 (七)今は…人にて―常に
 (八)見苦し―見苦しう

と聞え給へり。小君には、仲忠「まろが弟におはしけれど、子の様に思ひ聞えむ」などいとよう語らひ聞え給ふ。いと思ふやうに、めでたき様にて、かう宣へば、見ならひ給はぬ幼き心にも、いと嬉しくて、小君「まろも思ひ聞えむ」など聞え給ふに、「おはせ」とあれば入り給ひぬ。御乳母など限なく喜ばしう思ふ。日暮れて、屏風のもとにて、對面し給へり。いとあてに、けはひなども、式部卿の君よりも心にく恥かしけに物し給へり。院の女御の御上におほえ給へり。若君の御事も、おいらかに宣ふさま、恥かしけなり。仲忠「今必ず御迎侍りなむ。しかくなむ常に聞え給ふ」と宣へば、宰相上「なにか。自らは今は隠るひたる人にて、侍らむも見苦し。心苦しう見給へる人は、かの御心は頼もしけなくおほえ給ふを、けに御心留めさせ給はむこそは、たのもしう侍らめ」大將、仲忠「いかど」など聞え給ひて、仲忠「やがて率て奉らむ」と宣へど、宰相上「今まづ、然る人など聞え給はむに、けにとおほし出づる事侍らばこそ」と宣ふ。

〔語釋〕
 (一)小君を仲忠が
 (三)小君が
 (四)仲忠が
 (六)宰相上が
 (七)仲忠の
 (八)宰相上に
 (九)宰相上の隱家が
 (二〇)宰相上が

〔考異〕
 (二)給ひて―給へど
 (五)來べき―候ふべき
 (二一)美しうて―うつくしげにて
 ③仲忠邂逅の趣を父に告げて先づ文を贈らしむ。

又の日も、呼び奉り給ひて、御菓物などまゐり給ひて、遊をのみし給ふ。大將の詩誦し給へば、聲いとをかしうて、諸共に誦し給へば、仲忠「いと美しう。誰か教へ奉りしぞ」小君「母君」と聞え給へば、をかしかりけりと思す。三日果てぬれば、出で給ひなむとす。仲忠「何處より参り來べき」と聞え給へば、宰相上「言ひ知らぬ山里のやうになりたるはべり。御覽せむにも、いと怪しけになむ侍る」と聞え給ふ。同じ程に出で給ふ。此の君の御供に、ことに人もなし。御迎に参り給へる、然るべき人、睦まじき人を、仲忠「まるれ」とて添へ奉り給ふ。西の大宮なりけり。一町なれど、いとみじう荒れて、いと幽なり。伯母君も、斯くなむと聞き給ひて、限なく喜び給ひ、人どもに菓物など清けにして出だし給へり。大將は、やがて殿に参り給ひて、仲忠「物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍りつるに、しか此の人なむ、いと美しうてこそおはしけれ。はや、今日明日にても、

〔語釋〕
 (一)宰相上の居處として
 (二)「ぐさ」に古本「具者」と註せり
 (四)多くの子どもを
 (五)仲忠は只一人の子なれど
 (六)正頼の子どもを壓倒する位に
 (八)今更よい加減な子どもを外に儲くるは異な物ならん、「なまよろしく」の「い」かて「な」などあるべし
 (九)「大將」衍文歟。一本「殿」は
 (一〇)その子がさ程よくなくとも
 (一一)仲忠の
 (一二)宰相上の
 (一三)兼雅
 (一四)宰相上の父なるべし
 (一六)外に立派な妻を設けたりとも
 (考異)
 (三)ゆら〜と〜ゆうゆうと
 (七)彼ををし伏す〜彼に劣らむとす
 (二二)給はめ〜給よべかめれ

むかへ奉らせ給へ。東の一の對の、南かけてこそはよく侍らめ」など聞え給へば、兼雅「いさや、心などの思ふ様によくもあらずば、御爲にも面目なくこそは。左のおとどの、ぐさのやうにて、ゆらくとひき連れてありき給ふに、一人なれど、彼をおし伏すばかりに物し給ふこそ、世中の人も、なか〜辛しと思ひたるを、なまよろしくしてあるべき」と宣へば大將、かんのおととも聞え給ふ。俊隆女「すべて御心せばく思ほせばなりけり。たとひ、人の同胞、なま悪くても侍らむからに、それにつけてや、覺の劣らむ。思ふやうに物したまはずとも、それにつけてこそ、いとどかの勝れたる様は、見聞え給はめ。いと心憂き御物言なりや。はや迎へ奉り給へ」と聞え給へば、兼雅「今ははや、ともかくも」と聞え給ふ。大將、仲忠「今朝の御おくり、人奉りつるに、かの住み給ふなる所は、いみじう荒れて心ほそけになむ侍るなる。まづ御文なども、只今は物せさせ給ひてや、よく侍らむ」殿、氣色いとすが〜し、兼雅昔、あはれ、源宰相の、「ゆく末やんごとなき人

〔語釋〕
 (二)誤あるべし
 (四)物の入りたる儘宰相上へ御贈りなされて然るべし
 (六)班絹歟
 (七)小君をよ
 (考異)
 (一)見給〜見奉ら
 (三)心ば〜は〜は〜ナシ
 (五)三重がさねの御衣また人に賜はむと〜三重がさねにもき給はむとて

おはすとも、なほこれ心苦しう見給へ。さらむ、心ほそく物はかなき様にて散り侍らむは、いと悲しかるべくなむ。容貌は、世にもいと多く侍らむ。心ばへは、え憎ませ給はじ」と言ひしものを。何をかは遣るべからむ」と宣へば、仲忠「かく心深かりける御心を、いかにさて頼もしかりける。いでや」とて、仲忠「尾張より奉りたりし辛櫃あらば、入物ながらや、よからむ」とて召し出でたり。片つ方にきぬ廿疋、あや十疋、いま一つ方には、内侍のかみ、俊隆女「こよに物入れむ」と宣ひて、かいねりの綾のきぬ一かさね、薄色の織物のほそなが、はかま〜くだり、山吹のあやの三重がさねの御衣、また人に賜はむとて、またらきぬなど入れ給ふ。御文は、兼雅あさましう、年頃になりけり。おほつかなさ、心より外にてなむ。何處とも知らせ給はざりけるも、理なれど、よろづ心憂く。大將聞えられければ、哀なる人もあやしう。又も見せ知らせ給はざりしかば、いと覺束なき

(語釋)
 (一)「すこし」は「すべし」
 (二)人よりの實物なるが
 (三)珍らしく見給へつ
 (四)此子を可愛そうと思
 (五)召すなりばよき様に御計
 (六)ひありたし
 (七)誤あるべし

(考異)
 (一)よろしからむ一よく
 (二)人のものし一た々今
 (三)人の一人の
 (四)給ひつ一給ふ
 (五)つたへむ一つたへて
 (六)あひなきにや一あ
 (七)ひなき方や
 (八)よりよく書きた
 (九)れ一よりよく書きぬれ

を、今然てのみは。まで給ひなば、いとよろしからむ。心安くてわたり給ひぬべき所なむ侍る。御むかへ、すこし、心苦しき人の戀しさも、すみなれし垣ほ離れて年ふれどわがとこなつはいつか忘れむ。さりともとかや。さて、これは、人のものし給ふめる。何にかあらむ。とて、早くかの御方に心寄せにてありし、大和介なる人を召し出でて奉り給ひつ。殿人出であひて、珍らしがり、御返り。

宰相上めづらしよくみ給ひつるは、けに覺東なき程になりけるにや。もろともになれにし中の床夏を露とおきふしわれぞ忘れぬ。心苦しく思すなるは、ともかくも持てなさせ給へかし。これはまたやつたへむと見給へるも、今更にあひなきにや。と聞え給ひつ。御返、かんの殿に、これ見給へ。手こそ、この氣ぢかく見し人より、よく書きたれ。見所ある様にをかしく書きたるや」かんの殿、俊隆女け

(語釋)
 (一)我が宰相上を愛した
 (二)仲忠は
 (三)俊隆女が死後の事をいふを思みたる也

(考異)
 (一)こゝには同胞など言
 (二)ひとりわきて思ひ
 (三)なりさとりわきて
 (四)こそ一ことに
 (五)明の夜ぞおはしたり
 (六)あすの夜とておはした
 (七)八様ににりにけり一様
 (八)なりけり
 (九)音せず一音もせず

仲忠宰相上を訪ふ。父に自ら宰相上を迎へんことを勧む。

に、いとをかしけなり。こよには同胞など言ひ睦まじき人もなし。心細きに、心ざまなども、思ふやうにおはすなより。とりわきて思ひ聞えば、大將をも同胞のやうに思ひ給ふべし。怪しく、大人々々しくなられたれども、まづはかなき事も、己と言ひあはするに、亡くなりたらむ世にさうぐしと思ひ惑はむもいと哀なり」と殿にも聞え給へば、兼雅「ゆよしき事はうたてあり。大將あひ思ひ、互にうしろ安く思ひ給はむには、いとよろしき心様ぞ。あはれ宮の君こそ、やんごとなく思ひ聞えし効なく、物はかなく、いふかひなけれ」など宣ふ。

畫詞 ことば 東の一の對。大將の御物忌などに、時々わたり給ふ所なり。さるべき様にしつらはせ給ひ屏風どもなど立てさせ給ふ。大將殿明の夜ぞおはしたり。木ども、前裁などは、數あまた有りけれど、けに山里の様ににりにけり。對ども、廊などかたぶき、怪しき様なり。人の音せず。東の方によりたる格子の、二間ばかり明きためり。坤の戸より見入れ給へば、中

- (語釋)
- (一)これ宰相上也
- (四)小君
- (七)給ひつゝとは給ふ
- (八)仲忠が
- (九)宰相上が
- (一〇)小君

の障子も壞れたり。南の隅より上りてのぞき給へば、東の妻戸の簾あけて、人々物めしるたり。母屋の方の柱に、いと濃きうちぎの艶やかなる、一かさね、薄き縹のあやのはりわた重ねて著て居たる人のかみ、絲をよりかけたる様に艶やかに長けなり。額にかよれる程、いと美しけなり。そびやかにまめかしき容貌、内侍のかみの御様躰かたちに見えたり。ありし君、かいねりの濃きうちぎばかり著給ひて、鶴脛にて、いと小くをかしけなる琵琶かき抱きて、前に居給へば、いと美しと思ひ給ひて、髪かき遣り給ふ手つき、いと美しけなり。此の君、琵琶をいとをかしくらうくじく弾き給ひつゝ。君、宰相上、今さへ、この小き琵琶をひき給ふは、いと見苦しからむは」と宣へば、小君、然ば御膝に居てひき侍らむ。たどは倒れに侍り」とて大なるを弾き給ふ。いと上手なり。これを弾き給ふを、殿に見せ奉らまほしくおほえ給ふ。大將うちしはぶき給へば、驚きて、几帳ひき寄せ給ひて、此の君して、御裯出だし給へば、仲忠おはせ。忝し」とてかき抱き

- (考異)
- (一)濃きこやろき
- (三)長げなりなまめかし
- (五)思ひし
- (六)をかしくらうくじくをかし
- (一)給へば給へり

- (語釋)
- (二)宰相上
- (六)あらむやとも
- (七)近々迎取るべしなど
- (九)父が晩年に我身の上を氣遣ひしを今は父も死したる事なれば假令どうなりても苦勞はなしの意
- (一〇)私が別に父に勧めたる譯でもなし
- (二)宰相上の方では俊隆女を何とも思はずとも
- (考異)
- (一)明日なむ侍るべかめ
- (二)明日なむ侍るべかめ
- (三)心
- (四)見給ひつらむ見給へちむ
- (五)は
- (八)思ひし
- (一)給へば給ふも

て、仲忠いで、その御琵琶持ておはせよ。たど今なむ参り來つる。今は、なにかは恥させ給ふらむ。やがてや参り侍るべき」と聞え給ふ。仲忠、御迎は、明日なむ侍るべかめる」など聞え給ふ。母君、いと恥かしく、あさましかりけるわざかな、然ばかり心、恥かしけにおはする人の、いかに見給ひつらむ、と思す。御返りは、宰相上、承りぬ。只今自ら聞えさす」とて母屋の障子のもとにて對面し給へり。今世にあらむやうも思されで歎みにしを、いかに聞えさせ給へれば、「ちかき程に」などまで宣ふらむと思ひ侍れば、聞えさせむ方なく、なほも何とも思ひ給へ侍らで、明暮もことに見給ひ入れざりしを、ほれくしくなられたる人、殘少くおほえ給ふ、さらにいと歎かしきことに宣へるを、今は後安くなむ」と聞え給へば、仲忠、それこそはいと理に侍るなれ。ことには、殊に聞ゆる事も侍らず。まことに、年頃覺束ながり聞え給ひつ。仲忠が母ものし給へど、いと心細く、ただ一人物せらるれば、あまた物せさせ給ひける御中に、何とも思されずとも、と

〔語釋〕
 (一)母の性質をいふ
 (五)あて宮
 (六)「御心にもすこし」歎
 (七)戀慕の情をもほのめかしたげれど
 (九)いと便なき事」歎

〔考異〕
 (二)御心劣もやと思ふ給へる「御心劣るやと思ふ給ふる中」
 (三)聞えさせなむと「聞えさせむなど」
 (四)めでたく「めでたう」
 (八)べけれど「べけれど」
 (一〇)「くだり」一つには

りわきて思ひ聞えさせむ。睦ましく思さるべきものなり。いま近くても見給ひてむ。古めかしく、いと心安く、御同胞などのやうに思されむに、いとよくなむ侍るべき」など聞え給へば、宰相上「いと嬉しきことにも侍るべきを、近くては御心劣もやと思ふ給へる。ことにも、いと心苦しうてもものし給へば、「小さい人は、添ひたる人も侍りなむ。餘所ながらも、今は頼み聞えさせなむ」と聞えさせ給へ」など宣ふ様の、いとめでたく、限なき人の御けはひにも通ひたれば、いとまめやかな御心、すこし僻言も聞えつべけれど、有るまじく便なき事、と思ひかへし給ひつ、然も聞え給はず。仲思「いとなき事。時々はわたらせ給ふとも、此度は、いかにか渡らせ給はざらむ」宰相上「今それは此頃過してなむ」と聞え給へば、仲思「いとあしき御事に侍るなり。かの御本意なく侍らむ」など聞え給ひておはしぬ。夕つけて、衣箱「よろひに、唐綾の翟麥のうちぎ、濃紫の織物のほそなが、三重がさねのはかま「くだり、若君の御料に、いと濃きうちぎ「かさね、薄き蘇枋の綾

〔語釋〕
 (一)「母君」は「伯母君」の誤なるべし

(二)宰相上の氣安き様にと仲思が心配するものと見ゆ
 (四)仲思の歌の戀を含めるを答めたる也
 (五)御返事だけ頂戴すべしとして

〔考異〕
 (三)「ばかりは」は「ナシ

のうちぎ、櫻の織物の直衣、躑躅の織物のさしぬきなど入れ給ふ。女のはかまの腰に、あかき薄様に、仲思人知れぬむすぶの神をしるべにていかどすべきとなけく下紐とて御文もなし。いと小舎人童「御返賜はらむ」といふ。宰相上「いと恥かしく、あやしき有様を思しはかり給ふ事」と宣ふ程に、これを見つけて、あさましく覺え給へば御返も聞え給はず。母君「いとあはれに忝く、何事も思すまじく、萬に、此の御心の斯うもてなし給ふにこそあれ。なほしるしばかりは宣へ」と切に宣へば、たど斯く、宰相上「うちとけてうらもなくこそ頼みけれ思の外に見ゆる下紐様々にも見給へられて。など聞え給へり。童に、躑躅のこうちぎ、若君の御今やう色のうちぎ「一重添へてかづけ給へるに、使童「御返のかぎり」とて取らねば、強ひて取らすれば、歩み避り

〔語釋〕
 (一)「世の常にも」歎
 (二)宰相上が来られなけれ
 ば不都合なるべき由

〔考異〕
 (三)「さらば」さらば一
 さらばに
 (四)はや一をや
 (五)「らうたう」らうたう

て、お前の村薄の上にうち懸けて走り出でぬ。「いとされて、くち惜き童かな」と
 言ふ。御返参らすとて、童云々なむして、逃けて参りつる」と申さすれば、仲思「い
 とをかしくしたり」と仰せられて、御袖一かさね賜はす。御文見たまひて、「され
 ばこそ、悔しう、何せむに、世の常もこそ思ひ給へ、かよる氣色を見えぬらむ、
 と恥かしくおほえ給ふ。」

又の日、殿に参り給ひて、仲思「昨日かしこにまうでて侍りき。いかど物し給ふ、
 見給はむとて、聞えしかば、自らはおはすまじけにこそ宣ふなりしか。度々、さら
 ずば便なかるべき由聞えしかば、しかく宣ひしを、おはしましてなむよく侍る
 べき」と申し給へば、兼雅「怪しき事かな。などか然はあらむ。恐ろしげに、頭も
 なりにたらむ。容貌もめでたかりしが、あはれ今まで物し給ひける。琵琶は今の
 世に、さばかり弾きたる人はあらじはや」と宣へば、仲思「そよや。わか君こそ、
 しかく物し給ひしか。理にこそ侍るなれ」殿、兼雅をかしき事かな。らうたう
 (五)

〔語釋〕
 (三)兼雅を宰相上の所へ
 (五)織物に」歎
 (四)なよとか一なやとか

〔考異〕
 (一)「もとど」との
 (二)「もはせめ」もはせ
 め

兼雅自ら行きて宰相上
 を三條に迎ふ。宰相上腹
 の小君、兼雅に懐かずし
 て仲思を慕ふ。

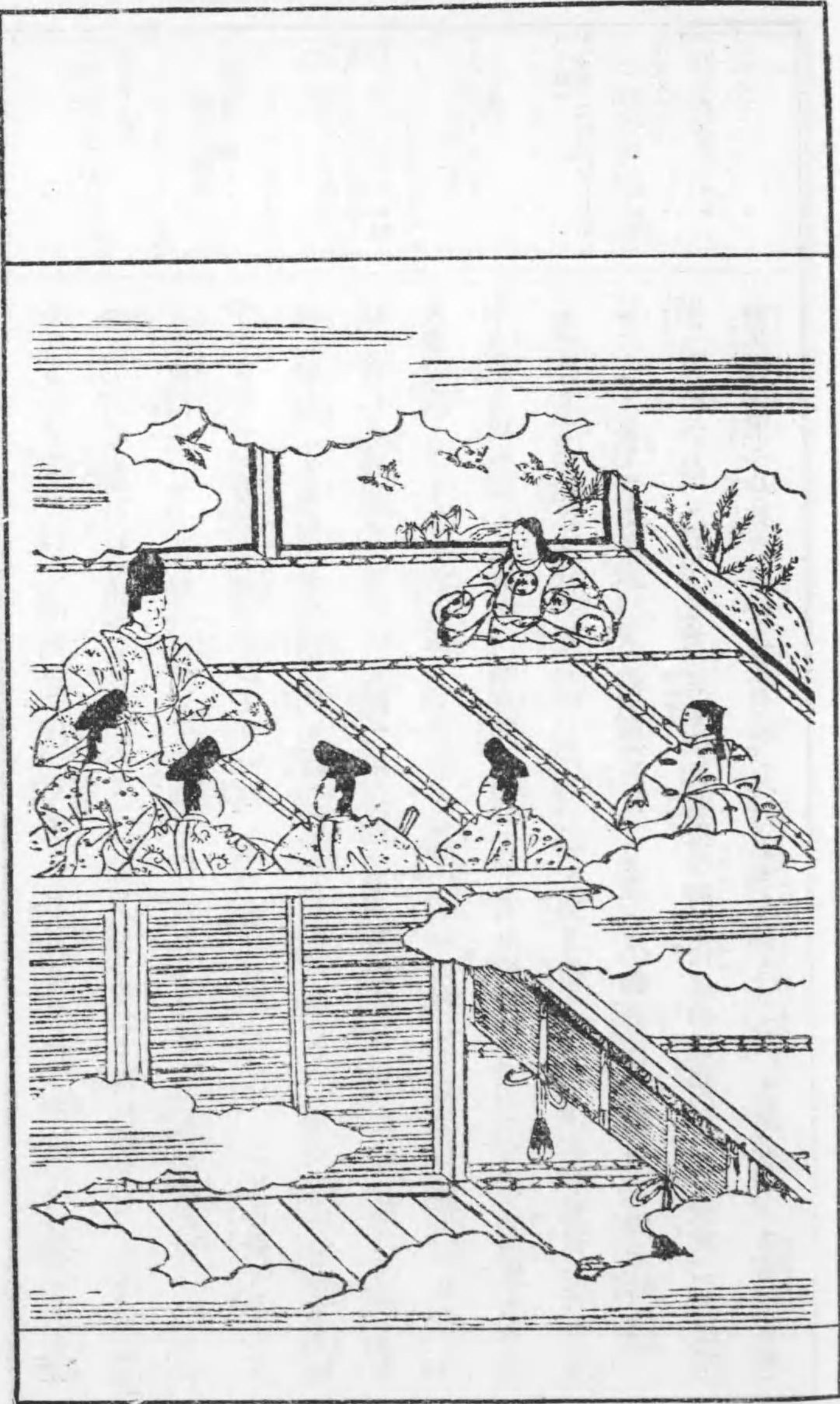
して教へ給へるなめり。母君もいとよく弾きき」と宣ふ。かんのおとど、俊隆女、日
 暮れたらば、早うおはして、なほ一度にわたし奉り給へ。いでや、あやしく心
 憎き人、さまざまに集め給ひける程よりは、なまめかしくをかしくこそおはせめ。
 左のおとどは、いと愛敬づき、をかしくこそ見え給ふめれ」殿、兼雅「いでや、そ
 の大殿こそ、目につきて覺え給ふらむな。身の上めでたく、今めかしくおはしま
 すを見奉り給ひて後こそ、己をも思ひおとして、かく恥のかぎり宣ひ出だせ」と
 宣へば、俊隆女、例の事よ。さりとして、病したる理なれば。口ふたけ」とて薫物な
 どよくせさせ給ひてやり奉らせ給ふ。

御車にておはしたり。昔見給ひしよりも、いみじうなりにけり。几帳などは、い
 と清けなり。たど入りに入り給へば、燈よき程にて、母屋に、いとなよよかななる
 鞋に、柳の織物のうすき、織物かさねて著て居給へり。わか君は、いと清けに装束
 かけて直衣のかぎり著給へり。御髪は臍すぎ給へり。さがりば、いと清らなり。

- (語釋)
- (三)兼雅を
- (四)小君を
- (五)小君を
- (六)宰相上が
- (七)兼雅が
- (八)我も行かねばならぬか

- (考異)
- (一)小くして「て」ナシ
- (二)きちやか「きよら」きよらか
- (九)何せむにか「なてふにか

燈の下に立ち寄りありき給ふ。見給へば、おとな四五人ばかり、小くてをかしけなる童などあり。いと目やすし。昔いときらやかなりし人の、いとめでたくてしつらひ、掣取り給ひしを、思ひ出で給ふも、いみじう悲しうおほえ給ふ。兼雅「わか君はや」と宣へば、大人しくつい居給へり。兼雅「此のわらは、その燈取り寄せよ」と宣へば、持て参りたり。見奉り給へば、大將の兒なりし時、かくやありけむと、美しげに恥かしき顔の笑み給ふは、けに愛敬いとにほひやかなり。女君に、兼雅いと怪しく、またも見せ給はで、ひき隠し給ひてしこそ」など年頃の物語など聞え給へど、人のやうにも恨み聞え給はず、たゞいとおいらかに恥かしう、いらへ聞え給へば、なかく宣ふべき事もなし。いと哀に昔思ひ出でられ給ふ。しばし打臥し給ひて、兼雅「夜更けぬらむ。いざ給へ」と聞え給へば、宰相上「こゝにもや、さらば」兼雅「さて参り來つるぞかし」と宣へば、宰相上「何か、心靜に。かつぐ、然ば早う」と聞え給へば、兼雅「怪しき事。さらば、何せむにか。また幼き一人をばい



〔語釋〕
(一)小君が成長してから
連れゆき給

(四)「理は」歟

(六)兼雅が今日引越せと
勤めらるれど伯母君と一
緒でなければ行かぬ積

(七)誤脱あるべし

〔考異〕
(二)大人々々しー大人し
(三)いかでかーわが君い
かでか
(五)「は」は「ナシ

かでか」と宣へば、宰相上「さらば、今すこし大人々々しからむ程に、物せさせ給へかし。心細けにもものせらるゝ人を、いとうしろめたく侍ればなむ。なほ後に」と聞え給ふ、兼雅「それも、やがてもろ共に、物せさせ給へ。人も住まで、いと心やすき所ぞ」女君、宰相上「いかでか」殿、兼雅「昔には似給はず、いと心憂く思しなりにけり」とまめやかに恨み聞え給へば、うち笑ひ給ひて、宰相上「昔の心のやうには、實にえあらずこそは」と聞え給へば、兼雅「吾が佛」理には、聞ゆる限もあらず。疾くく」と宣へば、宰相上「かよる所に、一人離れておはせむが、いと心苦しう覺え給へばなりけり。然ば聞えむ」とて入り給ひて、宰相上「なほこの度とあめるを、わたり給はずば、更に物し侍らじ」と聞え給へば、伯母「あな見苦し。さらば」とて出で立ち給ふ。大將の御許に、兼雅「その御車、只今賜へ」と聞え給へば、奉り給へり。これの女君、若君の御乳母を御車には伯母北の方、御親族におはする大輔の君、少將などいふ乗りぬ。次におとな三人、童一人乗りぬ。さるべき御

〔語釋〕

(三)女一宮

(四)兼雅

(六)誤あらんか、「さら

一本「さる」

(八)仲忠

(九)兼雅

(一〇)兼雅の處

(一一)此處誤脱あるべし

〔考異〕

(一)ありつればーありしかば

(二)御方ー御前

(五)今めかしくー今めかしき

(七)給へればー給ひつれば

供十餘人して、いときらしくしてわたり給ひぬ。大將、仲忠「なにか、曉がたにはなり侍りぬらむかし」と申し給へば、兼雅「いとうたて、渡らじとありつれば、若人も、もろ共に、とて強ひてなむ物しつる」とてかんの殿の御方へおはせむとし給へば、仲忠「早しづまりて人も寝入りて侍らむ」とてみな思ふやうにおろしおきて、出で給ひぬ。宮に、仲忠「あやしく夜更け侍りにけり、おとど、今めかしく古事あらためさせ給へるとて」女「何事ぞ」仲忠「さらの人なり」など聞え給ひて御殿籠りぬ。かくて、参り給へれば、若君の、此の殿をば「父こそ」とて、睦まじうまとはし奉り給ふ。居給へる所にも、いと近う睦れ居給へり。殿をば「殿」と聞え給ひて、ことに睦れ聞え給はず。小弓射給ふ日、大將殿の君たち、大殿へあまた参りたり。梨壺の宮の君、此の若君の、いと清けに装束きておはする、人々若君を「いと美しけにおはするは誰ぞ」と問ひ聞ゆれば、「おとどの子少く、さうぐしとて物しためる」と聞え給

(語釋)
 (三)「なぞとて」なるべし
 (六)小君を
 (七)琵琶を請求して

(考異)
 (一)似給ふめり—わたらせ給ふめり
 (二)おはすめる—おはすめるは
 (四)大將殿—「大將」ナシ
 (五)宮の君もかやうにこそ—宮の君もわがやうにこそ—宮の君にもさやうにこそ

へば、「かの御子か。いとかしこう似給ふめり。宮の君はらうくじく、これはなまめかしくおはすめる」などて呼び奉り給へば、おはしたり。御髪も、なかに長く清らなり。大將殿、宮に、仲思、参り給はむには、指貫著てこそ」と宣へど、宮も、女「宮の君もかやうにこそ」とて著せ奉り給はぬなりけり。案内も知らぬ人は、「大將の御腹なめり」と聞ゆ。宮笙の笛、宮の君横笛、皆いとめでたく吹き給ふ。「此の君何かし給ふ」と聞え給へば、「琵琶ひき給ふ」と宣へば、「いとをかしき事かな」とて大殿の侍従大納言の御太郎、藤宰相の御弟四位の少將、大宮の御方に琵琶聞え給ひて、「これ」とて弾かせ奉り給へば、小君人に抱かれでは弾き侍らず」と宣へば、「おはせく」とて抱き給ひて、弾かせ奉り給へば、いと面白くひき給ふ。笛にひきあはせて、三所あそび給ふ。人々、「いと珍らかにをかしき御有様どもなり。内裏などに御覽せさせばや。いみじき物の上手は、またも出で給ふべき所なめり」と感じあはれがり給ふ。大殿も、さ

(語釋)
 (一)兼雅の心
 (二)小君
 (四)兼雅が
 (六)北山の空洞の住居の時、事をいふなるべし

(考異)
 (三)あなれ—あんなれ
 (五)見捨てて—うち見捨てて
 (七)心憂しと—心憂くぞ

まなくにうつくしう見給ふ。御遊の具によかめり、大將子すくなう物し給ふに、かたみに行末を思ひ後見るも善かりけりと思す。入り給ひて、兼雅對の子を人々のをかしと言ひつる。あやしきは、大將見つけて侍りし、宮などにも睦れあそび給へるめり。我をば親とも思はず。子は、誰とも言はで、つきたればこそらうたけれ」と宣へば、俊隆女、理にこそあなれ。小き人は、たと思ふ人に睦るよものなり。一日見奉りしかば、對の簀子にて、宮をいだき奉り給へりしに、宮の君「まろもく」とありしをいだき給ひしに、打見あけて立ち給へりしを、小き心地に見捨てておはせしかば、一人勾欄にながめてなむおはせし。などか、この君も、時は抱き奉り給はざらむ。すべて、かよる御心のあればこそ、月を経しかど、物の思ひ出でもなくて、おはして、いみじき目の限見しぞかし。涙落ちぬべく、つらき氣色みえ給ひしか。大將は、宮をも誰をもわかず、さまざまにこそ思ひ聞えたれ。かの伯母君などの見給はど、心憂しと思ひ給ひなむ。人の歎負ひたまはず

- (語釋) (一) 西あるべし (二) 俊隆女の侍女の侍従といふ女 (三) 宰相上の侍女の少尉といふ女 (四) 伯母君等のいふ也 (五) 「御心の」の「の」衍文なるべし (六) 母俊隆女の (七) 兼雅 (八) 小君が (九) 宰相上を兼雅が迎へて已を迎へざるを (一〇) 今「り」のひげといふ草
- (考異) (一) たとしへなく「し」ナン (二) こそ「こそは」 (三) つらみてかうの「た」みてからの
- 兼雅梅壺を三條に迎ふ。俊隆女に對する他の妻妾たちの嫉妬。俊隆女、兼雅に愛を他の女に分たんことを勧む。

普く情あり、世に久しくおはせばこそ、己なくとも、大將の御爲にも頼もしう善からめ。顔容貌の、さ思ひ給へらむに、物しく心も見ゆるもなし。いとたとしへなく思ひ給はむをこそ、人はうたてなむ見奉らめ」などうちくくに聞え給ふ事を、かの御方の侍従の君、對の御方の少將の君とは、從姉妹どちなれば、往きあひて語れば、伯母君も母君も、「嬉しき事」とよろこび給ふ。「大將の御心の有様かたち、よくおはするは、この御心はへの斯うおはすればこそ有りけれ。この殿の御心は、いでや。心深からざらむ人は、人のいはで思ひたらむ心ばへなどこそ思ひ知り給はね。うべたど大將殿をのみ思ひ聞えたりけり」など宣ふ。かくて後、梅壺の更衣と聞えし、怨み聞え給ひて、山菅をつよみてかうの扇、薄様の中に入れ給ひて、梅壺うらやましおなじ籠の山すけもわきてぞ人はおもひかさぬる思ひ出づること多く。

- (語釋) (一) 女三宮付の女どもは (二) 兼雅 (三) 俊隆女の方に (四) 女三宮

- (考異) (一) 安からぬ世の中かな「安からず世の中もぢきなう」 (二) 給ひて「給うて」 (三) よろしきに「よろしく」

など宣へば、御かへり、兼餘所ながらおもひかさぬる山菅をひとつにつらき例とやする目もたどくしく、今は覺え侍るを、なほ昔のやうに、近き程にやはものせさせ給はぬ。とて、後にむかへ奉り給ひて、東の二の對の、北の廊かけておはす。なかにも宮の御方の人々は、「安からぬ世の中かな。あはれ古を思ひかへせば、わが君かよる御住居をせさせ給はむとや思ひし。品にもよらずや」など言ふを、かの殿の人々聞きてまねび聞ゆれど、俊隆女「あなかしこ。ゆめ聞き入るな。下人は然ぞあなる」とていと清らにもてなさせ給へり。殿は、一月を、二十五日は此方に、いま五夜をば宮の御方、この對などには通ひ給ひて、晝も此方にのみおはするを、かの殿、俊隆女「なほこれなむ、いと見苦しく見奉る。今は心しづかに、時々は行もしてあらむ。宮の思すらむこともあり。これよろしきに聞え給へ」と大將に聞え

〔語釋〕
 (一)兼雅が
 (二)仲忠が
 (三)「背き給ひ」なるべし
 (六)兼雅が俊隆女の處にのみ居るは
 (一)外の女の許へ兼雅が通ふを俊隆女が不満に思はゞ遠慮もあるべけれど意敷

〔考異〕
 (四)給へるを取り給へるをなほ取り
 (五)見給へるを「見給ひつるを」
 (七)十日十夜
 (八)十日十夜
 (九)給ふ人も「給ふも」給はむも
 (一〇)ものしたる事はまた「またものしたる事は

給へば、仲忠いとよう仰せられたり。爰にかくて、わが御儘にておはします。仲忠侍り。今は人とかく申すべきならず、聞えにくきを、宣はせむ序に、申し出でむ」と宣ふに、入りおはしたり。いとをかしと見奉り給へり。仲忠人々の、あるは世を背き給ふ、所々に幽にてもものし給へるを、取り申すまゝに、目やすく斯くものせさせ給へるを、いと嬉しく見給へるを、一方にのみおはしますは、いとものしき様に侍り。此方に十日、宮の御方に十日、いま十日を三所におはしますせむ」と聞え給へば、うち笑ひ給ひて、兼雅「いとあやしく、果は有るまじき事をさへ物せらるゝ。昔若かりし時こそ、さまよひありくも目やすく、見まほしく思ひ給ふ人もありけめ。今は身の覺えも花やかならず、腰も痛ければ、え歩くまじ。一所にものしたる事はまたいとをかしう、いかど人も思ふらむ、とてこそあめれ。あるまじき事なり」と宣へば内侍のかみ、俊隆女、否や。御心さりとていかどなど思はばこそあらめ。人々もつれぐにながめ給ふらむ。さてうち通ひ給ひておはせば、

〔語釋〕
 (一)かく俊隆女一人を守り居りても手柄でもあるまじ
 (二)宰相上
 (三)兼雅が
 (七)梅壺
 (考異)
 (四)十五夜は「十八夜は」二十日をば
 (五)外は「外をば」
 (六)などには「にも」に

よくなむあるべき。左のおとどは、宮、大殿、いとうるはしくこそ、十五夜つおはしつゝ、子どもいづれともなく思ひかしづき給へ。かくて添ひおはせむからに、かしこくやは有るべき。そが中にも、宮の御方は、院のとりわきて思ひ聞え給ひて、をりくも聞かせ給ふらむ、いと忝し。對の君などは、御心さまなどもあはれに見え給ふ人なめり。そればかりには、なほこゝに聞えむまゝに、人よりは殊にもてなし給へ。大將も「伯母君の、泣くくよろこび給ふなる、おのれ一人して思ひ聞ゆるも、ゆよしくのみ覺ゆるに、心深からむ人には、思ひおかれ給ふらむぞ嬉しき。行末に行きあふ事もあるものなり」など切に聞え給へば、十五夜は此方に。その外は、宮の御方などには「など宣ふを、兼雅さばその程に、思ひくにおはせむ」と宣ふ、兼雅「更衣の方は、らうくじく、くせくしう物し給ふ。式部卿の君は、心おきなくて、乳母の物言なめし。對の君は、おいらかなれど心深ければこそ人々の御爲にも心安けれ。そればかりは、けに宣はむに隨はむ」など、

仲忠、小君を携へて参内す。東宮小君を携へてあて宮の許に至る

〔語釋〕

(一)仲忠の男の子

(二)誤あるべし

(八)東宮腹

〔考異〕

(三)御装束し給ひびづら結ひ給へれば―御装束はし給ふびんづら結ひ給へるは

(四)仕うまつれ―つかまつれ

(五)給へば―給ふ

(六)宣はずれど―宣へど

(七)いで―いでて

宣ふ。

かくて、内裏東宮にも、若君見まほしうせさせ給ひて、度々宣へば、おのれは、若小君ゐて参らせよとて、参らせ奉り給ふ。かんの殿の御方にて御装束し給ひ、びづら結ひ給へれば、いま少しをかしけに、めでたくおはす。率てまるり給へれば、内裏、東宮も一所におはしまして、「いと美しき人なりけり」と宣はす。有様らうたけにをかし。琵琶召して、「弾け」と宣はす。しばし御答もし給はねば大將、仲忠「なほ仕うまつれ。まだいと幼く侍り。大なるは、人に抱かれてなむ弾き侍る」と奏し給へば、女房たちあまたさし出でて見る。源中納言、遠「この聞きつるはこれか。いと美しかりける人を、今まで見奉らざりけるよ。この膝にを」と抱きて弾かせ給へば、少しばかり、いとになく弾きてさし置き給ふ。上も宮も、「やがて留めむ」と宣はずれど、仲忠「まだいと幼く侍りて」と奏し給ふ。中納言忍びやかに、遠「いで、その宣ふ宮とて、かたじけなけれども、此の若君にはまさり給はじ。如

何に」と宣へば、仲忠「さらに、いと見苦しう。たと宮の御真似をして、さがなう

心強く、なまめかしきけも侍らず。されば、宮にも、あからさまにも率て参れば、

見給ふとて、「生れし時より心恐ろしきものと見き。犬宮の同胞にはあらざめり。

率て去ね」とぞ宣ふ。おとどはたど心にまかせて見給ふ。不用のものなり。此の君、

仲忠らが教へむことも聞きつべし。手などもいと美しう書き、聲もいとをかしうぞ

侍る」東宮「藤壺の御方にいざ」と率ておはす。大將「参り給ふ。内にたど呼びに

呼び入れ給ひつ。几帳ばかりひき寄せておはす。いみじうつくしがかり給ふ。大

將「孫王の君に、仲忠「いと幼き人参り給ひにけり。呼び入れ給へ」孫王の君、「いと

美しきは、誰に奉らせ給ふにかあらむ」とて隠もあらせ給はざめれば大將、仲忠「あ

らじものを、くは、見給へかし」とてむき給へば人々笑ふなり。仲忠「まことはけさ

のたまひもあなれば、物のはじめにゆよしきを、いかでか」とて、仲忠「まかです

せむ」と宣へば、あて宣「あやしの事や」とて忍びやかに笑ひ給ふけしきも聞ゆ。

〔考異〕

(一)あらざめり―あらざりけり

(二)仲忠らが―らしナシ

(七)給へば―給へれば

〔語釋〕
 (一)東宮
 (二)仲忠が
 (三)小君の様子
 (四)あまり東宮と違はぬ
 (五)小君が頂戴して
 (六)兼雅
 (七)人によりて等差を
 つけて贈れと宣へどの義
 歟

〔考異〕
 (一)と宣へば一とのみ宣へば
 (八)小君は一宮は
 (九)父こそ一はこそ
 (一〇)かくて一ナシ
 (一一)人は一人の

俊隆女、太宰大貳の贈物を人々に分つ

仲忠「疾くく。と宣へば、孫王さのみやは。まことは、いと美しき御有様を、つねに参らせ給へ」とて宮もろ共に出で給へり。見くらべ奉らせ給ふに、うつくしけに、あてにけだかき事の、いとことの外にもあらぬを、子にひき連れて見むぞ、面だたく覺え給ふ。銀、黄金のわらはの、相撲とりたる形を得給ひて、まかで給ひぬ。

かんの殿に、仲忠「云々なむ」と聞え給へば、いと嬉しとおほす。宮の君は、殿をば「父君」とてむつれ奉り給ふ、大將をば餘所に見奉り給ひて、「大將参り給ふめりや」など聞え給ひてことにさし離ち給ふ。小君は大將をば「父こそ」とつけ給ひて、いとようし奉り給へば、をかしがり美しがり奉り給ふ。かくて大貳のほり来て、殿に銀の透箱二十、唐綾沈のみねに螺鈿すりたる櫛など奉りたり。内侍のかみ、宮の御方に七つ、我が御方に四つ、御方々にも二つ三つづつくばり奉らせ給ふ。殿は、人の御次第に宣へど、俊隆女「然べき事なれど、人は

〔語釋〕
 (一)とて奉り給ひつし歟
 (二)誤あるべし
 (四)末詳。一本「をほのと」
 (五)俊隆女が宰相上に逢ひて

〔考異〕
 (三)ことを一ものを
 (六)給へば一給ふ

仲忠、大宮に琴を教ふべき心構を女一宮に語る。母を訪ひて同じ事を語る。兼雅来合せて夫婦古を追懐す。

心こそ恥かしけれ」とて給ひつ。かれらの透箱一つにはからあや五疋、いま一つには沈紫壇の櫛あるを、對の御方に奉らせ給ふとて、かんの殿、俊隆女思ひやる心をつけの櫛ならばおほつかなさを嘆かざらましとて奉り給へば、御返、宰相上そのかみにふりにしことを改むるこれこそつけの小櫛とは見れ

おいのと思ふ給へらるよ。と聞え給へり。さまざまに心にまく申しかはし給ふ。いと忍びて然べき折には、此の御方には對面し給ひて、かたみに心ふかう、哀に聞え契り給ふ。大將は、院内裏、東宮など、おほつかなからぬ間に参り給ふ。また、動すれば召され給へば、心地さへ世に心しづかなる折なくおほえ給ふ。宮に聞え給ふやう、仲忠「身に思ふ事侍りし時、かくて侍りてば、心のどかに思ひなり侍りしを、大宮うまれ給ひて後は、いよく命も惜しう思ふ事あるまじと思ひ侍りしを、よく思

〔語釋〕
 (一)わが人に勝りたる心地すといふのが御分りなさらぬは犬宮を何とも思はれぬからの事
 (二)犬宮が物心つかば
 (三)人々だにこそあれなるべし
 (四)仲忠は心静に犬宮に教ふる暇はあらじ

〔考異〕
 (一)何をしをナシ
 (二)心ナシ
 (三)事かんのあととはは事となむ歌き侍るかんのあととはは事となむ歌かし侍るかんのあととはは
 (四)心ナシ
 (五)心ナシ

ひ侍れば、世の中に物思ふにこそなりぬべけれ。身に限りては、人にまさりたる心地こそし侍りつれ」宮、女「何を」と宣へば、仲忠「犬宮などをおろかにおほしたるにこそ侍るめれ。まだ這ひるざり給ひし時だに、此の琴を見たまひて、いと弾かまほしうし給ひき。此の年頃は、月日も疾く過ぎなむ、ものの心も知り給はば、心静にて然るべからむ所をつくりて、率て奉りて、習はし奉らむ、と夜は目をさまし、晝はこれを思ひめぐらし侍るに、本意のごと、静なるべい事の、難かべいをなむ、如何様にせまし、と思ひ侍る。來む年は七つになり給ふ。今までこれを教へ奉らぬ事。かんのおととは、四つよりこそ弾き給ひけれ。御袴著の事急ぎ侍りしに、ことにもあらざりけり」となけき聞え給へば、女「けに、身にも思ふ事なり。然しもあらぬ人々にだにこそあれ。世の常ならむは、いとこそ効なかるべけれ。そこにこそ、え心静に物し給はざなれ。かんのおととこそは」と宣へば、仲忠「獨り離れてもえおはせじ。又下れる手よりこそ習ひ給ふべけれ。昔

〔語釋〕
 (一)俊隆
 (二)俊隆

〔考異〕
 (一)時に一時にこそ
 (二)こそナシ
 (三)はのかに鳴くはのかなる
 (四)思ひあはせし思ひあはれみ
 (五)彈き出づればこそひき侍れば

の朝臣は、七人の山人の中の劣りの手よりこそ、勝れたる極の手をば弾きとり給ひけれ。仲忠が弾き侍るを、院の上などはよしと仰せらるれど、かんのおととを同じう宣へむとも覺えずこそ侍れ、かの弾き給ふ時には、治部卿いかに弾き給ひけむとこそ、昔戀しく思ひやられ侍れ。かんのおととは、如何は。一所におはして、まづ仲忠が覺えむ限をこそは、習はし奉らめ。春は霞ほのかに鳴く鶯の聲、花のほひを思ひやり、夏のはじめ、ふかき夜の郭公の聲、曉空のけしき林の中を思ひやり、秋の時雨、夜の明かなる月、思ひくの虫の聲、風の音、色色の紅葉の枝をわかるよ折のけしきを思ひ、冬の空さだめなき雲、鳥獸のけしき、晨の雪の庭をながめ、高き山の頂を思ひやり、したる池の下の水をあはれび、深き心たかき思ひも、諸の事を思ひあはせ、世の中の、すべて千種にありと見ゆるものの覺ゆるもの、又時に随ひつよ、色衰へ、久しくなり、又むなしくなりぬるものを、心に思ひつゞけて、琴の音に弾き添へむと、思ひをなして弾き

〔語釋〕

(一) 女一の強くやうに

(二) 「など」衍文なるべし

(六) 誤あちんか「みはし」一本「みはち」

〔考異〕

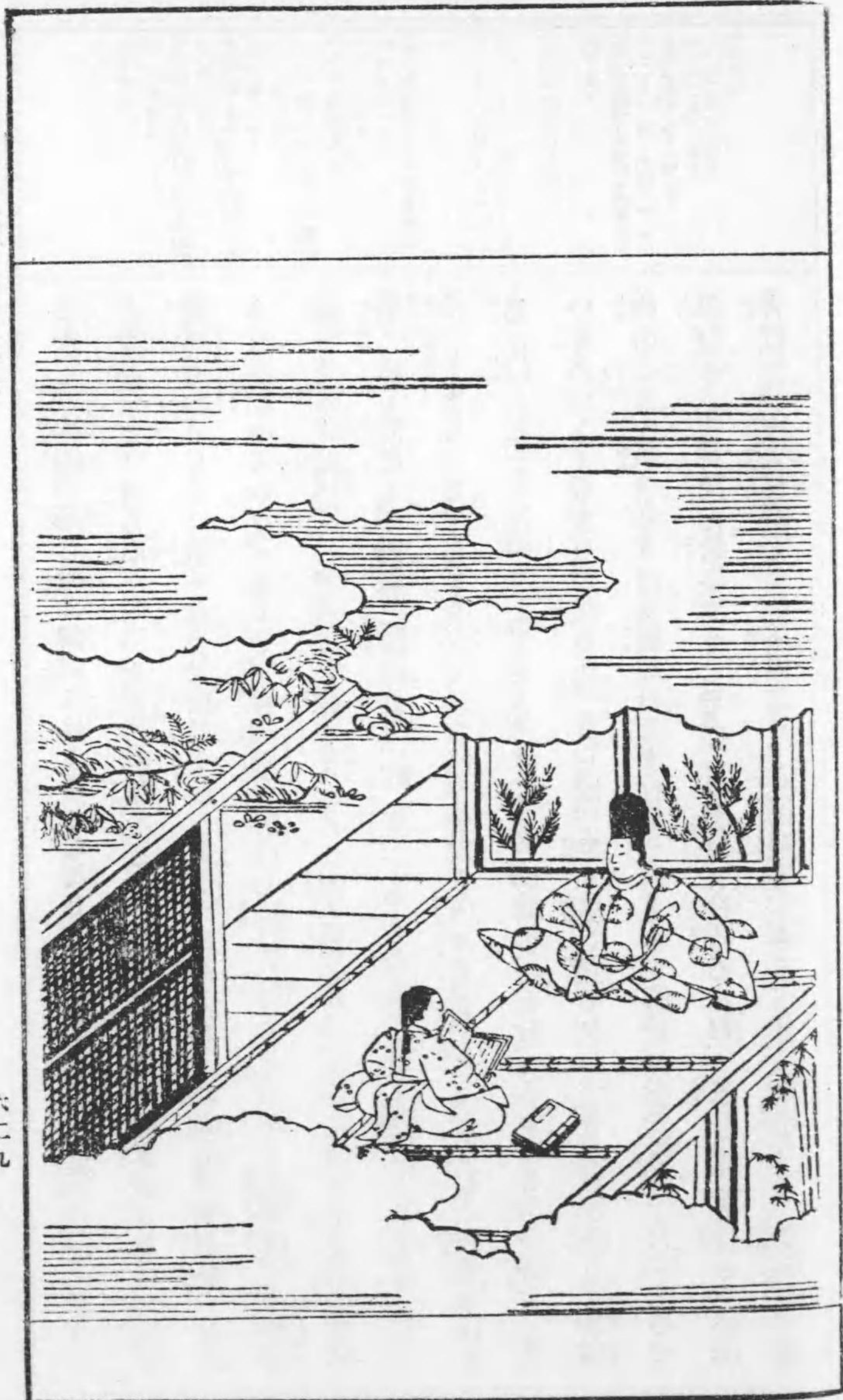
(三) あしうぞーあしく

(四) 侍らずーあらず

(五) 出でーナシ

(七) べかりきかしーべかめりきかし

出づればこそ、琴の音も弾くに随ひてひとき、萬の折にはあひ侍れ。遊ばすやうに、たゞ弾きにやは弾くものならむ」と聞え給へば宮、いと哀に、疎ならむ心を思ひて弾きならずことにはあらざりけりと、恥かしく聞き給ふ。かよりける事どもを、さても、などて一つをだに教へらるまじき。など、犬宮のをりこそ聞き習ふべかなれ」など宣へば、うち笑ひ給ひて、仲思(二)今いとあしうぞ聞召してむを。まめやかに、此事を思ひ侍るに、獨寝たまはらまほしきを、如何にさても侍らむ、然るべき所を思ひめぐらし侍るに、こよはいと騒がしくて、然るべきにも侍らず。かんのおとどの京極を、然るべき様に、まかり出でて造らせむ。此の頃、伊賀守辭するを、明年の院の御給を、今年申させ給へ」と女御殿の御前に聞えさせ給ひて。さるべき屋どもは、一歳つくらせて侍り。對などなむ造らすべきやう侍る」とて「みはしにや侍らむ」とてかんのおとどに参り給へり。御物語聞え給ふ。おとど、俊隆女(六)小君に千字文ならはし奉り給ひしかば、やがて一日に聞きうかべ給ふべかり(七)



〔語釋〕
(一)女三宮、「御事」は「御方」の誤なるべし

(二)思ひ出でつるなり歟

(四)自分が俊隆女を棄て置きしを思出さるべければ也

(五)兼雅の關係なき時分にも

〔考異〕
(一)思ひ―思ふ

かで、世にあらまほしく珍らかなる事を御覽せさせむ、となむ思ひ給ふる」など哀なることども聞え給ふ程に殿、兼雅「前おふ聲して、久しくなりぬるは、こゝにもものせらるゝにこそありけれ」とて、御子いただき奉り給へり。宮の君、「まろも」と聞え給へば、宮をば、肩にかけ奉り給ひて、いま一所をば、たどにかき抱きておはす。若君もおはしたり。いづれとなく、様々に清らに美しけにおはする、うつくしう見奉り給ふ。かんのおとども、大將の御氣色も、泣き給へりけるを、兼雅「など例ならぬ様に見え給ふ。もし、宮の御事、對などの人々の中に、便なき事言ふやあらむ」と、大將「思すらむ事恥かしくて宣ふ。かんの殿、いとよう笑み給ひて、俊隆女「あな物狂ほし。京極つくらむとあるにつけて、哀なる事思ひ出づるなり」殿、兼雅「それこそは、思し出でむにいと苦しけれ」とまめやかに宣へば、俊隆女「怪しく、それより前にも、いみじう哀なる事どもは無くやは」と聞え給へば、兼雅「そよ。それにつけて、物思はせ奉りけむを思ふに、いと苦しうなむ。いかで、

〔語釋〕
(三)宰相上の方

(四)兼雅夫婦の贈答の歌を

〔考異〕
(一)今めかしき―いまはしき

(二)あはれに覺え給ひていでや―哀とおぼえ給ひていでや―哀におぼえ給ひていとしく―あはれにおぼえ給ひて

昔の世の中の事をかけじ」と宣へば、俊隆女「たゞ、今めかしきことの限もおほえ給ふなるかな」とて、斯く書きつけて居給へり、
(一)
俊隆女いにしへのちどやちぐさの物思ひを今もかなしといかど忍ばむと書き給ふにも涙落ち給ふを、殿もあはれに覺え給ひて、兼雅「いでや、兼雅ちぐさには涙ぞ露とむすびけむかよるこの世に思遂けなむ
おろかなる御守か。
と書きつけて見せ奉り給ふ。大將「これを取り給ひて、出で給ふまよに、對におはして、仲思「久しく参らず」と聞え給ふ。御褌まるらせ給ひて、るざり出で給へり。宰相上「けに、覺束なき程になり侍りにけるかな。いとうれしく宣はするに、萬の事みな慰まれ侍りてなむ、明け暮らし侍る」と聞え給へば、仲思「あやしき故郷の侍りつる、ついでに、今めかしき御中に宣へる事」とて、ありつる物御懐より引き出でて見せ奉り給へば、いと哀におほえ給ひて、かたはらに、
(四)

(語釋)
(二)女二宮

(三)犬宮の

犬宮の美くしき。仲忠の祕藏。

(考異)
(一)如何にぞしぞしナシ
(四)いみじういみじき
(五)斯くはえーかくばかりにて

宰相上故郷はいづくともなく忍草しけき涙の露ぞこほるよ
とてさし出で給へれば、見給ひしもけに如何にぞと、哀におほえ給へば、御筆のおろしにて、

仲忠住み来しも見しもかなしき故郷を玉のうてなになさばなりなむ
など聞え給ひて出で給ひぬ。

大將は、御徳もいといかめしう、大殿に次ぎ奉りては、この殿を、天下世の人
もかしこ頼み奉り、参り集ひ、何事も物宣へなど思へり。一の宮は、犬宮と
難遊し給ふ。御かたち日々に光り勝るやうにおはす。いみじう腹立ち、恐ろし
きものの心にも、見奉らば萬の事わすれて笑まれぬべし。あて宮も、今のほど
斯くはえおはせざりけむと、思ひ並ぶべき様ならず見え給ふ。御乳母五人、宮の
君、源氏の君と、御乳主。乳母子六人、おなじ程にて、長五尺なる裳を、結び籠
めに著せ給ひて、御遊の具にてさふらはせ給ふ。これより外の人々には、見せ奉

(語釋)
(三)仲忠が
(六)藏開の時の事
(八)治部卿...いひ勝れ
たるなり。は傍註の撰入
せるなるべし。一本「うつ
ぼの巻に見えたり其の後
大辨しなし
(九)「いひは」と「歎

仲忠京極の舊邸に大宮
に琴を教ふべき樓を造
る。人々の噂。

(考異)
(一)給はず祖父一給はず
たゞ二宮ばかり女御殿と
は見奉り給ふ
(二)かくて一ナシ
(四)木草一草木
(五)山なる一山中
(七)一歳はおほよそに
一歳はいたくおほよそに
(一〇)ごろ一ナシ

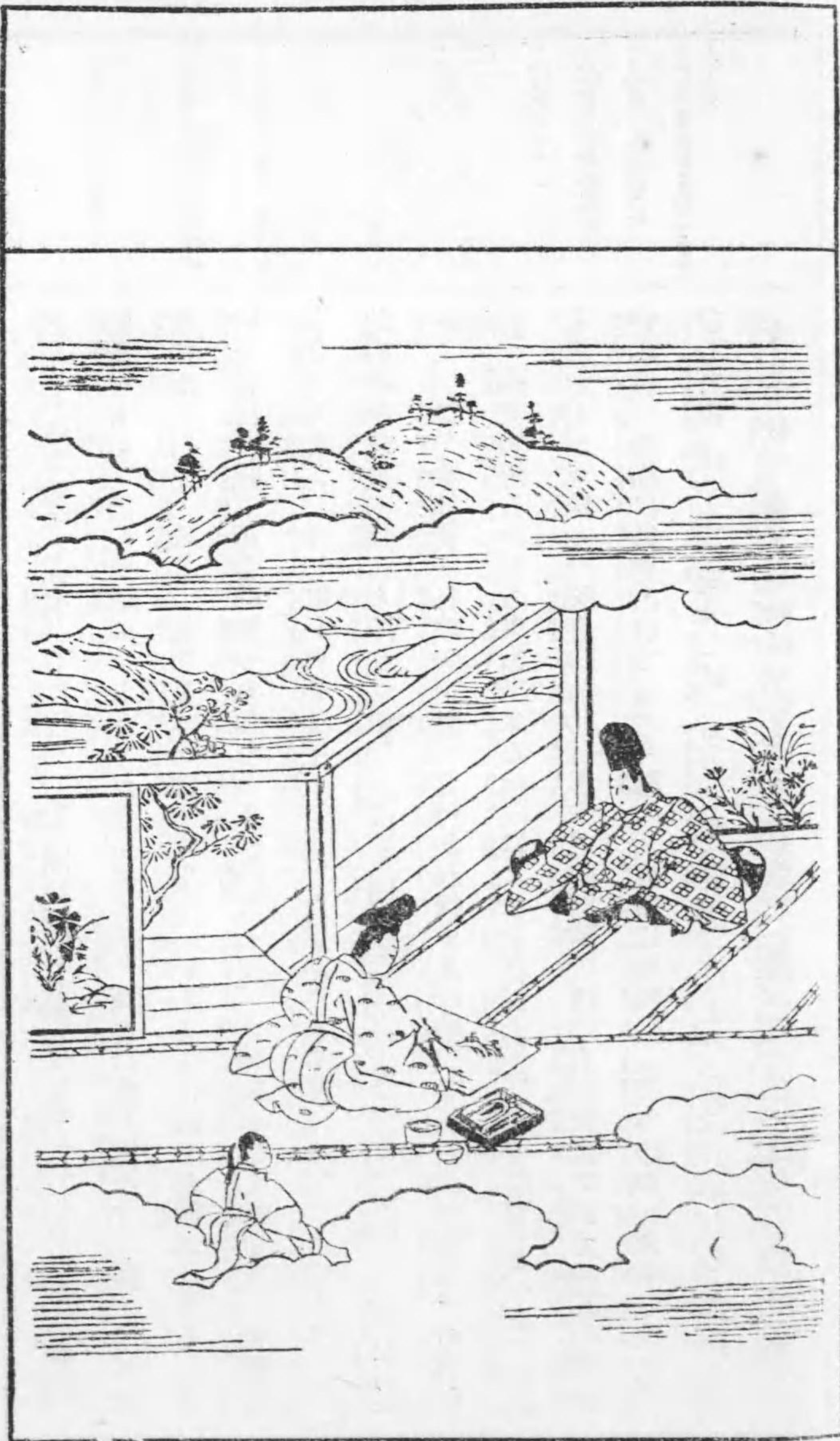
り給はず。祖父大臣、ゆかしがり聞え給へど、更に見せ奉り給はず。公も、か
の讀みさし給ふ文聞かまほしうし給へど、とかう免れ申し給ひて、おほろけなら
で参りにくくし給ふ。

かくて京極におはして、静に見めぐらし歩き給ふに、世の中にとある木草、
花紅葉、數をつくしてあり。唐土にもありけるもの、實をかしく、花紅葉めづ
らかにする木草どもの種をさへ、植ゑおき給へりけるも、山なる所々に、いとお
もしろく、何とも人知らぬ、生ひたり。一歳は、おほよそにこそ面白しと見給ひ
しか、のどかに今見給ふに、かよる所なし。年経たる巖の、いろくの苔、生ひ様
もいとをかしう珍らかなるを、立て置かれたりける。さらに取り動し直すべきに
もあらざりけりと見給ふ。治部卿は、うつほの巻に見えたり。其の後大辨滋野の
親王の聲なりしかば、この家もと名高き宮とて、今の世のおもしろき所にはいひ
勝れたるなり。この三月十餘日ごろより造るべき由を、修理頭、宮の乳母の同胞

(語釋)
 (一)未詳。一本「かきのま」
 (四)格子敷
 (五)仲忠は
 (二)「側よりは」の「は」
 衍文歟

(考異)
 (二)「かめり」べかんめり
 (三)「なちて」ならびて
 (六)「えせ」よせし
 (七)「中」に「ながし」
 (八)「方」分きて「かたはな」る事なく
 (九)「仰せ」か「せ給ふ」仰せ給ふ「直はせ給ふ」
 (一〇)「長高」繁ければ「長の高きをそれよりは南なる木し繁ければ」

なるにおほせ給ふ。北の對、西、東の對、ことにうるはしくよかりけり。四面にかきのくに、白き壁塗らすべかめり。この西の對の南の端に、坤の方かけて、昔の墓ありける迹のまよに念誦堂立てたり。南の山の花の木どもの中に、二つの樓、長よき程に、こちたからぬ程に、たちまちに造るべし。西東にならべて、樓の二つの中に、いと高き反橋をして、北、南には、かうしかくべし。それに、我は居給はむとす。仲忠「これ造らむには、なべての工はえせじ。修理職の中に、勝れたらむもの二十人を擇りて、方分きて、心殊に造らすべきなり」とて、畫師召して、造るべきやう仰せかよせ給ふ。東の對の南の端には、廣き池流れ入りたり。その上に、釣殿立てられたり。その水のさま洲濱のやうにて、御前の南には中島あり。それに、樓は建つべきなり。「御殿の長高けれども、外よりは南なる木ども繁ければ、透きて僅に見ゆべし。西、東の側よりは見えたらむは、柳の木どもの中より、木高くおもしろからむこと限なからむ」など人々興じ申す。樓の勾欄な



樓の上(上)

(語釋)

(一)造作

(七)女一宮に仕ふる宮の君

(八)孫王君があて宮に

(考異)

(二)おろしがねーしろかね

(三)黄金ーナシ

(四)給ひー給ひて

(五)給ひてー給うて

(六)あるべからむーあるべからむ

ど、あらはなるうち造りなどには、かの開け給ひし御倉に置かれたりける、蘇枋紫檀をもちて造らせ給ふ。おろしがねには、銀黄金に塗り隠をす。櫃子すべき所には、白く、青く、黄なる木の沈をもちて、いろくくに造らせ給ふ。さるべき所々には、銀黄金の筋やりたり。まづ門さして、大將殿おはし給ひて、御覽じて造らせ給ふ。中に勝れたる上手、いどみかはして、有り難うめでたう造る。

此の事を内裏、院にも聞かせ給ひ、殿ばら聞き給ひて、「珍らかにをかしき事なり」とて、涼の中納言、行政の中將、これかれ行きあひ給ひて、「いかで見む。あやしう、絶えず珍らかなる事出で来る所にてこそあれ。定めて有る様あるべからむ」とゆかしがり給ふ。藤壺の方の孫王の君の同胞の四の君、大宮の御方の宮の君といふに、物詣に行きあひて、宮の君殿の、大宮に琴教へ奉り給ふべき事なけき給ひし有様、ほのかに聞きしは、少々の琴の音聞かむよりもめでたかりしものかな。「今まで教へ奉らせ給はぬこと」とてぞ歎かせ給ふや」など語りけるを聞えけれ

(語釋)

(五)仲忠の手を傳習し置きたらば

(七)あて宮の機嫌あしく

(考異)

(二)上わたらせ給へりー

わらはせ給ひて

(二)なりぬるをーなりに

(三)給はぬー給ふらめ

(四)犬宮のうつし傳へたらむはー犬宮にうつし傳へたらむはー犬宮にのこし傳へたらむは

(六)つめてーつきて

新築の樓の結構。

ば、上わたらせ給へり。あて宮、「一の宮何事を思すらむ。この造りのよしる樓は、いみじうおもしろきことあるべかなり。内侍のかみもろ共にむかへて、大宮に琴教へむを、一の宮聞き給はむに、世にさる事はまたあらじを。年頃聞かまほしうし給へど、こよに聞かせずなりぬるを、惜む手を、かの折にこそは、残なく聞き給はめ。羨ましうこそあれ。よろづの事よりは、面白きことを、明暮聞きてあらむことより外の事あらじ」と宣ふ御氣色むづかしければ、上にも、けに、いみじう有りがたき事ならむかしと思せど、物宣はで、今上、大宮のうつし傳へたらむは、東宮の御世に、さりととも飽くまで聞き給ひてむ。こと様にはたあらじ。心のどかに物思ふこそよけれ。此の大將の事につけてこそ、度々氣色あしう苦しけれ。いたう腹立ち給はぬさきに」とてわたらせ給ひぬ。

かくて、樓にのほり給ふべき程の吳橋は、いろくくの木をませくくに造りて、下より流るゝ水は涼しく見ゆべく造る。樓の天井には鏡がた、雲のかたを織りたる高

(語釋)
 (三)「ち座所したり」歟
 (四)帳臺の中の床
 (一〇)此處誤脱あらんか
 (一一)「給ふ」なるべし

(考異)
 (一)張らせさせ一張らせ
 (二)薄らかなるを一筋うちたるを
 (五)手づから一こもにて
 (六)天井には三尺の淺香を一天井に三尺のからかみを
 (七)四方に薫りわたれり一世にかうばしきよりも
 (八)たる一たり
 (九)言ひ一ナシ
 (一一)聞きつぐ一聞きつ

麗錦を張りたり。板敷にも、錦を張らせさせ給ふ。わが御座所には、たゞ唐綾の薄らかなるを、天井にも、張りたる板にも敷かせ給ふ。西の樓に、かんのおとどの御座所、東の樓には、犬宮の御座所なり。濱床をのみぞ、犬宮の御料は、さよやかにせさせ給へる。その濱床には、紫檀、淺香、白檀、蘇枋をさして、羅鈿すり、珠入れたり。三尺の屏風四帖、唐綾に唐土の人の畫かきたりけるを、手づから大將の張らせ給ひて、一雙づつ、二の樓の濱床の後に立てたり。樓の天井には三尺の淺香を、かんのおとどの御にも、これにもかけ給へり。いといみじき香の匂は、四方に薫りわたれり。此のしつらひ、細なる有様、造りはてたる。照り輝き、珍らかなるを、工匠、造物所の者ども、「また斯かる事あらじ」と言ひ思ふ。大將は、しばしにても、思ふやうにて珍らかなる様にて、かんのおとどをわたし奉りて、見奉るべきも、犬宮のし給ふと、いとど美しう、すどろにてはいかで見ましと、思ひ奉り給ひて、此の事を聞きつぐ人々ふかき心を知らぬは、「いか

(語釋)
 (三)朱雀院なるべし
 (八)相撲所會の時に俊隆女の琴を

仲忠、朱雀院及び嵯峨院に参る。嵯峨院、俊隆女の琴を聴きに京極の邸に御幸あるべき事を約す。

(考異)
 (一)し給ふべきし給へる
 (二)人々一人
 (四)犬こそ一犬宮
 (五)べかなり一べきなり
 (六)かけ「は」ナシ
 (七)厭なき事にはあなれ
 一いとびんなき事にはあらざめれ

なる事し給ふべきならむ」とゆかしがり給はぬなし。一二町を經て行く人々の、此の樓の錦、綾の、許多の年月、さまざまの香どもの香にしみたる、風吹くたびごとに芳しきをめで怪しむ。大將、院に参り給へるに、朱雀、古き所、珍らかなる様に、樓など造るべかなるは、如何なる事あるぞ。男ども、「いとをかし」などこそ言ふめれ」と宣はすれば、仲忠「何でふことも侍らず。犬こそ、しづかなる所に侍れば、彼處にて琴習ひ給ふべかなり。内侍のかみ、「いまはやうく身あつしく侍るに、此の手傳へ留めむ事、今は誰にかは」と侍るを、昔のやうにも侍らざめれば、仲忠、おほやけに暇賜はりて、心しづかにて物し侍らむ」と奏し給へば、いと御氣色よろしくて、朱雀「けに然るべき事なり。それこそ厭なき事にはあなれ。相撲にいとつかに聞きて、えまた聞かずなりにしこそ、いとくち惜しけれ。はじめには、うたて心あわたしき様ならむ。かならず、かの末つかたに、行きて聞かむ。思ひのやうに教へら

- (一) 退位はしたれども
- (二) 仲忠が進講したる俊藤の遺書
- (三) 仲忠の
- (四) 嵯峨院が
- (五) 女三宮を兼雅が迎へしは仲忠の勤めによりしとか
- (六) 女三宮が
- (七) 然りともし一ナン
- (八) この一その
- (九) あべかめれあるべけれ
- (十) あはひめ見ゆる一あそび給へる一あはれめ見ゆる
- (十一) 給へりしを給ひしかば
- (十二) 四世のいかうにたむしをのいかうにたちむしせのいかうにたむ

れたらむ悦も、今は斯くなりたりとも、然りとも此處にこそはせめ。いと嬉しく、一の宮の御許に此の手のとまるこそ、本意なる心地すれ。さて、暇は、心しづかにて見許されがたくや物せられむ。如何に」と宣はす。大將殿、仲忠「この事をなむ。たゞ御氣色になむ侍る」難かるべうとも、然こそはあべかめれ」と仰せらるよ。かの書の残ゆかしく思ふ様など仰せられて、まかで給ふに、嵯峨院の藏人、御使にて、御車のもとに寄りて、藏人に参りて侍りつれど「院になむおはします」と侍りつれば。必ず参り給ふべき」と聞ゆれば、やがて参り給ふ。外の方におはしましけり。嵯峨月ごろ待ちかねてなむ。然るは、いと嬉しき悦もいかでかと思ふや。この事は、一條に心苦しうて物せられし宮の、あはひめ見ゆるさまにてなむある、とものし給へりしを、その事、御許に言ひ催されたるになむ、事に觸れていと哀にうれしと言ひ給へば、行末今はいと短きに、いと嬉しくなむ。かくいと恐ろしけにて、人に厭はるよ世に、四世のいかうにたたむ事も

- (一) 語釋
- (二) 我を
- (三) 女三宮を兼雅が迎へ取りし事
- (四) 兼雅が
- (五) 京極の舊邸
- (六) 俊隆の妻の父
- (七) 内方殿妻をいふ
- (八) 考異
- (九) まことや人の聞ゆるはまことにある人のいふ
- (十) いふをいきくをの
- (十一) 宣はすれば一ナン
- (十二) 事どもの侍りて一事ども侍りて一事ども侍るに
- (十三) なむいとよく一なむとよ
- (十四) かの所ゆかしう覺ゆること一かの所なむゆかしと覺ゆるやうは
- (十五) これかれ一ナン
- (十六) 見しを一見しをば一見しに

がなと、今一度とのみぞ思ひ出づる。あはれに心細き慰めにと思ふかな。まことや人の聞ゆるは、舊き跡あらため造られて、樓など珍らかなるさまに造りて、いと面白きことあるべしといふを、などかいと心憂く、むげに思ひ棄てられ給らむ。院の御幸内裏の行幸などあらむには、こよにも對面のかたに。人々にはさやうの序にだにいかで、となむ思ふ」と宣はすれば大將殿、仲忠「畏まりて承りぬ。屢もさふらひぬべきを、公私と、えさらぬ事どもの侍りてあけくれ暇候はずしてなむ。宮の御事は某が取り申しつる事にも侍らず。ことに觸れて、忝く、如何にと畏まり給ふる事をなむ。いとよく仕うまつるを、思ふ事ものせむと宣はせてなむ」と聞え給ふ。院、嵯峨「かの所ゆかしう覺ゆることは、昔の滋野の王布留朝臣のなはいはうは、わが祖母にいまそがりし宮なり。俊隆朝臣の母の源氏は、御息所腹のまた妹なりしかば、我まだ親王なりし時かの祖母宮の住み給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、これかれ春秋文作りにもものして見

〔語釋〕

(三)仲忠の心

(五)侍りてむ歎

(六)年ふかく参りしは二年若く思ひ入り歎

(七)誤あるべし

(八)犬宮

〔考異〕

(二)いと一ナシ

(二)こかむの事おほえて一ころむの事もほくて

(四)給ふに一給へば

(九)行幸一みゆき

しを、今ほのかに思ひ出づるに、いと哀にゆかしき所になむあるを、如何なる業をせらるべきぞ、然るべき事あらばこかむの事おほえて、交らまほしくなむある」と仰せらるるを、常に古のこと思ふにも聞くにも、哀にのみ物おほえ給ふに、^(三)覺束なかりつる事も、明らかに宣はするに、面白う忝うおほえ給ひて、仲忠あなかしこ、御念佛にもなどは、必ず参り侍りて。昔がたは、年ふかく参り侍らで、思ひ給へ憚りしを、今は快く、何かの事のをりにも、^(五)仰言のまよにこそ、背かずは侍らむと思ひ給ふるに、仲忠こそはへだてあらためられめと思ひ給ふるうちに内侍のかみ本意ありて、今はかの所には侍らむ。ついでに、一の宮の若君^(八)の、今はおよすけて、琴弾かまほしうし給ふに、^(七)教へさせ侍らむとてなむ、大方にては、静ならず侍れば、すこし離れて高き様なるもの建てさせ侍るを、然こ^(九)とくしく人の奏するにや侍らむ」院大におどろき興せさせ給ひて、^(九)相撲のをりよりは、それこそ天下に面白きことはあなれ。朱雀院は、内裏にても、

〔語釋〕

(一)琴の

(二)俊隆を遣唐使にやりし譯なるに

(三)俊隆の恨を

(四)餘命幾許もなき身に

(五)俊隆女に

も聴き給ひけり。俊隆朝臣の、唐土よりのほりて、琴を奉りしに、その音、例の琴にも似ず、響よくおどろくしかりしかば、弾きとどめてともものせしにも肯かず、聞かまほしかりしかども聴かせず、斯かることなる事を好みし間に、「文の道をばさる方にて、^(二)この方の師にせむ。女宮たちにも教へ奉られよ」と度々言はせしにも肯かで、かの内侍のかみを、父母のかなしがる人にて、限なく勞はしう、またなきものに思ふと聞きて、心もありしかば、女方よりも度々ものする事ありしにも、いと心強う、心深かりし人にて、公を恨み、世の中を知らでなむ、身をも心づから沈めてし。その折の大臣どもの、「この國の爲の、限なき面目を弘めむ」と言ひ出だし立てし事を、此處には惜しみ思ひしかひなく、我一人に怨を留められしになむ、今に飽かずあはれに思ふ。「この御世にだに、かの勘事を、今はかく残なき身に許されなば、如何に嬉しからむ、となむものしつる」とかならず傳へられよ。それを聞かむには、琴の聲を、あくまで弾きてきかせ給はどこそ

〔語釋〕
(一)母が

(二)嵯峨院が京極へ御幸あるべき事

〔考異〕
(三)あるべからず―あるべきならず

(四)未詳

(五)父君―父宮

(六)兵衛など―兵衛かれと

●仲忠樓上にて琴を教ふべき由を犬宮に告ぐ

は、けにと心安く覺えめ」大將 仲忠「昔の事は、委しうもえ知り給へず。仰せごとは、いとよく物し侍らむ。今はほれくしうなりて侍れども、そのうちにも参りて、いとよく聞召させ侍りなむ」院「うち笑ませ給ひて、嵯峨」否。それはえあるまじき事なり。公私となくなれば、かの兒に教へはてられむ末つ方なむ、いと聞かまほしき」などさまぐに、古の哀なる事も、いさよかほけくしからず仰せらる。おはしまさむこと、免あるべからず宣はす。院のうちしつらひておはします。年高うならせ給へる様ならず、いと清らにめでたし。月の十五日には、僧あまた召して、御念佛、殿上人、上達部あまたして、それに堪へたる人しは、さうがうせしめ給ふ。院のうち、儀式いとなし。かくてまかで給ひぬ。
犬宮の御方には、同じ母屋の西に、けに小き几帳立てて、しつらひ給へり。小き人、さよやかなる碁盤にて、碁うち居たり。御手の、綾のひとへの黒きよりさし出で給へる、いと美しけにおはす。父君、仲忠、兵衛など、犬宮といかどうち給へるとて

〔語釋〕
(四)仲忠が
(五)女一宮
(六)誤あらんか

〔考異〕
(一)これら見つけて―これらにつけて
(二)いふがひ―いひがひ
(三)美しと―うれしと

見給へば、恥ぢ給ひてうち給はず。これら見つけて走れば、「いといふがひなき御供人かな。愛著たる足音にはあらずや」と宣へば、大人ども「けに」とて笑ふ。大將は、犬宮に聞え給ふ、仲忠「彈かまほしくし給ふ琴習はい奉らむ」と宣ふよりいと嬉しとおほして笑み給へり。いと花やかに、見まほしう、愛敬こほるばかりにておはするを、いと美しと見奉り給ふ。仲忠「琴習はせ給はど、宮には聽かせ奉らでなむ習ひ給ふべき。いと面白うをかしき處に奉て奉りて、かんのおとどはおはしましなむや」と宣へば、犬宮「さりととも、宮おはせではいかでか」と宣へば、仲忠「いとくち惜しく。さては不用に侍なり。人に聞かせて、仲忠、かんのおとどなむ、人に教へ侍る。しばし念じ給ひて、おはしませ。さてよく弾き取り給ひてむ程に、宮はおはしましなむ」と聞え給へば、犬宮「さらばよかりなむ。なとて宮には隠し給ふぞ」仲忠「みな人の聞くにも弾き給ふは、この侍る琴をなむ、さは弾き給ふ。これは異なり。人に聞かせつれば、聲もせず、みならず侍り。宮も二の宮もおはせぬ所

(語釋)
(三)我と同じ都に

(考異)
(一)心安く—心安き
(二)給ふを—給ふと
(四)一所に思ひの—一所に
あらず思ひの—一所に
よくもあらず思ひの
(五)思ひ—思う
(六)殿—ナシ
(七)吹上の—吹上が

なくこそ嬉しく思う給へしか。何時しかも、一所にて、思ふやうに聞え承りて
心安く遊をも、とこそ思ひ給へしか」など聞え給ひて、源先は、いみじき大事の
事を思すなるこそ。涼には隠し給ふを思う給へれば、如何つらしと思ひ聞えぬ」
大將、仲忠いと怪しく。けに一所に思ひの外の住居にてさふらはせ給ふ心慰め
には、けに明暮きこえさせ承らむを、慰めにせむ、となむかねて思ひ給へしを、
何の、いふらむやうに、心静にも侍らすなむ。昔の心ばへ、たと思すらむ心のや
うに。今は、いま少し睦まじうなむ、思ひ聞えさする」中納言、源いでや、かの
京極殿を、世の中ゆすりて、珍らかなる様に樓などつくらせ給ふと承るを、う
とき人々に、定めて有るやうあらむと物し侍り。行政の中將、左兵衛督なども
のせられしと侍りしも著く、になく面白き事侍るめるを、などか、昔の御心ばへ
の名残あらば、けしきばかりも聞かせ給はざらむ」とて恨み聞え給へば、大將殿
仲忠紀伊國の吹上のはまの濱にて契りしかひはなぎさなるかは
(七)



中納言、蕨いでや、

涼吹上の濱べの契りなごりなくかひあることは見せじとぞ聞く

〔語釋〕
(一)「これかくしの詞」
(二)「なごり」は「なごり」
歎

(七)「所々にて」歎。一本「心々にとて」

〔考異〕

(二)「聞えむ」なごりー聞ゆらむともおぼえずなりて侍るなごり

(四)心安く行をもとー心安くもとー心安くと

(五)白きー白

(六)「ころちぎ者」ころちぎを著

御物がくし、なほあらしの御詞などは、琴などの音よりも勝れてこそおはすれ。萬の事、いかで、かくしもみな具し給ひけむ」と笑ひ給へば、大將もいと快くうち笑ひ給ひて、仲思「何事をかは隠し聞えむ。物覚えすなりにて侍るなごり、京極は、然御耳とまるべくも侍らぬものを。高き物おもしろくば、朱雀門、旗鋒などを、いかに絶えず見る人侍らまし。靜なる處なれば、時々もまかり移りて、心安く行をもと思ふ給ふるなり」など聞え給ふ程に、入日のいと赤くさし入りたるに、犬宮白き羅のほそながに、二藍のこうちぎ著給ひて、長は、三尺の几帳に足らぬ程なり、御髪は、絲をよしかけたる様にて、細脛にはづれたり、扇の小さきさけ給ひて、兒、大人ども三四人添ひてあれど所々にとて、簾のもとに、何心なく立ち給へるに、風の簾を吹きあけたる、立てたる几帳の側より、傍顔の透き

〔語釋〕

(一)涼が

(三)汝等が犬宮の側につきて居らぬが詠い

(四)「と」は「とて」歎

(五)引歌未考

〔考異〕

(二)「ころちはえて」ころちはづれて

(六)侍る「る」ナシ

て見え給へる容態、顔いと花やかに、美しけに、あなめでたのものやと見え給ふを、え念じ給はで、笑みて見遣り給ふに、大將あやしと見おこせ給ふ。あらはなれば、仲思「いと不便なりや」とて立ち給へば、蕨何の不便なるぞ。若き時は、うちはえて、ほのかに人に見え給へるこそ美しけれ。世の中のよしり給ふ人も、むけに見ぬは、心地むづかしき時は、いでや、如何ありけむと見ゆるものなり。いみじう、世に物思出で來ぬべき世なめり」とて飽かず美しくおほえ給ふ。仲思「またこそ見え給ふ」とて入り給ひて、御乳母たちに、仲思「いとあさましう、云々なむ有りつる。いみじきわざなり。近うあらぬわざ、いと悪し」と宣へば、乳母蝶の、御簾のもとに飛び侍りつるを、この幼き人々の、われも捕らむくと騒ぎ侍りつるを、御覽じつるならむ」と申せば、仲思「いと、此おとなども、いはけなしや」とて出で給ひぬ。仲思「かた思ひはとこそ言ひ侍るなれ。くち惜しきわざかな」と宣へば、涼「まめやかに、いといみじう、美しうおはしつる様かな。何を思すらむ。

(語釋)
(一)涼の子をいふ

彼處におはする兒は、この御同じ程ぞかし。いと醜く物し給ふに、思ひわづらひ侍りぬるものを」など宣ふ。仲忠「氣色をかしけなるべし。内侍のすけ知り聞ゆめりき」とてゆかしう、如何ならむとおぼえ給ふべし。中納言殿、大將殿に宣ふ。涼「あが君く、かの御手の限をつくして、教へ給ふらむは、さる事はありなむや。人に實になべて聽かせ給はじ。たゞ、片時の程、いと聽き侍らまほしきを、必ず聽かせ給へ」と慫に聞え給へば、仲忠「あが佛、隠し聞えさせず。いと面白き事は、あるべきことにも侍らず。兩方の院の上も、怪しう聞召して、仰せられつる。この侍る所は、いと騒しく、宮たちもあわたしうおはしまして、人繁ければ、たゞ、犬宮一人を、かしこにわたして、仲忠が教へ奉るべきなり。内侍のみも、身もあつしう物し給ふうちに、あわたしき人の扱などせられて聞ゆとも、心静にも物し給はじ。犬宮も、いといはけなくおはすれば、はかしく、えやは習ひ給はざらむ。今は、昔のやうに、聞かまほしき様も、え弾きなされずや」

(考異)
(二)あが佛ーあが君佛

(三)にもーも」ナシ

(四)えや」ナシ

(語釋)
(一)仲忠が樓へ移ること

(二)妻いま宮

(五)巨勢氏曰、「少しの事は」にて多少の風情はあるもの也との意なるべし

(考異)
(一)思ひー思う

(四)こそーこそは

涼「さて、何時かわたり給ふべき」仲忠相撲のこと、國々騒がしき事ありて、今年はあるまじとか聞き侍りつる。もし然あらば、立たむ月の間にやとなむ思ひ給ふる」遠近く侍るなるは、さば必ず」と聞え給ひてわたり給ひぬ。中納言、御方に、遠いと美しきものをも見侍るかな。大將の御方にまうでたりつるに、犬宮、しかぐなむ。天下のあて宮、さらに今の程よりはかくものし給はざりけむ。すべて、斯ばかりの容貌は、此の世に又はあらじとなむ見えたる。いとをかしかりける君かな」今宮、あさましく、今に見せ給はぬこそ。いかゞものし給ふ」遠いで、更にめでたう、聞えむ方もなしや。大人の世には、用意などしてもてなしすれば、少しのことあり。これは、いと美しくこそおはしけれ。髪の様など、まだいと幼けなる顔の、けだかく美しけなるに、髪をつやくとよりかけたる様にて、懸かりたり。たゞ兒にかづらをうち懸けたる様にて、何心もなく、蝶にやありつらむ、物の飛びつるを、扇さよけてうちあふぎ給へるこそ。それに、

〔語釋〕
(三)「あちむ」の下脱文あるべし

(四)涼の娘

(七)格別の御用の外は

(八)母に

〔考異〕
仲思、犬宮の修業中は一切人に逢はずまじき由を女一宮に告ぐ、女一宮、犬宮に名残を惜む。

〔考異〕

(一)姿にぞ物し給ひつる―かたちにぞ物し給へる
(二)疾く―とう
(五)何事にも勝れたりり―何事もすぐれたる

(六)殿―ナシ

恥かしく、なまめかしき顔姿にぞ物し給ひつる。側より見るだにあり、向ひ居てあらむは。大將、いと疾く見つけて、いみじと思ひて、乳母を言ひつるにやあらむ。今年、琴習はさむとて、内侍のかみもる共に、京極に移るべきなめり。此の姫君、容貌はいとよなうは劣り給はじを、何事にも勝れたりける上手の筋にて、今より、何事にも世の中を響かすこそいと妬けれ。小き子どものいとをかしけなるを、大人につくりてぞありける。萬の事、あやしく珍らかにものし給ふ人にこそあれ。女兒も、いかに見るかひありと思すらむ」など宣ふ。

大將殿、宮に、仲思、中納言の、この京極の事にて物し給へるに侍り。斯く、上下かねてより、事々しう、公私ともものし給ふを、思ふやうに弾きつたへ給はずば、如何にくち惜しからむ。生れ給ひし時よりだに、如何ならむと、安からず人はものし給ひしを、異なる事なくば、公事をものせず侍らむ」とて院に暇申し侍りしを、來む月よりとなむ思ひ侍る。犬宮は、いとよく「離れ奉り給ひてあら

〔語釋〕

(一)女一が犬宮に逢ひに來たらば

(三)女一を來させずに

(六)誤あるべし

(七)俊隆女在世中に

〔考異〕

(二)お前に見に―御前の見給へに

(四)見させ―見せ

(五)給ひぬれいとよく―給ひけれ七つになり給ふ犬宮いとよく

(八)御世―御ナシ

む」と宣ふ。お前に見におはしまさば、院、宮たち、また誰も騒がしう侍らむに、本意なかるべし。おはしませで、たゞ一所をなむわたし奉りたる、とて門もあけ侍らじとす」と聞え給へば、女「いく久しさかは」と宣へば、仲思「いかでかは。いと疾くは、みな習はせ給はじ。物の心くはしく見させ給ひてこそ。内侍のみ、四つより三歳こそ、他遊せられで習ひ給ひぬれ。これは七つになり給ひぬれば、いとよく、然りともいと疾く弾き給ひてむ。今まで習ひ給はぬ、いと心もとなき事なり。院、内裏の御書などの事により、徒らに年月を過し侍りにたり。世の中もいくばくかなき物か、なほ一歳ばかりとなむ思ひ侍る。内侍のかみ、心細くあつしく物し給ふ。この御世に、これを覺束なからず習ひ給はむこそよからめ」宮、女「いかで、いと然まで、戀しく見ではあらむ。時々は渡りてこそは見め」と宣へば、仲思、仲思も、おほつかかなからず、夜などは参り來なむ。それを御覽せば、慰ませ給ひてむ」など聞え給へば、女「それは、やがて見ずともありな

(語釋)
(三)誤あるべし

む。犬宮の事」といとまめやかに宣へば、仲思いとまがくしき事宜はす。かく宣はせば、更に二三年もわたし奉らじ。いと心憂く、戯れにくよ、かよる事は仰せらるべしやは」とて怨じ聞え給へば、女二「これこそまがくしかめれ。琴弾く人は、たゞ人見ず、離れてや習ふ。静なる處は然もありなむ、一年ばかりは」とあれば、いとあさましく、幼ければ、何心なくて、何時とも知らず離れてあらむと、ものしげにこそあらむなれ。しばし、人々の物せらるる時、彼方にあるをだに、心もとながり纏すものを、佗しともこそ思へ。如何なるべき事にかあらむ」といと心苦しげに宣へば、大將、仲思、理なれど、何事も、心に入れて習ひ移すにのみこそ、人よりことに侍れ。幼くおはせむも心苦しとてやは。思ふやう侍るものを。然らば聞えさせじ。ともかくも御心なり。此處には教へ奉らじ」とまめやかに聞え給へば、さてあべい事ならねば、宮も、この事を、心ことにいかでと思す事なれば、女二「さらば念じてこそあらめ。いと忍びて、あからさまに

(考異)
(一)更に「さらば

(二)なくて「て」ナシ

(四)いかでと「いかでか

(語釋)
(一)女一さへ入れぬ故他人は一切入れぬと斷りて
(二)「犬宮と雜遊」なるべし
(四)他所に居るならば我を

(考異)
(一)給はゞやむづかしう
給はゞやまくましろ
給はゞやかましろ
(五)琴の「の」ナシ
(六)念じてやあらむ一念
じてあらむ一念じてや
はす一念じてやおはする
(七)密におはせよ一密に
はおはせよかし

などは、などか物せざらむ。なほ此處には聞かせじとなめり。かんのおとど、いかでか、心靜に聞かせむ」と常に物し給ふ事はあらずや。その程だに然らずば何時」と宣へば、仲思いかどは、然こそは。それも、末つ方になむ、忍びて渡らせ給はむを、此の人々聞きつけ給はゞや、むづかしう、人々のものし給はむにこそ、お前をだに、とて過し侍らむとなり」と聞え給ひて、今ぞ思ふやうなる心地し給ふ。

宮 女二「久しう見奉らざらむを」とて明けぬれば暮るよまで、犬宮雜遊し給ふ。女二「外にては、戀しく思ひ給ふべしや」と宣へば、犬宮「如何は。琴の彈かまほしければ、念じてやあらむ。密におはせよ。この雜にもや聞かせじとする」と宣へば、いと哀にをかしうおほえ給ひて、女二「などてか。率ておはせ。大將のをばきくとぞ聞ゆる。雜遊は時々をし給へ。琴を心に入れ給へ」とて、女二「いと面白く彈かむと思せ」など聞え給ふに、久しく見奉り給はざらむ事のいみじう戀しくお

〔語釋〕
(一)犬宮の供して京極に
行くべき人々の

〔犬宮の京極に移るべき
日の準備。〕

(三)女一も同行して

(四)女一宮

(五)女一宮

〔考異〕
(二)うすものうすもの
など

ほえ給ふべきを、うちまもり奉り給ふに、涙のこほれぬべければ、今少しも聞
え給はず、苦しと思すまじき事を語らひ給ふ。
大將わたり給ふべき人々の装束、宮にもかんの殿にも分たせ給ふ。御渡の料とて、
人々にも奉りたり。内侍のかんの殿にきぬ百疋、綾二十疋、織物、うすもの、染草
などは、ことに奉り給ふ。尾張守に料を賜ひてせさせ給ふ。宮の皆あり、綾同
じ數なり。同じ日、宮にもわたり給ひて、三日過して還り給ふべし。大人、かんの
殿に三十人、わらは四人、宮の御方も同じ數なり。女御殿のみぞ、これは數勝りた
るといふべきなり。宮の御方のおとなは、皆還り参るべければ、この數へのうち
には入らず。容貌ども勝れてめでたし。かんの殿の御方に、少しねびたるが交り
たりしも、なほ人に勝れて、もてなし有様心憎くめでたし。この御方の宮、はじめ
の時に整へられたりし、なほ心有様目やすくよしと、女御殿の御方に見給ふ人を
ば、此處に賜ひなどもし給ふれば、いと類なしと見えたり。
(五)

〔語釋〕
(二)唐松に孔雀を縫は
せ給へり、歟、一本唐とり
くざくを縫はせ給へり

(五)「一條」は「三條」歟

〔考異〕
(二)かんの殿—ないし
のみ

(三)かたをうつし—かた
くさむち

(四)虫鳥—むら鳥

(六)左右の—左の右の

(七)参り交らむは—まじ
らむは

彼處にわたり給ふは八月十三日なり。大將、かねてよりも心殊にてわたし奉ら
むと思しければ、内侍のかみの御車、新しく調せさせ給へり。かんの殿のは、濃紫
の絲毛に唐松にくざくを縫はせ給へり。宮の御方は、二藍に雲襪、秋の野のか
たをうつし、薄、虫、鳥のかたを、いろくに縫はせ給へり。いとなまめかしう、
様々にをかしう、靴にも唐草のかたを縫はせ給へり。下簾も、かうの地に羅
かさねて、小鳥、蝶などを縫ひたり。右大殿も、もろ共におはして、三日過して
還り給ふべし。右大將殿も、御前いかめしう調へ給へり。左の大殿の御方にも、人
人の容貌よきを仰せられ、院よりも四位、五位、六位、かたちよく年若き、内裏
の藏人經たるも擇びて、かの一條京極なる所にわたり給ふなるに、仕うまつる
べきよし仰せ給へれば、我もくと、賀茂の祭はさるべき限こそあれ、これは左
右の大殿、院とよのへさせ給ふに、世の中に物のおほえある人々、「この中に参り
交らむはいみじき恥なり」と申し、装束を調へまどひたり。馬鞍よりはじめ

(語釋)
(一)未考

(二)海邊の機を模様にあらはしたる装

(考異)
(三)上藤車四つには上藤四車あるには

(四)給へり給ふ

て、ひどきて急ぎたり。大將、仲忠「かんの殿の御前どもは、若やかなる、女郎花色の下襦を着よ」と宣ふ。仲忠「宮の御方は、うすき二藍を着よ」と宣ふ。女房車ども、かんの殿の上藤三車は、紅のうちあはせに、はしの織物、つぎくのは朽葉、かうのかさね色の地摺の大海の裳なり。宮の御方は、上藤車四つには、紫苑色のうちぎに、赤色に二藍のからきぬ。次々のは、薄二藍、をみなへし色などの著て、青摺墨摺の裳なり。童も、おなじく著せたり。夏の繚の上のはかま著たり。

畫詞

こよは大將殿の御方、中のおとど。人々参り集まれり。

酉の時なり。殿の中、宮たち、殿ばら、いだし車し給ふ。居集まれり。大將殿は出で居給へり。院より人々参り、また「出で給はむ、見奉れと仰せられつる」とて左馬頭源宗良さふらふ。やがて、宮の御方の女房車の、次第立てて、寄すべき事おこなふ。同じ時に、かんの殿も出で給ふ。車の次第定めにくければ、

(語釋)
(一)「給はむとす」なるべし。一本「給はむ」

大路をわかれて入り給はむと、西の御門より、内侍のかんの殿、東の御門より、宮の御車参るべきなり。その御前どもは、宮の御方に、院より四位の殿上人十人、五位三十人、かたちいと清けなる六位二十人、殿上わらは二人、日の装束どもいと麗しくしつと参れり。これに右の大殿など、すべていといかめし。伯父の、中納言、宰相などにおはするは、車にて仕うまつり給ふ。中納言の君たちは馬にて仕うまつり給ふ。かんの殿に四位八人、五位二十人、六位十五人、六位といふも、受領の子ども、雅樂助、主殿の助、兵衛の左右の尉などいふなり。大將、東宮大夫かけ給へば、帯刀十二人を、中よりわけて仕うまつらせ給ふ。たどの四位、五位もいといかめし。黄金づくり、たどの絲毛、此方のも二十有るを右の大殿、兼雅「これこそ現なる移ろひなれ。左の大殿の、いかめしうて、二方もてかしづき給ふに、己が劣るべきか」とて、兼雅「子どもの數こそ及ばざらめ、車は、いま五つ、此方のはまた添へむ」と宣へど、仲忠「便なく侍らむ。仲忠が、これはわたし奉るにこそ侍

(考異)
(二)どもは一ナシ
(三)いと一ナシ
(四)曰の一ナシ
(五)右の大殿一右大臣殿
(六)いかめし伯父のい
かめしうちち
(七)仕うまつりつかま
つり
(八)子ども一子どもの
(九)かけ給へば一し給へ
ば
(一〇)及ばざらめ一及ば
ね
(一一)こそ一こそは

〔語釋〕
 (一) 女二宮
 (二) 九は三三の誤なるべし
 (三) 俊隆女が
 (四) 仲忠の事はいふまでもなし
 (五) 之に比べては
 (六) 兼雅の持物たる女三宮
 (七) 俊隆女の
 (八) 二などとしてなるべし
 (九) 大宮、正頼の妻

れ」とて制し聞え給へど、兼雅「知りてあひなし」とて、かねてより然思ひ給へりければ、なほ二十五なり。
 時なりて、殿は御車寄せさせ給ふ。宮の乗り給ふ御几帳、左大殿、大將、とさし給へり。乗り給ひぬるすなはち、大將、九條殿に馬を打ちおはして、南の廂に出で居給へるを、仲忠「はやく」とて乗せ給ふ。几帳も、殿二所してさし給へり。宮の御方々の人々見て、「殿をば聞ゆるに限もあらずや。斯う言ふばかりもなくめでたき大將のもてなし給ふ御様よ。帝にて子を持たらむも、めでたくも有るまじからむ。この子もてかしづき給ふは、いみじきものかな」とめであへり。次々の車ども、乗りつゞきて出で給ふ儀式、けにいとめでたうあらまほしき様なり。宮見出だし給ひて、女三「いかめしの人の御幸や。一人にても、斯く子を産みけむよ」などと、わが姉宮を思ひくらぶるに、斯う、子孫まで、我がまよに廣がり充ちてのよしる、かよる中らひにて見るにも、よく物を言ひ思ふべくもあらず、あたを

- (一) 語釋
- (二) 女三の心
- (三) 女一宮、仲忠の妻
- (四) 仲忠程立派に
- (五) 長恨歌の術士が蓬萊宮に到りし故事を幻といふ語によりて思へる也
- (六) 考異
- (七) あひなし—あいなし
- (八) おはして—おはしぬ
- (九) もてなし給ふ—ナン
- (一〇) 儀式—けしき

みるぞ心憂きや、と思せど、もとより怪しきまで御心よくあてなる宮におはすれば、然るべきにこそあらめ、梨壺のみ時々に見聞きてむ、けに言ふとも、まづ一の御子を産み給へらましかば、如何にかはあらまし」とのみ身の憂きのみ思す。殿宮の御方に入り給ひておはす。
 大將いと疾う、宮の御車おほく内にいらぬ程におはして、宮の御車ちかう、院の御方ともうちまじり給ふを見れば、夕映して、いとみじく色うるはしう、花やかに清けに見え給ふを、そこばく立てて見る車ども、「宮何を思ひ給ふらむ。たゞ人にはさらにもいはず、宮たちと聞ゆるも、更にいと斯ばかりおはするなければ、めでたしと見給ふらむかし」と人々やすからず言ふ。宮の御伯父の、中納言と聞ゆる、御車にさし寄り給ひて、簾おしあけて、中納言「さも幻のやうにも」と聞え給へば、打ほよ笑みて、女二蓬萊の山にまかりたりつるや」と宣へば、中納言「さても餘にこそ今日は見ゆれ」と宣ふ。一つ車に乗り給へる殿ばら、「あらはれの大な

- (一) 考異
- (二) なる宮—ナン
- (三) いらぬ—入りつる—入りぬる
- (四) いはず—いはじ
- (五) あらはれの—あらはなる

〔語釋〕
(一)今の東宮の御世には
犬宮が寵を專にすべしと
也

(四)「給へれば」歎

(七)仲忠が

●到者。樂宴。

〔考異〕

(二)かしづくとーかしづ
く)と

(三)とぞあらむーにぞな
らむ

(五)あざりーナシ

(六)なまめかしくーなま
めかしう

る急とし給ひし、女御殿の宮腹の大將の姫君のめでたき幸の料なりけり。藤壺
のよしり給ふも、かの東宮の御世に、この犬宮の御世の中とぞあらむ。我らが
しづくと思ふ子は、本意もかなはで、皆その折の擇りくづとぞあらむ」など宣ふ。
車の有様よりはじめて、世の中の人々めで騒ぐあり。
おはし著きて、まづ主方にて、かんのおとどの御車、西の御門より入れて、西の
對の南に寄する。殿を二方しつらひ給へれど、西の對におはすべきに、宮の御車、
東の對の南に寄す。それより殿にわたり給ひて、まづ宮下り給ひて、四尺の裾濃
の龍膽の御几帳さして下り給ひぬ。犬宮の下り給ふには、同じ色の三尺の几帳さ
して下り給ふ。大將、仲忠「乳母抱き奉りており給へ」と宣ふに、犬宮いな。宮
の御様に下りむ」と宣ひて、小き扇さしかくし給ひて、靜にるざりおはする様、今
からいとなまめかしくせさせ給へるを、いと美しくゆよしく、覺え給ふ。殿ばら
は、東の對の釣殿に居並み給へり。

〔語釋〕

(一)「三」は「今」の誤なる
べし

〔考異〕

(二)左の大殿ー左大臣

(三)右の大殿ー右大臣

(四)御前にー御前の

三日の御賄は、宮の御前の殿上人までおしなべて左の大殿、一日のは右の大殿、
三日のは大將殿。宮の御前の、内侍のかみ、犬宮、浅香の折敷十二、紫檀の高杯、
羅の打敷なり。上達部のお前に、盃度々になりぬ。かんの殿の御方より、心
殊にまうけ給へるかづけ物、南の庭より取續き歩みたる、色々にしかさねたる。
いと清らにうるはしく、薫物の香など匂めでたし。六位の藏人には、織物の三重
がさねの小袿、三重襲のはかま、帯刀には、羅のこうちき、一重襲のはかまな
り。これより下には更にも言はず。上達部、殿上人のさふらひ、御隨身、御前の
人々、皆かづけ給ふ。かんのおとどの御方の御前には、大將殿の御方よりかづけ
給ふ。

●樓上の景色。

又の日樓へ皆おはす。宮も見やり給ふに、聞き給ひしよりも、あなめでたと見ゆ
るに、近うて見給ふ人々の御目には、照りかどやきて、此の世にかゝる事またあ
らじと、目もあやに見えたり。南の庭の、遙なる水の洲濱のあなたの山際にたて

〔語釋〕
 (一)「なかみ」は「なから」
 歟、一本「なかしま」
 (二)「には」の「は」衍文な
 るべし

〔考異〕
 (一)薄きを皆瓦のうす
 きさばみたるをはしの
 (四)樓の西より一樓より
 西
 (五)尻ひきたる水の流の
 一尻をやり水の
 (六)出でて一まいて
 (七)給はむはまの石一給
 はむはまの木一給はむか
 はまの石
 (八)あべけれ一あんべけ
 れ

る二つの樓の、なかみばかりを、いと高き反橋の高さにして、北南には沈の格子
 かきたり。白き所には、白粉には屋久貝を舂き交せて塗りたればきらりとす。
 樓の上に、檜皮をば葺かて、あをじの濃き薄きを、皆瓦のかたに焼かせて、葺かせ
 給へり。樓の西より、西の對の南の端なる念誦堂に著く程、十五間なり。山の井
 の尻ひきたる水の流の上なる反橋の左右には、勾欄にして、瓦葺にしたり。東
 の釣殿に盡くまでの程は、同じ十五間なり。樓のそばにも、かよる反橋をしたり。
 長は、たどの人の歩くばかりにて、長々と造られたり。水はながくと下より流
 れ出でて、樓をめぐりたり。立石どもは、様々にて、反橋のこなたかなたにあ
 り。めぐりく人々見給ひて、「言はむかたなく面白き事」とめで給ふこと限なし。
 「見さして歸るべき事なくなむ。これを朱雀院、峨嵋院に御覽せさせばや。如何に
 いみじう興せさせ給はむ。はまの石には、春は花、秋は紅葉の盛などには、かの惜
 しませ給ふ手は、えとどめ難くこそあべけれ」など宣ひて、夜に入るまで立ち暮
 (八)

〔語釋〕
 (一)此園みの中なる文は
 次の六七八頁の文の摺入
 したるものにして現に春
 海本には彼處にありて此
 處にはなし。されば削る
 べきものなれども多少の
 相違あるを以て姑く之を
 存せり
 (二)はびこりて一おひな
 りて
 (三)し給ふ勢一し給へる
 を今
 (四)給へりし給へる

らし給ふ。月の水にうつりたるを、宮の御伯父の右衛門督
 兼澄うべこそはすむ人ありと思ほゆれ雲井の月もうつりける宿
 大將
 仲思我が宿をすぎずと思へど月影の水のうへぞと見ればかひなし
 こと人々も詠み給へれど、騒がしくて聞かず。かんの殿の御方には、大
 將の御方よりかづけ物は賜ふ。又の日、かんの殿にしへ思ひ出だし給ふに、
 年々の草は、八重葎の板敷よりも高う生ひ、くりの木のつまの草は高う生ひ
 たふれて、下様にはびこりて、人影もせずありしを、思ひ出で給ふに、大將
 の、二方にひきつどきて率てわたり給ひ、つくりなし給へる様、出で入りし
 給ふ勢見奉り給ふに、年頃おもひ忘れ給へりし古の御有様、よろづに思
 ひ出で給ふにえねんじ給はず、涙の溢れ給へば忍び給ふ氣色を、兼雅「ゆよし
 う、かよる事忌みあへ給はじ、と思ひきかし。さりとも念じ給へ。まろが仕

〔語釋〕
（一）などとしてなるべし
（二）女一宮

●朱雀院より女一宮及び
俊隆女を訪はる。

〔考異〕
（三）ながる―なる

りしは、けしうはあらぬは」と右の大殿聞え給へば、俊隆女「さらすば然あるまじくやは。大將も悪くや」といらへ給へば、兼雅「さて、それは誰が子にかあらむ」などて戯に聞えなし給ふ。大將いと思ふやうなる心地し給ふ。

三日、院より銀の髻籠二十、銀黄金して毬栗、松の實櫃、聚など、作り入れさせ給ひて、宮の御許に、

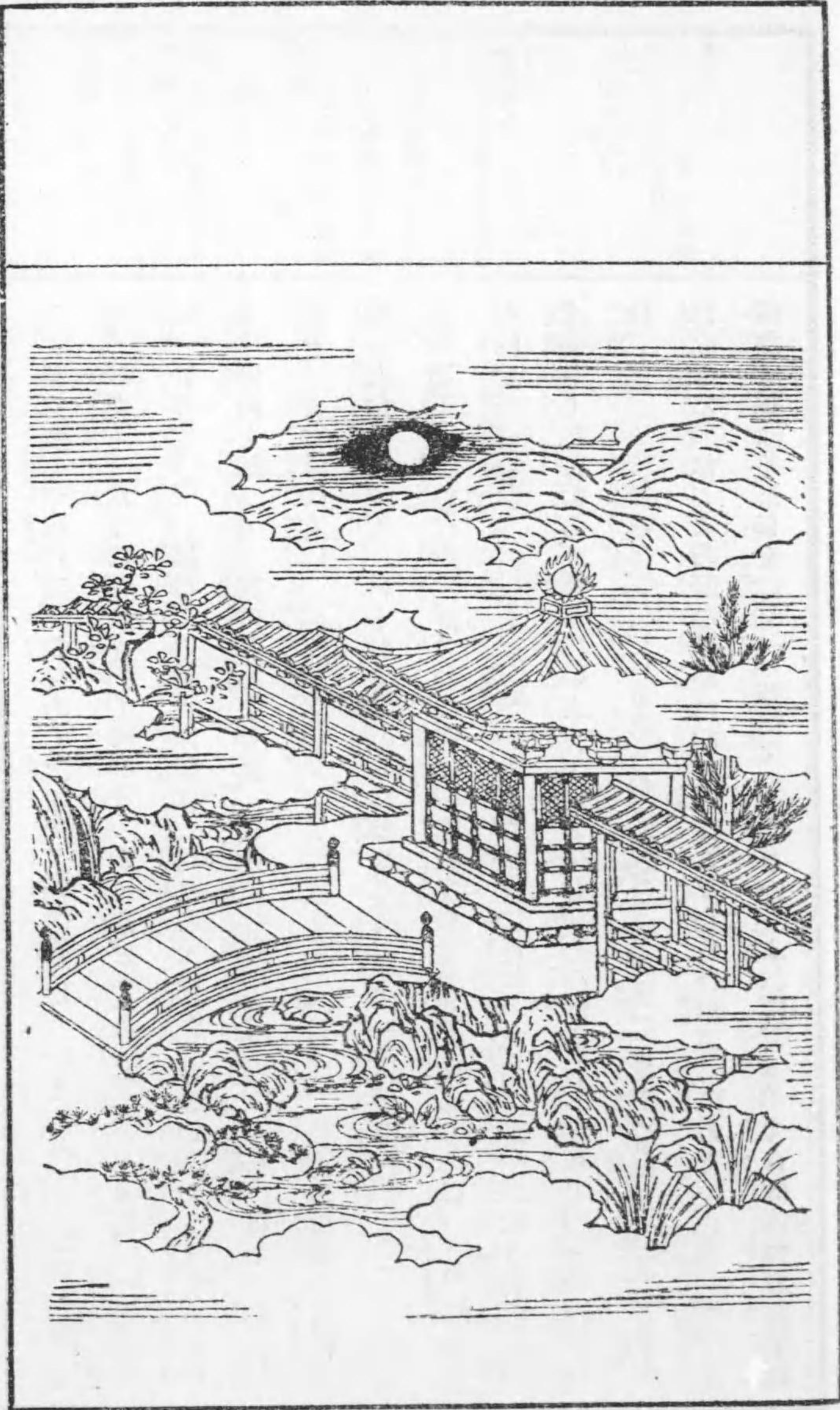
朱雀あほづか覺おぼ束たづなき程ほどになりける。騒さわがしき程ほどすぎて、犬宮いぬみやの物習ものならはれむ手てつきのゆかしきに、いかでかとなむ。この髻籠ひげこは、白髪しろがになりける程ほども哀あはれになむ。と宣のたまはせたり。かんのおとどにも、同じ數かずにて、

朱雀あさましく忘わすられにてや。ことには何時いつとなくのみ。

うらやまし明あけくれ人と結むすぶらむ髻籠ひげこのさまはかけも離はなれで

末すえの世よにこそながるべかりけれ。聞きかまほしき事ことどもあらむかし。

と書き給へり。御使つかひ藏人くらうじに出いであひ給ひて、東ひんがしの對たいにて、よき程ほどに醉まはし給ひ



(考異)
 (一)戸口にもーとみにも
 (二)よるほひに「に」ナ
 (三)わらひ給ふーわらふ
 なり
 (四)みだり脚もーみだり
 心地脚も

て、御返とらせ給ひて、前におし立てて、西の對にて、いとみじく酔はし給ふ。
 藏人「いかで、かよる御使を召し籠めて、かう懲せさせ給ふ、いと不便に」と申せ
 ば、いみじう笑ひ給ひて、仲忠「勘當は、仲忠こそはさいなまれめ」とて物もおほ
 えす酔はし給へり。宮の御方よりは、紫苑色の綾のほそなが一襲はかま添へ給
 へり。また女の方に、「御使の藏人こなたに」とて、戸口に、朽葉の裾濃の几帳の
 縫物したる立てて、いとおとなしう宿徳なる聲にて、「なほ此處にこそ」とて裾さ
 し出でて、赤色に蘇枋がさねの織物の唐衣黒むまで濃く清らなるに、紅のはり
 あはせ一襲著て、色すりの裳いとあざやかに見ゆ。袖口ながやかにさし出で、
 土器さし出でたる、見るにいよくいと侘しう、心地あしうなりて、藏人「いかに
 仕らむ」とて苦みて、戸口にも寄らねば大將、仲忠「例なき事なりや。早う」と宣へ
 ば立つに、たゞよるほひに倒れぬ。内に人々わらひ給ふ。取るとて、藏人「唯今は
 御返は賜はるまじく侍り」「如何なれば」といらふれば、藏人「今日はみだり脚も踏
 (四)

(語釋)
 (一)「くんだり賜ふ大將
 御返とりて」なるべし
 (四)誤あらんか

(考異)
 (一)つれどーつれば
 (三)様ーナシ
 (五)むらさめなるをーし
 ぐれなるをや
 (六)夕にー夕日
 (七)なくーなる

み立てられ侍らねば」といふ聲も、片言のやうなり。飲む眞似にてうち溢しつれ
 ど、いとほしくてえ又も強ひず。唐綾の翟麥襲のほそなが、二藍の織物の唐衣、
 うすものの地摺の裳はかま一くんだり、大將の御返取りて出で給へり。唐の紫
 の色紙に、豎文にて様よき松につけ給へり。藏人「みだれ脚は動かれ侍り。み
 きにかづき給ふものは、叢虫のやうにてや、むぐめきまるらむ」といふ程に、内
 よりふと、

雨の脚はむらさめなるを叢虫となにむづかしくかけていふらむ
 藏人「物もおほえ侍らずや」とて、

藏人「朝夕にてりみかどやく大殿になくべきものかけにや叢虫
 (六) (七)
 ことわりく」とて逃けて、倒れもこよひつゝ往けば、内にもをかしがり、大將も
 笑ひ給ひぬ。庭の前に、かづけ物を落し往けば、大將、人召して車に入れさせ給
 ふ。かんの殿の御返、

俊隆女かしこまりて賜はせつる。
老の世にながれてきよきくれ竹の末のよにこそ結ぶ名もたて
(一)

とぞありける。

四日の夜、夜半ばかりに、宮かへり給ふ。忍びやかにて、さるべき四位六人、五位十人ばかりして、大將いと覺束なくおほえ給ひけれど、よろづに聞え慰め奉り給ふ。曉にかへり給ひぬ。二の宮は、「いとつれぐに侍るに」とて喜び聞え給ふ。
(二)

大將、仲忠召なくは參るまじ」とて、然るべき年老いたる大舍人頭の大ふる、小ふるなどいふものども五六人、番をくりてさふらはせ給ふ。御門守、夜半だにたしかに候はせ給ふべき由、たしかに宣ひつゝ、御門も、ことなる事なければ開けず。
(三)

かくて右の大殿、かんの殿の御方におはしまして、兼雅覺束なからむ事、いと苦

- (一) ながれてきよき—な
- (二) ながれてきよき—な
- (三) 六人—六人ばかり
- (四) 女—宮の階りを
- (五) 内裏へ
- (六) 考異
- (七) ながれてきよき—な
- (八) 六人—六人ばかり

仲忠、母及び犬宮と京極に籍居す。兼雅京極を訪ふ。兼雅夫婦の懷舊。

- (一) 語釋
- (二) 女—三宮宰相君などが
- (三) 此處誤脱あるべし
- (四) 「聞かじと歎

- (一) 考異
- (二) 宣ひそ—し給ひそ
- (三) 忝く—しづ心なく
- (四) と—など
- (五) こゝにも—こゝにも
- (六) いかに—いかに
- (七) あらむ—あらむもの
- (八) 今—今二所ながらも
- (九) 今—今二所ながらも
- (一〇) 事—ひき出でむ—
- (一一) 人—ものを
- (一二) 早々—はやく

しからむ。晝ぞあらぬ、夜々はなほまうで來む」と聞え給へば、俊隆女物狂ほしく、若々しき事な宣ひそ。夜こそ、まして心靜に習ひ給はめ。宮の御方、忝く心安くは思すべし。さてわたし奉り給ふめる、おほろけには。對などにも、つれづれに人々思すらむに、今めかしく物し給へ」と聞え給へば、兼雅めでたからむ。またこゝにも離れ居給ひて、つひに何事ともして給ひてむ」俊隆女「いかに今然あらむ。年頃さまざまに集めたりけるを」とていと愛敬つき、恥かしけにうちほと笑み給へば、兼雅「今やがて琴ひき習はせ給ひなば、院の上たち二所ながらも、御覽せむとておはしますまむと宣はしつる。大將、そこながらも、まろが爲にも御爲にも、事はひき出でむ」と宣へば、俊隆女「かよる耳いかで聞かじ。この程は、すべて門さして、公私ごとも聞かじ、他事もなく思ひまどふ人を、かの聞かれむに、かよる事なし給ひそ。あけぬ前に早々おはしね。宮の君、若君、いかに戀しうおほし給ふらむ。それをだに、此のほどはわたし奉らじとあるぞわりなきや」大

(語釋)
(一)其方の側を離れては居難し

(二)「あらめ」なるべし

(三)「たま」は「だに」歎

(六)兼雅も

(七)「たりけれとてむかし歎

(二〇)兼雅が

(考異)

(四)「忍びく」に時々まうて来む「忍びく」は時々まうて来むとす

(五)にて「て」ナシ

(八)瓦は「かうらん」は

(九)草蓬「草ども」蓬

殿、兼雅「紛らはし言なし給ひそ。こよに琴教へむからに親とある人の中をも、みな取り離つ。怪しうこそ宣へれ。片時も、見奉らでえぞあらぬ。宮をも急ぎわたし給へ。我も、たゞ此處にこそあらむ」かんの殿、俊隆女「よし、聞かじ。今しばしこそ念じ給はめ。大將のかしこにたままうでられぬを」と宣へば大殿、兼雅「今おのれは、天下に言ふとも、忍びく」に時々まうで来む」とて、物憂けにて出で給ひぬ。明くなりにけり。

大將殿、大殿の御前に参り給へば、御供にて所々見ありき給ふさま、たゞ兄弟のやうにて、これも、いと清けに、若うなまめかしき御容貌なり。大殿やがてかんの殿の御方に入り給ひて、兼雅「これは、もとの礎のまよか」俊隆女「然侍り」と面白くこそ造られたりけれ」むかし屋どもみな倒れ、所々に葺などの、高き草の中に朽ち倒れて、念誦堂の柱のみ、所々立てわたし、寢殿の瓦はある所なく散り落ちて、いといみじかりし、長よりも高かりし草蓬が中を分けて入りお

(語釋)
(二)俊隆女が

(二)「折の心地の」なるべし

はして見給ひしに、屋のそら、所々朽ち明きたりしより、月の光見て居給へりし程を見つけ給へりしこと、わりなく出で給ひにし折、心地の思ひ出でられ給ふに、いといみじう、胸ふたがる心地し給ひて、涙のつぶくと落ち給ふを、大將「昔おほし出で給ふなめり、と見給ふ。かんの殿も、そこら見出だし給ふに、年々の草は八重葎の板敷よりも高う生ひのほり、軒のつまの草は繁くたふれて、下様に生ひ凝りて人影もせずありしを思ひ出で給ふに、大將のかく二方にひき續き、率てわたり給ふべく造りなし給へる様、出で入りし給ふ勢、見奉り給ふに、年頃おもひ忘れ給へる古の御有様、よろづに思ひ出で給ひ、え念じ給はず、涙のこぼれ出で給ふをしのび給ふ御氣色を、兼雅「ゆよしう、斯かることえ思ひあへ給はじと思ひきかし。さりととも念じ給へ。うべこそ、まろが仕うまつりしは、けしうはあらぬはや」と右の大殿聞え給へば、俊隆女「さらすば然あるまじうやは。大將もわろくや」といらへ給へば、兼雅「さてそれは、誰が子にかあらむ」など戯に聞えなし

(六) 朱雀院が俊蔭女に來
よと切に言はるれど犬宮
がまだ幼稚故參られぬと
いふ意歎
(七) 成るべく兼雅に來て
もらひたくなしといふ意
(八) 我が君を思ふ程君は
我を思はぬと也
(考異)
(一) 忘れられ忘れ
(二) さぶらふ一ナン
(三) 給ふ一給ひつ
(四) 上う侍めり一よくは
べなり
(五) 院の上の切に宣ふを
一院にせちに申し給へり
(九) 辛しや一憂しや

給ふ。大將殿、いと思ふやうなる心地し給ふ。右の大殿は、斯かるにつけても、
何事も片時忘れ給ふ世なく、物のおほえ給へば、我ら涙のこぼれ給ひぬべけ
れど、さぶらふ人々の見奉れば、よく／＼念じ給ふ。兼雅「いと覺束なかるべし。
忍びて時々はものせむ。いかど」と宣へば、俊蔭女「よう侍めり。有様にしたがひて
とり申させ侍らむ。暇の度ごとにと、院の上の切に宣ふを、只今はおよすけ給は
ねば、夜もさるべくば、かゝる折は如何となむ思ふ給ふる」と申し給へば、兼雅「な
ほ難かるべきなり。この思には、劣りたりける。辛しや」と宣ひておはしぬ。十
七日なりかし。

樓の上(下)

樓

● 犬宮樓上に琴を習ふ。顯悟絶倫なる犬宮。● 女一宮侍従の乳
母に消息して様子を尋ぬ。乳母の返事。● あて宮、父と大宮、東宮な
どの事を語る。● 涼樓の門前を通りかゝりて歌を仲忠に贈る。●
仲忠、朱雀院と女一宮と、兼雅とを見舞ふ。● 犬宮母を慕ふ。● 琴に出
精す。俊蔭女、犬宮を勞はる。● 仲忠母子昔を憶ひて感傷す。俊蔭
女父の菩提を弔はんことを思ふ。● 犬宮の進歩。仲忠の驚嘆。雪
の日、雪山をつくりて犬宮を慰む。● 仲忠、涼を訪ひて強ひて其の子
を見る。● 歳暮に仲忠節料を遣々に願つ。● 新年。● 樓上の
二月、三月、四月、五月。● 六月の詠。● 七夕に仲忠等星に手向けん
とて琴を弾く。奇特。涼庭にありて琴を聞く。● 俊蔭女、父の
告を聞く。夢のしらせの珍客を待つ。● 珍客。よしむねの時宗、老
婢さがのの孫四人を携へて來る。俊蔭女の懐舊。四人の孫を留めて
寵用す。● 仲忠樓を下りて三條邸に歸るべき準備。涼嵯峨院に參
りて七夕の夜の噂をなす。● 兩院、大后宮以下争つて仲忠が樓を下る當
日、京極に參會せんとす。● 前夜より京極に集まる人々。● 嵯峨
院、朱雀院御幸。● 俊蔭女、犬宮樓を下る。● 葦の仰言。● さがのの四
人の孫人々に愛せらる。● 朱雀院、嵯峨院、琴の秘曲を盡さん事を俊
蔭女に迫る。俊蔭女の煩悶。● 俊蔭女、うかく風を弾く。● 琴聲内
裏に聞ゆ。今上、少將信方をして琴の聲を尋ねしむ。● 信方、琴を尋ね
て京極に到る。● 朱雀院、俊蔭女に迫りて更にはし風を強かしむ。

●犬宮樓上に琴を習ふ。類悟絶倫なる犬宮。

- (一) 朝飯
- (二) 俊隆女と犬宮
- (六) 俊隆女の
- (八) とて留めおきて

- (一) 皆一ナシ
- (二) 宣ひて一宣うて
- (三) つゞき一つゞけ
- (四) つゞきたりまづ一つづけたり銀のすき餅袋に鞠くだ物入れたりまづ
- (五) 奉り給ふ唐綾の一奉り給ふ著給へる唐綾の
- (七) めてたし一めてたう見ゆ
- (九) 皆一ナシ

概
奇特。人々の感動。●俊隆女、犬宮をしてりうかく風を彈かしむ。妙なる音。人々の驚嘆。●嵯峨院の奏請によりて俊隆に中納言を贈られ俊隆女正二位に叙せらる。朱雀院の奏請によりてさかのの孫四人衛門尉になさる。●兩院以下樓御覽。嵯峨院の懷舊。●仲患、兩院以下に贈物を奉る。還幸。

斯くて、つとめての御臺、こよにて參らせ給ひて、とばかりありて、樓へ二所わたし奉り給へり。かんの殿のも、犬宮の御方のも、おとな十二人、几帳さしつづきたり。まづかんの殿のほり給ふ。段階は、御手をとりにてのほせ奉り給ふ。唐綾の御衣一かさね、紫苑色の夏の織物のうちぎ、紅の三重がさねの御はかま、大將白き綾のひとへ、紅のうちはあはせ、脱ぎ垂れ給へり。几帳のさしはづれたるよりはつかに見ゆる御容體、七尺餘の御髪、瑩しかけたるやうなる、いみじうめでたし。中納言の君といふをば、「しばしさふらひ給へ」とて、東の樓に、犬宮いだし奉りて、仲患「几帳を高う皆させ」と宣ひて、これも同じごと、長々と人歩みつゞきたり。御衣、縹色のほそなが、御はかまいと長し。牽てのほり給ひて、

- (一) 語釋
- (五) 音の「の」衍文歟
- (八) 我四歳の時父が琴を

- (一) 氣高く一氣高う
- (二) 様程よりは一様は
- (三) 給ふ一給はす
- (四) しらべ試み一しらべさせ
- (六) りうかく風一風ナシ
- (七) 習ひはて給ひつーしらべひ給ふ

琴取り寄せて奉り給へば、犬宮「誰に聞かせむ。いづら」と宣へばわらひ給ひて、仲患「こよに侍り」とて、御前にさしする給へり。内侍のかみ見奉り給ふに、おはせしよりもいとこよなく美しけになりまさり給ひけり。氣高う、清らにおはする様、程よりはいとこよなうおはしけり、と哀に見奉り給ふに、靜に、兒の御有様ともなく、おほどかなり。まづ、かの治部卿の習はし奉り給ひしりうかく風を犬宮の、ほそを風を犬將のにて、彈かせ奉り給ふ。まづかんのおとど、二つながら取り寄せてしらべ試み給ふ音の、限なくおもしろし。大將、犬宮にりうかく風奉り給ひて、彈きはじめ奉り給ふに、御手はいと小さき、彈き鳴らし給へる音、さらに心もとなからず、いとかしこく心え給ひてひき給ふ。片時に習ひはて給ひつ。次にまた、曲の物一つ教へ奉り給ふに、いと同じく彈き取り給ふに、かんのおとど、俊隆女「然べきにて斯くおはすると見奉り給ふに、ゆよしくなむ」とて彈きたて給ひかきあはせ給へる程に、涙の落ちつゝ宣ふ、俊隆女「むかし、四つ

- (一) 父が
- (二) 犬宮は
- (三) 犬宮は
- (四) べかめりと嬉しうなるべし

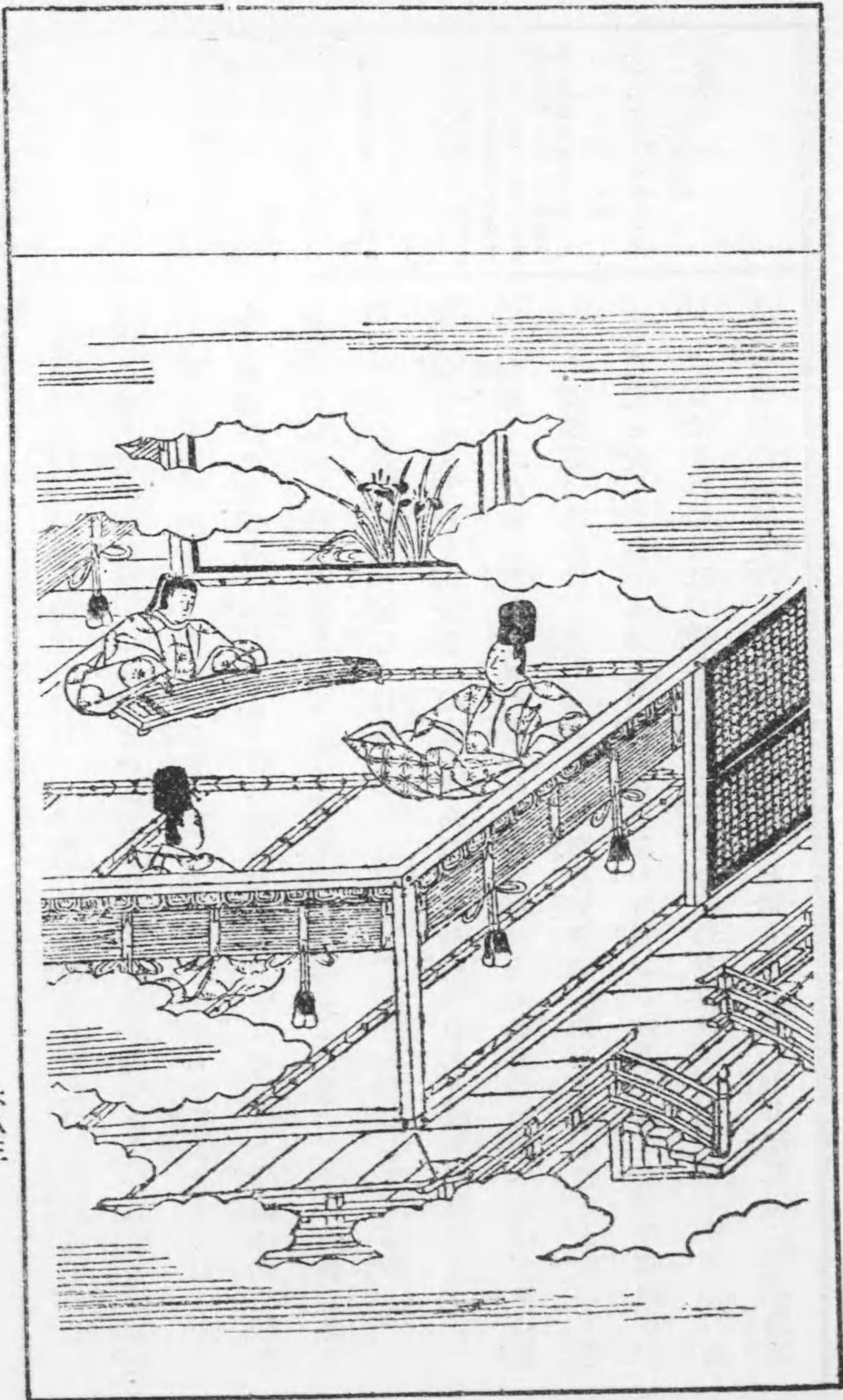
- (一) ごとくの—ごとの
- (二) 給へちむや—給ひつむや
- (三) 見聞かぬ—え聞かぬ
- (四) ありけるを—を—ナシ
- (五) 給へちむ—給ひつむ

女一宮侍従の乳母に消息して様子を尋ぬ。乳母の返事。

にて習はし給ひしに、心には入れながら、程もなく、乳母の膝に居ながら、手どもは弾きとりて、音をよく弾き傳へたる事は七つよりなむ、大人のごとくの音になりぬ、と宣ひし。これは、大人だに琴の音を、斯くうるはしうは弾き立つることとは得せぬものを」と聞え給ふ。大將斯くおはするを、本意は叶ひぬべかめり、嬉しう覺え給ふこと限なし。俊隆女、まだ弾き給ふべけれど、苦しくもぞおはする。今日はこれを」と聞え給ふ。三度と問ひ給はず、年月を経て、上手に弾きおきたりける人の、今人の弾くをきよて心得るやうなり。年頃も宮の弾き給ふを、添ひるて、弾かまほしうし給ひしものなれば、いさよか苦しくも覺え給はず、御心に入れ給へるさま限なし。

又の日、宮より、侍従の乳母の許に、

女いとおほつかなく、夜の間は如何あらむとなむ。習ひ給へらむや。見聞かぬもあやしうなむありけるを、夜や弾き給へらむ。いと戀しうなむ。ありさま宣へ。



樓の上(下)

〔考異〕
(一)手鳴らせ—手をたぐり

(二)我がわが

(三)手鳴らして—手たぐきて

(四)手鳴らせば—鳴らせば—たぐりけ

(五)なほも秋の—なほも事ぞとも思ひながらに秋の—なほも—事ぞとも思ひながらに—なほも事ぞとも思ひながら

(六)ことは—こととて

(七)給ふ—給ひ

とあり。樓におはする程なりけり。仲忠「然るべき事あらむには、釣殿にて手鳴らせ」と宣ひ置きければ、中納言といふ、よき若人なり、みやぎといふ童に御文持たせて、釣殿へ行かむとて、御許たちに、中納言「さても我らが覺よ。人に異なりかし。かばかりの事を、手鳴らして呼び奉らむするよ」など笑ふ。釣殿の南の端なる帽額の簾の、長押の下に居て、わらはは勾欄にいたりて手鳴らせば、大將おはしたり。見給ひて、仲忠「硯こよにありや」中納言「さふらふ」とて参らすれば御返、仲忠「畏まりてなむ。御氣色のいとおそろしう思ひ給へりしかば、え聞えさせで、覺束なさは更に聞えさせむ方なくこそ。如何ともせさせ給へるは、身に勝りてなむ。これに、覺束なきことは慰め侍りぬべかめるを、まことにいと哀にこそ見奉れ。なほも、秋の夜をながめ明かさむことは、とがなむつむや」と宣はせためるは、戀しう侍める身をこそつみ侍れ。

と聞えさせ給ふ。やがて人の居たる所までおはして、さし覗き給ひて、仲忠「大貳

〔語釋〕

(一)女一宮が心配して

(二)「とて」行文なるべし

(三)彈正宮をいふ歟

(四)乳母といふ名はつけたれど

(五)女一宮が

(六)「給ひ」なるべし

〔考異〕

(一)御中「御」ナシ

(五)乳をたらしはしり参り—ちをたらしはしり参り

の君や。人々の御中に、菓物めさせて、ひき散らさせ給へ。碁、雙六、例の打たむかし。うしろめたうおほえて宣ひたりける、只今の様にては、思ふやうに、とて彈き給ふべく見ゆ」とて、侍に御心地よけに仰せておはしぬ。侍従の乳母といふは、嵯峨院の御子の、兵部卿にておはせしが御女なり。此の侍従の、童にて御遊がたきなりし一の宮の御同胞の宮の、いと忍びて、容貌いみじく美しけなれば通ひ給ひしに、乳をたらし、はしり参りけれど、乳母とすべき様ならずとて、名はつきたれど、宮のいとらうたきものにし給へけるなり。御返、侍従聞え給ふめれば、御琴は、いとよく習はせ給ふにこそ侍れ。殿の御氣色もいとよけにこそ見奉れ。あさましく、雲居遙にてこそ、え承り侍らね。帥の君聞えさせ給へ。

と聞えつ。宮見給ひて、いと嬉しとおほさる。女「怪しの心ときめきや」とてうち置き給ひつ。

〔語釋〕
(三)「つぎに」なるべし

(六)未考

〔考異〕
(一)いな遊を―ひいな遊を

(二)御含嗽取りて―御ぞかいとりて

(四)居給へる―居給へりつる

(五)かけそ―かけ

(七)ごと面白し―ごとい面白し

(八)多くも弾き―多く弾きも

例の夜さりの御臺は、樓に参らす。大將、仲忠、苦しくやおほえ給ふ。然ばことに、侍従ばかりは召さむよ」と聞え給へば、犬宮「いな。遊をこそあらめ。なほこれを、宮の彈き給ふやうに、月の見ゆるまでこそ弾かめ」と宣へば、いと嬉しとおほさる。御臺下仕四人とり續きて、裳唐衣著てまるる。上藤二人、さきに三尺の几帳さして、樓にのほりて参らす。御まかなひは、例の大將仕うまつり給へば、俊藤女「あな見苦し。中納言、侍従を」と宣へば、仲忠「何か」とてまかなひし参り給ふ。中納言は御含嗽取りて参りておりぬ。犬宮の御方にも、おなじき、うるはしく裳唐衣著たる御乳母二人あり。大將とりつぎて参り給ふ。御菓物ばかりをまるりて、ことにまるらず。へきに、大將の居給へる所に、かたちよく、髪長く、髪一もとに結ひたる男童の、よき程なる四人、かけそにして、南の方の山の、木の根に造りかけたる反橋の方より参らす。少し下りたる勾欄に出でて参る。繪にかきたるごと面白し。かくて、^(七)多くも弾き習ひ給ひぬべけれど、ことさらに、^(八)

たゞ日に二つ三つを教へ奉りつよ、過し給ふ。

〔語釋〕
(五)ちやが犬宮を

〔考異〕
(一)日數添ふまゝに―日數の山―こは庭の山―ナシ

(二)たがへる―たがへたる

(三)覺え―思ひ

(四)これは―こそより

(六)参りて―さふらひて

(七)給へるなりや―給へるべしや

ひかぞそ、日數添ふまゝに、前裁いと面白くなりゆく。犬宮、南の方の山を見出だし給ひて、^(二)獨語に、犬宮「宮もろ共に、え見せ奉らぬよ」と宣ふを大將聞き給ひて、いと哀とおほして、仲忠今、此の琴いとよく習はせ給ひてむ時に、わたり給ひて、もろともに御覽せむ」とぞ宣ひし」と宣へば、恥かしうて物も宣はず。夕暮、晝などに、内侍のかみも、大將もうち休み給ひて聽き給へば、琴を習ひ給へる、いとになく、いさよか誤りたがへる所もなく弾き給へり。二所ながら、いと悲しくゆよしく覺え給ふ。^(三)如何なる時にかあらむ、かんのおとどに、犬宮「下仕を召し、ちやを呼ばよや」と聞え給へば、召したり。これは、ことに参らず。されど、うつくしがり奉りて、猶まゐり習はしたりければ、哀とおほして参らせ給ふなりけり。琴ひき居給へる御程のまだ斯かるを、大將「哀に見聞え給ふ。侍従参りて、侍従「御琴は弾かせ給へるなりや」と申し給へば、犬宮「弾きつべし。宮などのやうに、側におきて、常に

(語釋)
(一) 仲忠母子
(二) 女一宮

(考異)
あて宮、父と犬宮、東宮
などの事を語る。

(六) それ程にせずともよ
き事なるに

(八) 仲忠に書を誦せさせ
し時は仲忠が、藏開の巻
にありし事

(考異)

(二) 調を「を」ナシ

(四) 遊を「を」ナシ

(五) こくばくこくばく

(七) をも「も」ナシ

(九) 千年を「せんねんも

今は弾きてむ」など語り給ふ。夜いとふけたる月夜の、はるかに澄みたるに、
二所弾きあはせ給ひて、犬宮に同じ調を弾かせ奉り給ふ。唯同じことなるを、
うれしう大將おほえ給ふ。

あて宮、いみじう妬う、羨ましう思したるに、一の宮おはせぬをぞ、少し嬉しう
おほす。藤壺に左の大殿参り給へり。あて宮、「一の宮何事を思すらむ。女御子お
はせましかば、羨ましからまし」と聞え給へば、うち笑ひ給ひて、正頼「東宮のお
はしますよりほかに、羨ましき事や思すべき。宮、大將をば物とも見給はで、か
の犬宮と明けくれ難遊を起き臥し給ふを、こよばくの日頃いと然しもあらず
ありぬべきを、内侍のかみをもひき離ちて物せらるれば、此處にも彼處にも、怨
じ恨みて、右のおとどは、さらがへり文をぞ書き通はし給ふなる。一日院の仰せ
られし、「わが文讀ますとて有りし程は、一夜も千年を暮らすやうに思ひたりしを、
おほろけにはあらじ。人々しう如何にや」など仰せられし。怪しき心に「など聞

(語釋)
(一) あて宮腹の皇子たち

(二) 「入れたるさて」は「入
れたまひて」歎

(四) 東宮が仰せらるる

(五) 「もと」は「本」にて手
本の意なるべし

(六) 本人の仲忠が

(七) 誤あらんか

(八) 「ふさい」は「ふさひ」
にて氣に入る意

(考異)
(三) ひきくりに「かた
がたに

え給へば、あて宮、さて有り難くて、今より然教へ奉りたらむこそ、いとになき傳
ならめ。此の宮たちの、遊にのみ心を入れたる、さておはする事。かの梨壺の宮
は、いとなつかしう、美しけにもかき給ひ、書も讀み給ふなれば、東宮教へ奉
らば、いとよきやうにおはしぬべきを、皆人は、ひきくに思ひ挑まれてある
身なれば、宮たち心に入れず、物習はし奉る人もななめり一正頼「たいくしう
誰か然は思ひ奉らむ。學士こそは、明暮参りて仕うまつらめ」あて宮、「いさや。
まづいと怪しきは、學士には讀まじ。大將、源中納言にこそ、書も讀み、何事も
習はめ。かほ醜き人には向はじ。憎し」とあめる、何でふことぞ。手ばかりは、
大將のもとあめりし、いとよう書き似せ給へるめりとぞ、御主宣ふめり。書も何
も、行政の中將のをぞかし給ふ。いと心こはく、今めかしき人々のをのみふさい
給ふ、心づきなし。源中納言はしも、うちくにきけば、今より哀に宣ふもあめ
り」など聞え給ふ。殿は、正頼「美しうもおはします」など聞え給ひて、正頼「この

- (一) 御座がたきに参らせむと
- (二) 今から御側におきたらば成長の後入内せしめん折必輕處せらべしと
- (三) こそ行文歟
- (四) 持たまひては」歟
- (五) 仲忠の櫻を
- (六) 「からもり」は古き物語の中の主人公の名

- (一) なるが」なりし
- (二) 内裏に」のちに
- (三) なるが」が」ナン

人たちは、みな宮をば限なき物にこそ思ひ聞えさせ給ふめれ。中納言も、此の大宮、同じ程の幼き御子うみ給うたるを、いみじうかしづき物にし給ふなるが、「いかで宮の御遊に参らせむと思ふに、目に近きわたりの、内裏に参り給へらむに、定めて、こよなく思しおとさむこと」など宣ひながら、さる財の王の傳にてこそ、世にあり難き笛の御遊の具など、めでたきを持たらひては、「いとうつくしけなるが賜べまろに、といふにも見せじ。思ふ様あり」とぞものし給ふなる」など聞え給ひて、出で給ひぬ。

源中納言祓して歸り給ふとて、餘所ながら、車とどめて見給ふに、けに此の樓いといみじき見物にぞあるかすと、遠いとらうくじく叩きて、かく聞えて、ふと來ね」とて、

涼からもりがやどを見むとて玉ほこに目をつけむこそかたは人なれと思ひ給ふれば、まかり過ぎぬる。川原よりなむ。

とぞおどろくしう叩かせて宣へり。いといたく妬かり給ひて、

仲忠「このへをいかでわけけむ鹽づつのからき袂のくちをしき身は
 よう過ぎさせ給へり。つかせ給ふべき所もなくなむ。まめやかには、今自ら
 まるりてなむ。」

とてうつしに乗せ給ひて、走らせ給へれば、御門おり給はぬに聞えけり。

畫詞 ことは内侍のかみの御方に、右の大殿より、白き色紙に、こと多く恨み聞え給へり。大人、わらは、居竝みたり。あざやかなる装束ども、いろく縫ひたり。犬宮の御方には、御櫛匣殿より、縫ひかさねて、九日の御節供にもて來たり。大人、わらは、几帳そばめつよ、物語讀み、遊しためり。佛の御日、内侍のかみ、御堂にまうで給ひて念誦し給ふ。御前にて、年老いたる人名香とち散らして、著き居たり。

大將 内裏よりも度々召あれば、参り給ふ。まづ院に参り給へり。朱雀いと覺束

- (一) 御立寄りなされてよ
- (二) 御出下されても御坐りなさる處もなし
- (三) うつし馬
- (四) 涼に追付きて返事を奉れり
- (五) 考異
- (六) 仲忠、朱雀院と女一宮と兼雅とを見辨ふ。

〔語釋〕
(一)さつさと濟まして仕舞ふ譯にもゆかぬ

(三)「女御は里にぞ」歎

(四)女一宮の處へ仲忠が

(五)女一が

〔考異〕
(一)然「いらへ」

なしや。國々のなるべき文どもあなるものを。然なる大事あらむ日は、参らるべきものなり」いらへ、仲忠「走り参るべく侍る」朱雀「犬こそ、如何に琴習ひつべからむや」仲忠「然。いと疾く心得つべく侍り」と啓し給へれば、いとよう笑ませ給ひて、朱雀「うつくしき事かな。内侍のかみのとどめらるゝ手なめるを、皆弾きうつしたらむは、いと思ふ様なるべきかな。さても、何時ばかり習ひ給ふらむ」仲忠「心につけてものし侍らば、疾くも果て侍りぬべけれど、幼くものし給へば、心靜に物を心得させつゝ侍るべければなむ。時のうつるに隨ひて、曲の物などは、習ふやう侍れば、またさる節會などに参るべく侍るべければ、すがくとも得」朱雀「珍らし。けに然もあらむ。いと面白かんなる。いかで見む」と宣はす。女御の里にぞおはしける。

夜さり宮におはしたりけるに、二の宮と遊び給ひて聞き入れ給はず。仲忠「院のうちに久しうさふらひて、苦しう侍るを、犬宮の御事も聞えむ」と宣へば二の宮

〔語釋〕
(一)女一が

(二)序に犬宮に逢ひ給へといふ事歎

(三)「たいらん」は「たんども」にて宰相上等を訪ひたるなるべし。一本「たいめん」又「たいめ」

〔考異〕
(四)家司ども「家司ばら

犬宮母を慕ふ。琴に出精す。俊薩女、犬宮を勞はる。

かたはらいたがりて入り給ひぬ。むつかるく出で給へり。大將「うらみ聞え給へば、女「逆様なりや。人の見聞かむ事こそ恥かしき。いと戀しきに、見でや無期にあらむ」大將、仲忠「今、御物忌などの序に。いとむづかし。人々ものし侍り。それに暇の入るべく侍りてなむ」女「さて如何」仲忠「いとつくしう弾き給ふべかめり」など聞え給ふ。

曉に右の大殿に参り給ふ。宮の君も、わか君も、めづらしがり悦び給ふ。大殿、兼雅「あさましく覺束なく、はては御返もなかめり。いと覺束なきをば、九日の物忌しに、いと忍びて物せむ」と宣ふ。仲忠「よう侍なり。菊の宴なれば、参るべく侍り」など聞え給ひて、たいらんに、立ちながら「如何に」など聞え給ふ。つれづれに見え給ふ様なれば、殿家司ども召して、菓物、さるべき物など、御方々に参らせ給ひて、急ぎおはしぬ。

かくて、檀の色々、いとをかしくなりゆくを見給ひて、犬宮「宮のも斯くやあらむ。

(一) 父とは母上に御逢ひなまきし

(考異) (二) 寐て一見て

宮見奉り給へるか。「戀しうとも念ぜよ」と宣ひしを、今は忘れやし給ひぬらむ。
 (一) 御文も賜へかし」と宣ふまよに泣き給ひぬべければ、仲思「な泣き給ひそ。御文侍り。それには「よく習ひ給ふや。今はさらば、わたり給ひて見奉らむ」となむ侍りつる」と聞え給へば、いと嬉しと思ひ給ひて、いとよう弾き給へり。いと心苦しう、理なりとて、おもしろき畫など取う出見せ奉り給へど、ことに例のやうにも見給はで、心にしみて琴を弾き給ふ。月のいと明かに、空澄みわたりて静なるに、山の木蔭、水の波、やうく風涼しくうち吹き立てたるに、いととおとなおとなしう弾き合せ給へるを、大將、かんのおとども、折も心ほそくなりゆくに、涙落ちて、琴教へさし給ひて泣き給ふ氣色を、犬宮、「まろを宣へど、宮戀しくおほえ給ふべかめり。母君も泣き給ふか」と内侍のかみに聞え給へば、皆いとをかしくなり給ひぬ。俊薩女「苦しう思ひ給ふらむ」とて、俊薩女「下へ」とて聞え給へば、犬宮「月あかきには、なほ寐で久しう弾かむ」とて、夜中までおはす。下り給ふに

(語釋) (一) 空洞の住居の當時

(二) 仲思母子昔を思ひて感傷す。俊薩女父の菩提を甲はんことを思ふ。

も、犬宮を樓のはしまで抱き奉り給ひて、乳母人々まるる。抱き移させ給ひて、かんのおとどの御手かけさせ給ひつよ、おろし奉り給ふ。仲思「人々あるものを」と宣へば、俊薩女「斯くおはしますことだにいと畏きを、他人の兒ならば、斯くもおはしますまじけれど、院の御心ばへのいと忝く、萬におはしますに、効ありて、心ことに思ひ給ふる程に、いと不便に侍る」と申し給ひて、例の御送り給ひて、俊薩女「物聞食さどめる、いとく悪きこと」とて、手づから然るべきさまに調じて参り給ふとておはしぬ。

かく心得給ふまよに、いとかしこく、いさよか苦しと思したらで、萬の折々に著う、曲の物弾き給ふ様いと悲し。前裁も山の木どもも、紅葉し、櫛の紅葉今色つく、様様に面白く、風やうく荒く、山の中より落つる瀧も、靜なる所にて聞き給へば、よろづ物の音にあひて哀なり。かんの殿、むかし思ひ出で給ふこと多くて、俊薩女「何方ぞや、このはよ斯くてあるに愛しと宣ひしは」と宣ふまよに、涙こほれ給ふ。大

將「かの坤の山よりこそまかり歩きしか」と聞え給ふ。御硯ひき寄せて、仲忠山おろしの風もつらくぞ思ほえし木の葉もみちもやくとみしかばと書きつけて、おき給ふ心地もいと悲し。

〔語釋〕
 (一)「やく」は「せく」歎

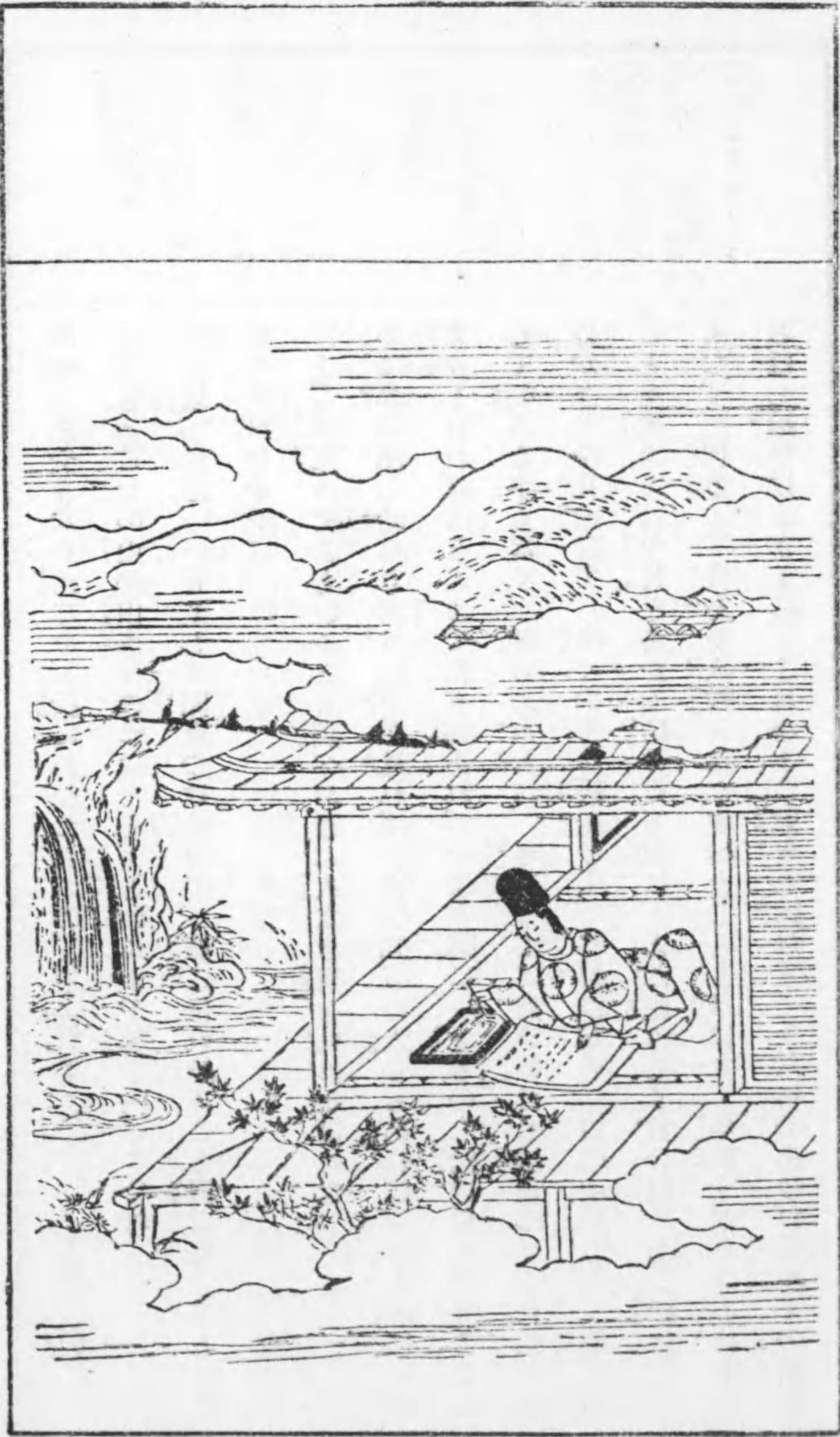
俊隆女ひきあてて峯だにわけし心には紅葉の關をこととやはせしかたみに哀に思ふこと限なし。犬宮も、楓の琴の上に散りおほひたるを、犬宮まろが弾くうらやましとや琴の上にかへでも

とばかり宣ひて、犬宮「恥かし」と宣ひて、末も宣はぬを、かんの殿、俊隆女「如何にか。なほ宣はせよく」と宣へば、

(二)誤あるし

犬宮かよる音をひかむとかと宣はす。木の葉散る風のあらし音に、いとかしこく合せて弾き給へるを大將かなしう聞きおはす。

十月時雨に紅葉かきつくし、とどまる木の葉稀なり。大將、かんのおとどうち休



樓の上(下)

〔語釋〕
 (一)「ふ」は韻歎
 (二)「きくつて」歎
 (三)「いとどしう」は「いとど」歎
 (四)以下倭薩女の心
 (五)「以下倭薩が」
 (六)「我國にありて」
 (七)「考異」
 (八)「そよとーそよや」
 (九)「臥しーとなむ臥し」
 (一〇)「そよとーそよやと」

み給へるやうなる折なり、折にあひたるふの、いと哀なるを遙にうち誦し給ひて、仲思もろこしの山の山彦ひきつけてそよといふまで響きつたへむ
 臥し給へれど、いとどしう聞きつけ給ひて、涙こほれ給ふこと限なし。臥しながら琴に忍びやかに、
 倭薩女 山彦はそよといふとも調べおきし人なき宿を見るかひもなし
 心に思ひ臥し給へり。世の中を見れば、言ひ知らぬ人しあれば、才も時にあひ人々しければこそ、めでたう効あれ、人より殊に、才ものし給ひけれど、こよにして効ある事もなく、知らぬ世界に、年若うして行き傳はり給ひつよ、悲しき目のかぎりを見給ひて、多くの年を経給ひて、内裏はじめ、世の中のこと、飽かぬことを歎きて、年月をあかし給ひける程に、また頼もしく言ひ傳へおき給はむ人もなく、何事も、我身を人並々になすべきことも及ばず、年高うなり、心ほそくおほし給ひけるまよに、これをまた歎とし給ひて、十六年のあひだ、多くの涙を

〔語釋〕
 (一)以下また倭薩女
 (二)父に
 (三)父が今は如何なる世界に轉生し居るならん
 (四)「うたをよみ給ふ」は「たふとよみ給ひ」歎、一本「うたをよみ給ふ」は「せかいはいかくせむ」は「いか八講せむ」歎、一本「せかいはいかくせむ」又「せかいはいかくせむ」
 (五)「考異」
 (六)「奉りてー」ナン
 (七)見給ふらむー見給ふならむ
 (八)給ひつらむー給へらむ
 (九)陀羅尼ーたえず

落させ奉りて生立ちける報にや、また知らず悲しくいみじき目を見けむ、昔より、我がうまれける日より、亡くなり給ふまで、思しけるやう、有りける事どもを、記しおき給へる日記は、肝絶えてかなしきこと數知らず、大將の御ありさま、公 私 の天下にて一の才かたち、心有様を見聞くに、すこし思ひ慰む心地すれど、これをえ見せ聞かせ奉らぬ、悲しう効なきこと、如何なる人か、帝ご申すとも、さらぬ人も、八九十餘までの命ありて、めでたき末の世をも、あくまで見給ふらむ、心憂く悲しくもあれ、と思ひつゞけて悲し。如何なる身とかなり給ひつらむ、一生の間、うたをよみ給ふ、わづかに請せさせ給ひし法師しても、読み講せさせ給ひし提婆品最勝王經、此處にして、日々に、かの御爲に讀ませむ、せかいはいかくせむ、やうく、年もねびゆく身に、かぎりては思ふ事もなし、心靜にて、われも陀羅尼念じ奉ることせむ、すべて、萬に尊からむこと、いかで此處にてせむ、など、來し方行末まで、哀によろづ思ひ臥し給ふ。

〔語釋〕

(一)「宮を」歎

(三)犬宮にさへ逢はぬに

(五)京極へ

(七)兼雅が

(九)「見参」歎

〔考異〕

(二)まぜなどに「まぜに

(四)ともすれば「ともあ

(六)獨臥をせらるるに「

(八)いとをかしき「いと

しき

犬宮の進歩、仲忠の驚嘆、雪の日雪山をつくりて犬宮を慰む。

かくて宮に、大將おほつかなく哀におほえ給へど、限なき大事を夜晝思ひ給ひて、
 過し給ふ。月に四五日まぜなどに、夜おはすれど、宮、女「こひしき人をだに見
 ぬに、見苦しの様や」とて格子もあけさせ給はねば、仲忠「あやしき勘當かな」と
 て勾欄に居明かしつゝ歸り給ふ。右の大殿、さるべき折やとて、ともすればおほ
 すれど、かんのとの、俊隆女「わかき人だに、子を思ひて、うちはへ獨臥をせらるるに、
 (四)いと見苦しからむ」とて、さらに出で給はず。俊隆女「對面し給ひては、あぢきなく、
 (五)大事と思ふことあらむ」とてそのまゝに還し奉り給へば、いとまめやかにむつ
 かり給へど、俊隆女「大將の思はれむ程もむつかし」とて答へもはてさせ給はねば、腹
 立たしうおほえ給へど、大將の御ことかよひたる事なれば、むつかるゝ歸り給ひ
 ぬ。此方彼方の人々見聞きつゝ、「いとをかしき御中らひかな」といふ。
 (六)十一月朔日より、いと遙に、けざんとてわたらせ給ふほどに、便なしとて、寢殿
 (七)にて、人けも遙なれば、さて習はし奉り給ふ。風かぎりなう烈しく、日荒れ、

〔語釋〕

(三)俊隆女の手よりは

(五)以下俊隆女の心、仲忠が幼かりし時の事を思へる也

〔考異〕

(一)あひし手「あひしら

(二)今すこし「今」ナシ

(四)大將も「内侍のかみ

空の氣色苦しげなり。かんのおとど斯かる折にあひし手弾かせ奉り給ふに、い
 さよか誤らず。今すこし、もとの御琴の音よりは勝れたりと聞ゆ。大將も驚き給
 ふ。大將、かんのとのに聞え給ふ、仲忠「大人だに、心には得ながら、え斯うはか
 き鳴らさず。院の上、これをいかに限なく哀に見奉り聞召さむ。他人は、源中
 納言ばかりぞ聞き知り給はむ」と聞え給ふ。

畫詞

こゝは新嘗の日、大將殿の内裏へ参り給ふとて、世に覺あり、みめき
 らきらしき四位、五位、數をつくして参り集ひたり。寢殿と、西の對と、渡殿、
 北の廊かけて、居竝みたり。

雪よるよりいと高う降りて、御前の池、遣水、植木どもいとおもしろし。二尺は
 かりいと高う降り積みたり。人々、「此の年頃、いとかよる雪は降らずかし。これ
 に歩きたるをば、おほろけならずかし」といふを、かんのとの、あはれ昔かよる
 年ありきかし、いと然るにはいかでか、と言ふをも肯かで、山へこそ行かざらめ、

〔精語〕
(一)「いぢめしは「いかめし」歟

(四)「給へば」は「給ふ」なるべし

(五)「人よりもは「いつよりも」歟

〔考異〕
(二)君の「まゝ」の

(三)二の宮と「二の宮」とは

(六)「すくみにて」すくみて

(七)「入り給ふに」に「ナシ

⑤仲忠、涼を訪ひて強ひて其の子を見る。

川へこそいらめ、とて、強ひて歩み出でておはせしを思ひ出で給ふに、雨の脚よりもけに多う、袖に涙の落ち給ふも、ゆゑしう覺え給へど、え念じ給はで、

俊隆女山はさえ川べのこほり雪しみてなみだの雨とふりし宿かな

とおほえ給ふを、犬宮、「な泣き給ひそ。まろも念じてこそあれ」と聞え給へばお

と、俊鷹宮をば、いと戀しうや思ひ聞え給ふ。いかどありし」犬宮、雪の降るま

で見奉らねば、いと化しけれど、君の「な泣きそ」と宣へば。宮は、雪をぞ山

につくらせ給ひて、まろと二の宮と並びて見侍りしかし」と宣ふまよに泣き給ひ

ぬべければ、他事にまぎらはし給へば、いと黒うつやよかなる御衣に、薄蘇枋の、

唐綾の御ほそながにはえて、清らに、いよく美しけになりまさり給ふ。雪山つ

くらせ給ひて、雛遊などもろ共にして、見せ奉り給ふ。

大將、人よりも疾く、宮にまで給へるに、例の入れ奉り給はず。作びて、源

中納言の方におはして、仲忠「身もすくみにて侍りや」とてたど入りに入り給ふに、

遠けにいみじう侍り。かよるやうにぞ、しつらひたりけるや」と笑ひ給ひて、遠ま

づ、御衣ぬがせ給へ」と取りて、屏風にかけさせ給へば、仲忠「いとあやしう、女

房になし給はむや」とて中納言、遠身にあまりたる事したらむ人ぞ、然はあらむ。

擇屑の人は「など笑ふく、御前の長角櫃の火おほくおこさせ給ひて、御衣架に

かけたる鞋ども五つひき襲ねて、遠「これは汚れず」とて著せ給へれば、仲忠「例の

物狂ほしさ。今大人々々しうおはせむや。さても、いみじき宮の御心かな。さは

れ、いとうれしき夜なり。もろ共にあかさむ。など疎くもぞ思す。例のまよにて

あらむかし。いづら目安くも、まだ物も食まずや。師の君、日暮るとなり。御賄

せられよ。中納言の君、おそし。いづらく」と宣へば、師君「いとわりなき世か

な。然ば如何はせむ」とて、色擗目などもえならぬ、めでたく装束きて、師の君、

三尺の几帳ひき添へてゐざり出でたり。よき童への、はかまいとつやよかにて、燈

よき程にとりなさせて、御臺は参らせ給ふ。大將は、恥かしと思ふらむとて、う

〔語釋〕
(一)女一宮の
(二)師の君も中納言の君も涼方の女房の名
(四)師君が

〔考異〕
(二)食まずや「たばずや

〔語釋〕
(一)側見をして

(二)仲忠の心

(三)涼が大事にして

(四)いとほしうと思す」
歟

(六)涼と仲忠

(七)香をたきしめたる

〔考異〕

(五)人にもかくしひのや
くは一人にはからしむる
なのやくは一人にもはか
ちくしひのやくは一人も
の君にいとかたじけなし
やくし所もなくとかうし
のやくは

(八)物習ひ給はむ一よに
ならひ給ひてむ

(九)夜一よる」

ち側みて居給へり。帥の君をば、いとやんごとなく、大納言の御女にて、心外に
して、我だに、賄もせさせずと宣ひしものを、いとほしう思す。中納言の君とい
ふは、奥の方より、あるじ殿の御臺まるる。童へも、これは又ことなり。いづれ
となく清けに目留まりぬばかりなり。大將後、向きながら、仲忠「清う、人にもか
くしひのやくはし給ふや」と宣へば、中納言「帝よりや」と忍びやかに聞え給へば、
仲忠「さてなにぞ。殿上も許し聞えむかし」と宣へば中納言、「いと辛きこと」とて
皆わらひ給ひぬ。御臺まるり、御菓物などまるり給ひて皆まかで給ひて、二所臥
し給ひて中納言、「蕨子持くさからぬ袂持て來」とて、かうの辛櫃よりしみかへり
たる持て参りたれば、二所うち著給ひて、様々にをかしう、怪しき御物語し給
ひて、中納言、「いで、そのかんの殿の、手の限ひき給ふらむ、聽かせ給へ。物習
ひ給はむ程も、聞かまほしきものかな。夜習ひ給はむ程も」仲忠「易きこと、さて御
姫君には、何をかは教ふる」蕨、琴のはしを知らせむかし、と思ひしかど、中々な

〔語釋〕

(一)他の事は教へても琴
は教ふまじと

(二)雷に打ち殺さるる法
もあれ、「いかづち」一本
「かづち」

(四)我子は器量悪し

(六)以下涼の心

(九)我子が犬宮に劣るか
も知らねど

(一〇)我子も

(一一)我子の犬宮をばよ
く君は見たりしものを

(一二)御娘を

(一三)涼の娘

(一四)「これ見奉りては」
歟

〔考異〕

(三)にぞ一に「チン

(五)とは一など

(七)我のみ一我らのみ一
我とのみ

(八)少しも劣らぬ一少し
ぞ劣らぬ一少しも劣らぬ

る事は知らせじとて、腹立たしくて、他事は教ふともとてなむ」仲忠「あひなの御
事や。萬の事よりも、かの琴彈かざらむをば何にかはせむ。いで、まろいかで見
奉らむ。さらすとも、犬宮とひとしく教へ奉らむ」蕨「習はし給ひそ」仲忠「い
かづちの神にもうち殺され奉らむ。眞にぞとよ」中納言、蕨御傳はしも、け
に必ず然るべきことならむ。これはわざとならずともあへなむ。まづく、
と、醜し。心劣りし給ひなむ」とは聞え給ひながらいみじう、我のみになきもの
をと、思ひ給ふに、我もものを見知らずやはある、内侍のすけの言ひしやうに、
けにあなめでたと、花やかなる事の、少しも劣らぬ、なべては、このわたりにも、
また斯ばかりの容貌はあらじ、これもけしうはあらざりけり、今もや見せ奉ら
む、と思ひ給ひて、如何にせましと思ひ給ふに、仲忠「まろがいと明らかに見給ひ
てしを、よかなり、吾が佛、なほ見せ給へ。内侍のすけの聞えしは、見苦しう、
まだあやめも見えざりしをだに、かの犬宮見ては、この姫君ゆかしく、これに

〔語釋〕
 (一)「をつく」は「せむし」の誤歟
 (二)涼の若君が
 (三)若君が
 (四)仲忠が

奉りては、また犬宮ならべてゆかしうなむある。行末の人も、今然にぞ聞えむ」と言ひし。かたみに睦まじう見奉らむかし」とてをつく宣へば、逸犬宮は、不意にこそ、たどかたはらの御姿を見奉りし。内侍のすけは人に心慄せさせて物言ふさがな者なり。さても、母君と晝かき給ふめりつるを」と宣へば大將、仲忠「それこそよかなれ。忍びて率ておはしてのぞかせ給へ」中納言うち笑ひて、逸をかしの事や。しれものところ見給ひつれ。さばれ賺され奉らむかし。伯父ぬしたちに、夢にも見せぬものを」とて、おきて、俄に入りおはして、晝かくとて居給へるを、傍より、ふとかき抱きて、燈の程、間半ばかり離りてついすゑ奉り給へる様態、頭つき、けにいみじうあてに細やかなり。仲忠「いでく」とておはすれば、いとあさましき心地し給ひて、立ちて、中納言の御方に歸り給ふ程、犬宮の御長にて。髪は今すこしぞ長にはづれ給へる。これは、様態小ながら、大人にていみじう美しう、中々飽かずおほえ給ふ。逸「いとほし」とて、抱きて立ち給へば、

〔考異〕
 (一)とてをつく宣へば
 (二)かたみに宣ふ
 (三)見給ひつれ見給へ
 (四)すこしぞ長にすこし
 (五)美しうたけにすこし
 (六)こしたけに

〔語釋〕
 (一)仲忠が
 (二)涼が
 (三)仲忠に語る也
 (四)今宮が我を
 (五)「空口」詐の意歟
 (六)「をわたり」は「御わた
 (七)歟
 (八)女一宮のも、犬宮
 をさよ

仲忠「燈臺の燈の明きに、その御顔よ」と宣へば、逸いかでか。然までは」とて抱きながら立ち給へる、つやくとして、縹のいと薄き唐綾のうちぎにかよりたる御髪、尾花の末のやうなり。いとなまめかしき容貌なり。燈のあかき方に晝かくとて獨り居給へりける、こともなげなり。急ぎて入り給ひぬ。犬宮のいとをさなけに、兒の顔し給ひて、けだかう優れ給へる、けにこよなしかしとおほえ給へり。君、今宮「いとあさましく珍らかなること」とて腹立ち給へば、ついすゑて、逃けて出で給へば、今宮「物に狂ひ給ふなめり。萬の人を集めて見せむよりも、此の大將には、かよるわざはし給はましや。目見合せ奉るや」と宣ふを、逸云々なむ悔りつる。いみじう騒がれなむ。いとうたてし。常にそらぐらもし給へるをわたりにこそあめれ」とてうち嘆き給へば、仲忠「吾が佛、なほおはせよ。けしうはあらし。さても、美しけなる御様かな。宮のも同じ年にこそ生れ給ひし。御髪長さまさり御かたちも同じ程を、いま少しばかり勝り給へりと、まろは思ふことなきを、

〔異〕
 (一)給へり君給ふさま
 (二)みや
 (三)わさは「は」ナン
 (四)美しげなる美しき
 (五)御かたち御様

〔語釋〕
 (一) 忠澄の娘が器量よしとか
 (二) 若宮を見せて下されたる禮に
 (三) 誤あるべし。一本、あきらかになる
 (四) 女一宮へ

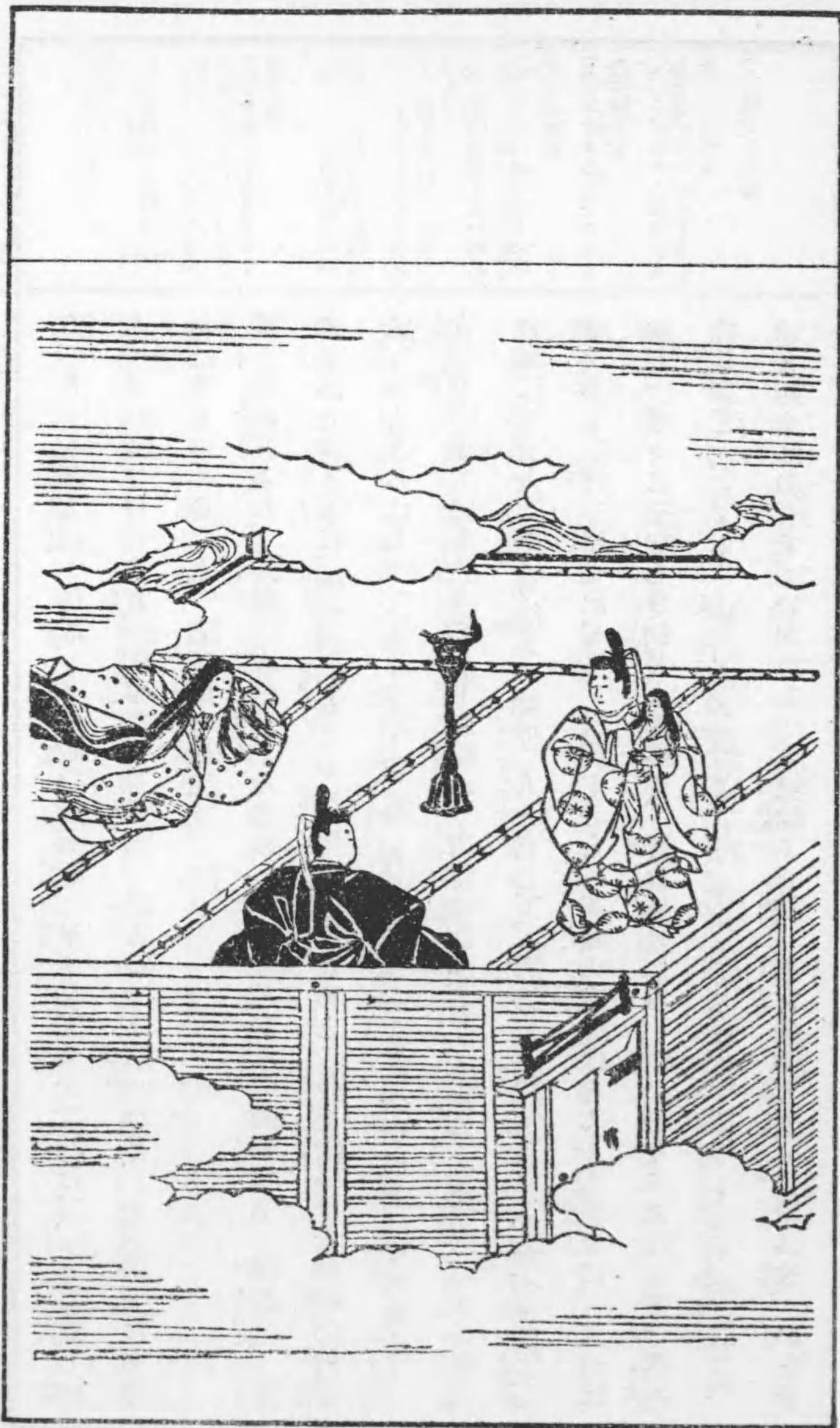
〔考異〕
 (一) 多からじ一とほえじ
 (二) いで一いちへ
 (三) いたど一なんど
 (四) たど一なんど
 (五) たど一なんど
 (六) はて一ナシ
 (七) 侍る一あて
 (八) うしろめたくうしろめたくうしろめたなく

●歳暮に仲忠節料を處々に頒つ。

誰にかは、かくばかりめでたき女持給へる。多からじかし」左衛門督の、いとよしとか」大將、仲忠「いで、さりととも、え人知らじ」など物語りあかし給ひて、あけぬ。仲忠「この祿に、何事をか、まことは仕うまつらむ」遮他事もなし。たどに、内侍のかんの殿の手のかぎり弾き盡し給へらむ、犬宮の習ひはて給へらむぞ、いと聞きあはせまほしき」仲忠「いと易きこと」と宣ひて、遮しばし」と聞き給へど急ぎおき給ひて、宮の御方におはして寢給へる間に當りたる格子をうち叩きて、仲忠「すもりこのかへらぬ程は冬の夜の鴨の浮寝ぞわびしかりける

さても生憎き目を見るかな」とをかしき聲して詠みかけておはしぬ。聞き給へど女「憎し」とて返も宣はず。まめやかに、月日に添へて、古こひしう宮もおほす。中納言、いかどあさましとて、物も聞え給はず。

十二月、すこしあきらかなる折ありて、懲りすまに大將わたらせ給ひつ。仲忠「年のはじめに獨り侍る、あしかるべし。其方にと思ひ給へるは、うしろめたく聞え侍



- (一) 語釋
- (二) 仁壽殿
- (三) 年を越し給ふの意歎
- (四) 御方ばもなまめがしき」歎
- (五) ありて調じたり」歎
- (六) 給へれば給へれど
- (七) べければなむべければ便なし
- (八) ちはするに便なし」おはすれば
- (九) などかんの殿君だち」などかんの君の」などを上の君たち
- (一〇) 御方」御許

るべし」と聞え給へれば、女二院の女御殿、辛うじてまかで給ひて、とし返し給ふべければなむ。犬宮、御車ながら見む。此方に」と宣へれど、仲忠、御子たちのおはするに、便なし」とて聞き給はず。

(五) 國々の御莊より、節料に人の奉るきぬ、わたなどかんの殿君だち、御許人、下にさふらふ人々に、例の御節料より外に、いとかめしう分ち給ふ。女御殿の御方に、いとうるはしうて、さまざまに奉らせ給ふ。三條殿の對におはする御方々、宮の君の御方にも色々に奉り給ふ。内侍のかみ、對の宰相殿の御方、なまめかしき様にて、もの奉り給ふ。御使、人々召して、はなだの綾のほそながかづけ給ふ。さまざまに持て出づれども、又同じごと、御前の庭のはるくと廣きに、三百ばかり、様々にをかしき物ども添へて、置き集めたる、例のありさまならず。御遊の具など、いろく、見所あり調じたり。かんのとの見給ふに、大臣の所にだに、いと斯くはあらず、いかめし、と見給ふ。院、東宮の御方より得給ふ物、いと

新年

- (一) 語釋
- (二) 仲忠が
- (三) 「する」は「ある」歎
- (四) 女一宮
- (五) 誤あるべし、一本「えしも」を「えし」ともに作る
- (六) 「よろしからぬ様」に」歎
- (七) 生憎に」あやにくく
- (八) 理と」理に

らきらし、入道の君の御許、忠君僧都の御もとに、奉り給ふ。

(一) 正月朔日には内裏、院、東宮、大后の宮などに参り給ふ。御前いとかめしう、御かたぐの人人ものしうみ奉る。宮におはしまして、大宮の御方、つぎに女御君拜し奉り給ふ。女御、仁壽わかうより帝を見奉る、などかはする。この大將、見るこそ哀ならねど、あやしう恥かしう、命延ぶる心地すれ」宮の御方に入りたまへば、逃けて女御の御方におはすれば、仲忠「こは何ぞ」と見苦しかり聞え給はすれば、二の宮、女二犬宮おはするまでは見えじ、とて、去年の秋より斯くなむ。藤壺に宣ふらむもはづかし、とて如何にえしも聞え給はず」と聞え給ふ。

(二) 女一「けに、あまり生憎に怪しきわざなり」とて、かく聞え給ふ。女二身をつみ給はどとこそ。みには、思ひ聞えむ程は、思すまじくや。侍らじとあめるも理となむ」大將うちわらひ給ひて、仲忠、仲忠こそ、うれへ聞えさせむと思ふ給ふこと侍れ。いかに聞えさせ給へればか、年の始に、よろしからむ様に宣はすらむ。ゆ

(語釋)
 (一) 歸り給へ
 (二) 仲忠が
 (四) 「中の」は「沈の」を「ぢうの」と書けるより誤れるなるべし
 (六) 女一に
 (一) 正頼の一族は
 (二) 女一が
 (一) 三「など」とて「なるべし」
 (一) 五 忠雅兼雅も大饗を見合せたる也

(考異)
 (三) 女御の君より一女御より大將殿に
 (五) 三つ四つして一三まいして
 (七) なり一ナシ
 (八) ちれず一ちれて
 (九) はなたれ一はなれ
 (一〇) 思し一おぼえ
 (一四) 大殿の厄年にははするとして一大殿は思み給ふ年にははするとして

ゆしう侍るを、二日はなほわたらせ給ふべく聞えさせ給へ」とあれば宮、女二世の常ならず心ある人ならば、さりともみな思ふ給ふやうあらむ。なほ早わたり給へ」と聞え給へど寄り臥し給ひぬ。女御の君より、御菓物を中の折敷三つ四つしてまゐらせ給へれど、まゐらず出で給ひぬ。

中納言、立ちながら對面し給へり。遠女御の君おはすれば、如何に、さりとも御對面はありつらむな」仲忠「さも侍らず。腹立たしければ、急ぎまかつるなり」中納言、遠くやしき事をして、その儘にまた目も見あはせられずかたことにとりはなたれにたり」仲忠「あやしかりける事を、うたてこそ憎き御心なれ」中納言、遠かの國讓のこと思し給はずや。帝をだに、事ともせられぬ、かのわたりは」と宣へば、仲忠「いでや、かの御心に似給へるこそは、いと憎きことなれ。あなかまや。まろがならむ様に、なほあるばかりぞ」などて出で給ひぬ。

左の大殿の厄年におはするとして、大饗せられねば、いま一所も「何かは」とてあ

(語釋)
 (二) 正頼の一家と忠雅兼雅の一家なるべし
 (三) 未考誤あるべし

樓上の二月、三月、四月、五月。

(考異)
 (一) ハキ一ハ

れば、「さうぐしかるべき年かな」と人言ふ。晦がたに、「子日せよ」とて、かたの人々あまた、山にありかせ給ふ。日のどかにて、樓より見おろしたれば、色々にわかき人々、わらは、下仕、装束き、つほよりもありて、此方彼方の人々歌詠みたらむかし。

二月晦がたよりは、猶樓にてならはし奉り給ふ、山のけしき、色づく見るもいとをかし、とて。三月節供、例のいと清らにて参り給ふ。櫻の花、樺櫻の花、いとおもしろし。樓はたど櫻の花の中につままれたり。犬宮、一所まめやかにておはすればにやあらむ、いとこよなく大人々々しうなりまさり給ふ。鶯の聲いと近う、花に居て啼くを、いとどのどやかに、その聲にあはせて弾き給ひつよ、犬宮鶯の花にむつると聲きけばこひしき人ぞ思ひやらるとと弾き給ふを、大將いと哀に聞き給へど、かしづき給へば、いと恥かしげに物恥をし給へば、たどにおはす。

〔語釋〕
(二)君だもは「御たち」歎

四月祭の日、葵かづらいといつくしう麗しき様にて、禰宜の太夫、かんの殿の御方に持て参りたり。かづけ物し給ふ。大將清けなる四位、五位して、かんの殿の御簾につけさせ給ふ。あをき薄様に書きて奉り給ふ。

〔考異〕
(四)俊隆女、仲忠、犬宮

俊隆女玉すだれかよる葵のかけそへば心のやみもなかりける世を大將御返

仲忠雲井なるかつらにかよる葵にもむかはぬ程ぞくれ惑ひける

掛けさせ給ふにつけて、つきせず思ひ給ふる。あなかしこ。

〔考異〕
(一)殿のも「」のナシ

と聞え給ふ。かたみに哀におほえ給ふ。

五月節供、右の大殿よりあり。宮の御方の女御にも贈り給ふ。この殿のも、心こ

とになくて参らせ給へり。君だち、下仕までも、衝重いと清けなり。例もかん

〔考異〕
(三)降りくちすー降りてくちす

の殿の御節供は、藏人ぞ参り給ひける。今は長雨がちなり。しづやかに降りくらす日、時鳥かすかに鳴きわたり、月ほのかに見えたり。三所ながら、静に弾きあ

はせ給へる、いとおもしろし。此方彼方の人、泉殿に出でて聞く。殿の人々の中にも、いとよく琴習ひたる數多あり。いづれと聞き別き奉らず。今、手の限をつくして、弾きとどめたる折につけつゝ、琴をかへて弾き給ふ。静なる音、高う

〔語釋〕
(三)「限あるべし」給ふと「一本」給ふに

ひどき出で、土の下までひどく音す。哀に心すこきこと限なし。

〔六月の詠〕

六月暑けれど、樓の上は、山高き木どもの風、いみじう涼し。犬宮、白き羅、ひとへがさね著給へり。晦に、御祓し給ひに、二所ながら、御前いかめしうて、

〔考異〕
(一)中にもいとよく「中にもとよく」

河原に出で給へり。右大殿の梨壺の御子も率て出で奉り給へり。大殿の御孫も

まうで給へる程に、平張いと近し。御子君、若君と遊び給ひて、梨壺皇子「いざ、か

の平張に往かむ」と宣ひて、御簾ふと掲げて入りおはします。犬宮、かんの殿の

御傍に、三尺の几帳立てて居給へるに、さしのぞき給へる、うち見合せ給へば、

ふむ後とき給ふに、内侍のかみうち驚き給ひて、胸ふたがり、いみじきわざかな。大將の給ふと思ひ給ひて、遠くわれるざり出でて。俊隆女「いふかひなきわざかな」

(二)給へばー給ふ

〔語釋〕

(三)有の儘にもの意歟

(五)梨壺腹

(一)考異
(二)なければなし

(二)おはしませばありありしうも宣はず―おはすればあり―しう上に宣はじとおぼす

(四)御子に我―御子には我

とて、え荒く聞え給ふべき方もなければ、俊隆女「此方おはしませ」とて御座うち敷きて、する奉り給ひて、俊隆女「何か御覽じつる」と聞え給へば、いと靜に、皇子物やは見つる」と聞え給ふ。いみじうつくしげに心深く、大人のやうにおはしませば、ありくしうも宣はず。幼き心地、小き人々を見るに、まだかゝる人は見ず、いみじう美しう、また見まほしきかな、もろ共に遊ばよや、と心にしみて覺え給へど、物も宣はず。犬宮は、宮の君にだに見えぬものを、あさましきわざかな、と恐ろしきまでおほえ給ふ。御子に、我、とりするて、御葉物まゐり給へど、ことにまるらず。宮の君、若君、いと美しうて、「宮こそ、おはしませ。鳥の水に下るよ見給へ」と聞え給ふに又や見べき、と氣色見給へど、さるべくもあらず。大將おはすれば、おはしましぬ。仲思「あなかしこ。騒がしう。宮や入りおはしたりつらむ、と思ひ給へつる」と宣ふもいとほし。夜さりまで、鶉飼などして歸り給ふ。大將は、殿の御送しておはしぬ。

〔語釋〕
(一)歩障歟

〔語釋〕
(二)歩障歟

七月七日、犬宮御髪すませ奉り給ふとて、樓の南なる、山井の尻ひきたるに、濱床水の上に立てて、内侍のかみもろ共におはす。それもすましためり。人も見えぬ方なれど、ほうせうひかせ給へり。乳母の君も、二人して、粕ばかり著て、童へ取り次ぎたり。御髪、心もとなしと宣ひし、長になり給ひにけり。御容貌も、變化のものの様に、なりまさり給ふ。柵機祭、かなたこなたとせさせ給へり。内侍のかみ、柵機に、今宵の御供のもの、少しひきて奉らむ、靜なる所なり、とおほすに、二方に、君たち人々、反橋に几帳ばかりを立てて出で居給へり。宵少し過ぐる程に、源中納言、狩の装にて、馬にておはして、南の山の籬の外におはして、御座敷かせて、傘、かの木の空洞におき給ひ、頬杖つきておはす。氣色だつ風冷やかにうち吹く程に、かんのとの、俊隆女「いざや、御供彈き奉りなむ」とて、はし風を我彈き給ひ、ほそを風を犬宮、りうかく風を大將に奉り給ひて、曲の物たど一つを同じ聲にて彈き給ふに、世に知らぬまで、空に高うひど

(語釋)
(一)涼が
(三)涼の心

(考異)
(二)給ふべくはたあらざ
一給ふべきわざにあらず
(四)わりなくとも一て
ナシ

(五)あたりて耀く一あた
り耀く
(六)三所一彈き給ふなり
ひりーナシ

(七)見おろし一見いだし

く。萬の鼓、樂のものの笛、琴、彈物、ひとりしてかき合せたる音してひどき上
る。おもしろきに、聽く人空に浮むやうなり。星ども騒ぎて、雷鳴らむするやう
にて、ひらめき騒ぐ。かつは、如何にせむとおほえ給へど、聽きさし給ふべくは
たあらず。御供なる左衛門尉なるものに、太刀を抜かせて聽き給ふ。様々におも
しろき聲々の哀なる音、同じ聲にて、命延び、世の榮を見給ふやうなり。わりな
くても、斯くて聞かざらましかば、如何にくち惜からまし、と覺え給ふ。左衛門
尉は、天を仰ぎて聽きるたり。夜いたう更けぬれば、七日の月今は入るべきに、
光たちまちに明かになりて、かの樓の上と覺しきにあたりて耀く。雷はるかに
鳴りゆきて、月のめぐりに星集まるめり。世になう芳しき風、吹き匂はしたり。
少し寐入りたる人々目さめて他事おほえず、空に向ひて見聞く。樓のめぐりは、ま
して様々に珍らしう、芳しき香満ちたり。三所ながら、大將おはする渡殿にて彈
き給ふなりけり。下を見おろし給へば、月の光に、前裁の露玉を敷きたるやうな
(七)

(語釋)
(二)涼の心

(二)俊隆

(考異)
(三)主の書一集

(四)知らぬ一おりて

り。響澄み、音高きことすぐれたる琴なれば、かんのおとど忍びて、音の限もえ
かき鳴し給はず。色々の雲、月のめぐりに立ち舞ひて、琴の聲高くなる時は、月、
星、雲も騒がしくて、靜になる折はのどかなり。聞き給ふに飽くべき世なう、曉
までも聞かむとおほすに、夜半おほく過ぐるほどに、彈きやみ給ひぬ。
大將、次に横笛を聲の出づるかぎり吹き給ふ。おもしろき折にあひて、哀にすこ
う、これも世になく聞ゆ。聞き驚き給ひて笛は、昔われと等しうこそありしか、
ことに好み給はずと聞くに、いとこよなうまさり給ひにけり、とあさましう覺え
給ふ。曉になりゆく。空しづまり長閑なるに、治部卿の主の書の中に、唐土よ
り知らぬ國に到りて、知らぬ道を行き給ひけるに、いみじう哀におもしろき所々
に、四季の花咲きみだれ、ある所には恐ろしくいみじき容貌したるもの集りてあ
るわたりを過ぎ給ふとて、道のまよに長く思ひつゞけて、哀なる聲を出だして誦
し給へる、また歸りて後、家のさびしきを眺めて、時につけつゝ作り集め給へる、
(四)

〔語釋〕
(一)涼が

(二)大將の歎

〔倭女妻に父の告を聞く。妻のしらせの珍客を待つ。〕

〔考異〕
(一)なきに―なきを

(四)只今―今

詩を誦し給へる、聞きしらぬ人だに、涙落さぬはなきに、まして大將の、此の所にて誦し給へるは、聲よりはじめておもしろう哀なるに、御直衣の袖、まして絞るばかりになる。琴の聲、かくの聲、もろ聲にしみたり。盡きすおほえ給へど音せずなりぬれば、あかで歸り給ふ。道のまよ、世の中いとはかなくも哀にて、紀伊國に年經給ひしなど、よろづ思ひつゞけられ給ふ。
大將もうち臥し給ふ。かんの殿も、琴に手をうちかけて、いさよか寐入り給ふともなき程に、見給ふやう、「昔のものの聲の、さも哀に珍らしく聞き侍りつるかな。大將も、おほん樂の聲も、哀にかなしうなむ。さて今日、御門に參らむ人、必ず召し入れて見給ふべき人なり」と治部卿の御聲なり。いらへ聞え給はむとする程に、醒めて、いみじう泣き給ふ。大將、まだ寢給はねば、あやしと驚き申し給へば、倭女「いと哀なることをなむ見つる。かくれ給ひて後、「夢にだに見え給へ」と心細う侘しかりしまよに思ひしかど、絶えてなむ見え給はざりしに、只今かくな

〔語釋〕

(四)今日尋ね来る人あるべしと倭薩が告げし人

(六)今住める大將は倭薩の子孫か

〔考異〕

(一)給ひつる―給へる

(二)かの―木の

(三)給ひしも聞き給ひけるよ―給ひけるを聞き給ひけるにこそ

〔珍客。よしむねの時宗、老婢さかの孫四人を携へて来る。倭薩女の懷舊、四人の孫を留めて寵用す。〕

(五)具したりつる―こしたれたる―むしたれる人

む見え給ひつる。此のなん風は、中に勝れておもしろき物にし給ひしを、かの空洞より出でむとせし時、さては昨夜こそ、いさよかかき鳴らしつるを、聞き給ひける。哀なる詩を誦し給ひしも、聞き給ひけるよ。いみじう悲しうなむ覺ゆる」とて泣き給ふ。大將も聞き給ひけることと、悲しくて泣き給ふ。理なり。仲忠「人の事、如何なることならむ。斯かるを見給ひける、と、思ふなむ、效はなけれど、いと哀に嬉しう」など聞え給ふ。御門には、つとめてより、然べき人々に宣ひて、仲忠「如何にもあれ、人の來む、斯くなむと申せ」と宣ひて、今日は寢殿におはす。
酉の時ばかりに、東の御門に、馬に乗りたる男、童四人具したりつる人來て、下りて、向なる御殿にて、御門に居たる人に問はす、童「此の殿をば何とか申す」といへば、門番「大將殿となむ申す」といふに、童「此の殿に昔より住み給ふ人や聞き給ふ」と問はす。門番「治部卿の殿となむ申し侍りし」と言へば、童「此方に物し給へ」とてみづから逢ひて、男「吾が佛、いと嬉しう、いらへ給へる」とて、男「か

〔語釋〕
(一)かく申上ぐるると申上げて下され

(六)主の男も

(八)此男が

〔考異〕

(一)といちふ然ばといふさるべきとこたふさば

(三)とりナシ

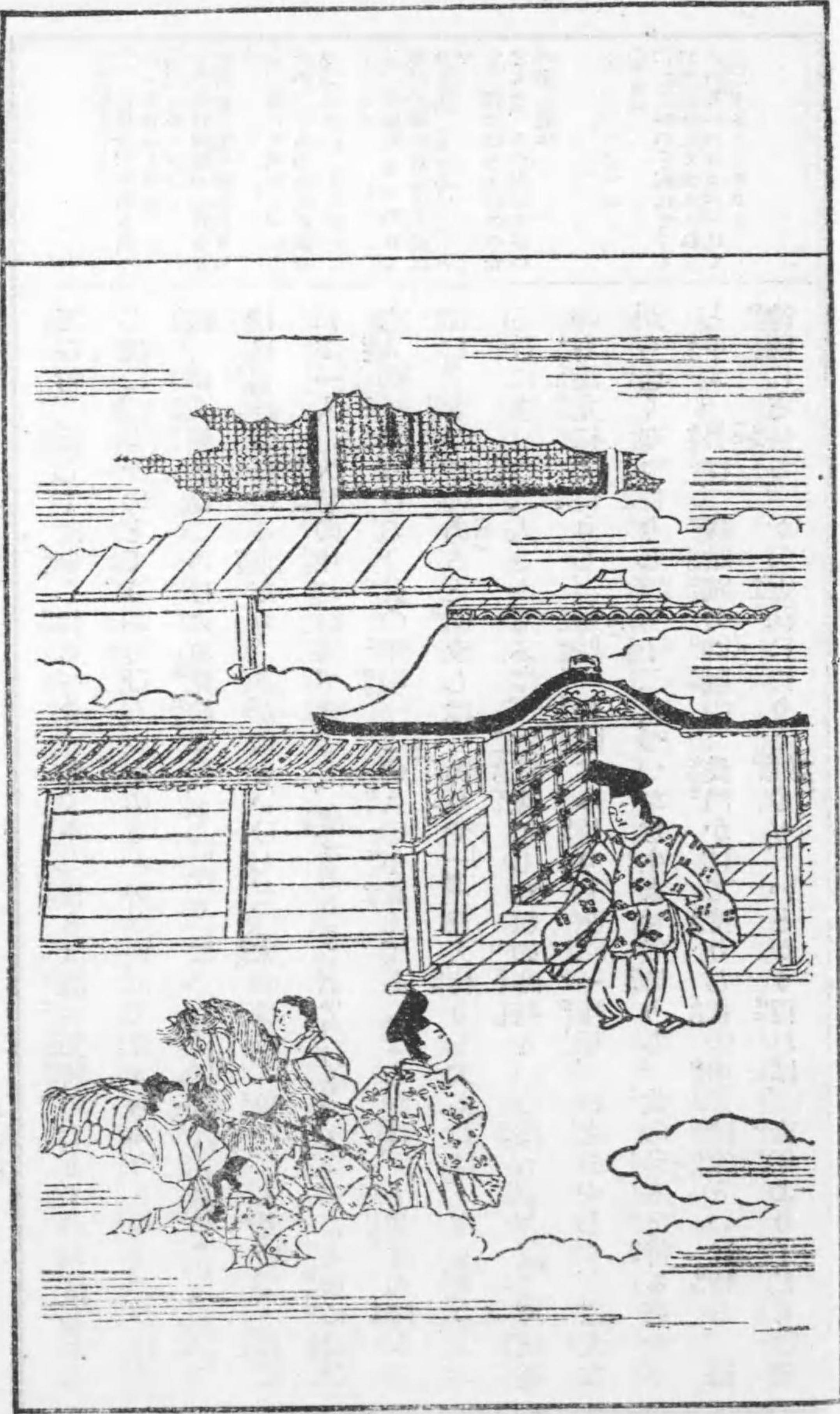
(四)ほど一程に

(五)齊しく一齊しう

(七)笏に取りて一さしかさして

(九)せられつるぞ一せらるぞ

の御末の後か」といへば、門番然。此の御後のおはします」といらふ。男然ば、
「ふるき家司、御厨子所に、切にうれへ申すべきこと侍るとてなむ、昔この殿にさ
ふらひし、下人なむ参りたる」とこれ申すととり申し給へ。一生の君と仕うまつ
り、悦び申さむ」といふ。門番斯くなむ」と申せば、大將聞き給ひて、仲忠ある
やうあらむ」ととて、まづ寢殿なる人對におろさせ給ひて、我出で給ひて、仲忠た
だ此處に参れと言へ」と召し入る。悦びて、いとをかしけなる童の、長四尺に足
らぬほど、髪鬘ばかりにていと齊しく整ひたる、いと清けに、装束かせて、四人
後に立てて参りたり。これもいと清けに装束きて、扇笏に取りて具したるさま、
いとゆるくし。年四十ばかりなり。北の廂にかんのおとど、大將の君もおはす。
大將を見奉るに、けに恐ろしきまで清けに氣高うおほえて、上らず。いと氣な
つかしう、仲忠此方や」と宣へば、上り参りたり。仲忠いづこより物せられたる
ぞ。誰に逢はむと、ものせられつるぞ」と宣へば、男まづ、仰せられむ事承り



〔語釋〕
 (一)俊隆女が仲忠を産む時に世話せし老婢
 (二)さかのが
 (三)姉は時持の妻になり妹は右馬允の妻になりし也
 (四)連れて来たるが即ちその子どもなりとの意なるべし
 (五)私は
 (六)御願をあづかりて長門の縁か目などを兼任せる也。「みまや」「一本みや」
 (七)姪は即ちさかのの女ども也、この男はさかのの弟と見ゆ
 (八)さかのの族にて「さかのせき」とてさふらひしかのさかのせきが子にて
 (九)あるとありと

てなむ、委しくは申し侍るべき。かく申し侍るは故に部卿のおとどのおはしましし世に、さかのとてさふらひし、かのさかのが族にてさふらふ」と申す。かんの殿、御几帳のほころびより見給ふに、十ばかりにて、けに見給ひし者なり。哀に、けに當時おほゆる人なり。さかのといひしぞ、末の世に、年いたく老いて、哀にたど一人、大將の生れ給ふべきこと、急ぎありきしなりけり。俊隆女、いと哀に思ひし人の子なりける。此の年頃、この人の年若くてあらましかば、と思はぬ時なくなむ。女などのあると聞きしは、ありや「男」三人侍りし大あねは、なくなりさふらひにき。今二人さふらふは、近江椽よしむねの時持といひ侍りし、その同胞の右馬允にて侍りし、姉妹、年頃すみ侍りしを、一昨年、いとあやしく、二人ながら亡くなり侍りし。男子二人づつなむ生ませて侍りし。此の参りて侍るぞかうと申す。男は、嵯峨院の御願の、長門かけて侍りし者の弟の時宗といひ侍る。攝津國にぞ侍る。かの近江に侍りし姪ども、いとかう侍れば、去年より子どもひき

〔語釋〕
 (一)國分寺に召使ふ童子に缺員ある由曉あり
 (二)さかのをいふ
 (三)俊隆
 (四)考異
 (五)いとなく―いとなく
 (六)法師はしがり侍りつるに―法師のほりし侍りつるを
 (七)言ひなどし何かとむつかしう―言ひなどし何かとむべし―しう
 (八)勤じ―てうじ

連れて接み侍り。その子どもの童べ四人、いときたなけには侍らぬ、そこに侍るものども、身の程の程などおとなしく、程につけては、京の殿ばらに奉らむと申すを、去年までは親の服に侍りしかば、籠めすゑて侍りしを、國分寺の童べのあきたる事のさふらふなど申しき。此の童べを法師ほしがり侍りつるに、親侍りし時、俗になさむと、母にて侍る者どもの申しき。これらが事を國の守に言ひなとし、何かとむつかしう申して、僧の方よりも、公がたにつけて、責め勘じ、家を亡し侍り。これらが母の申すは、「おのづから、某侍らむ。此の母、若くより宮仕を仕うまつりし、身の程あやしきをも知らず、故殿の御はての世までさふらひて、子どもの顔をも、終にはかくしく見侍らで、みまかり過ぎ侍りにき。我等のみ、殿をもえ知り奉らず、かく佗しくうれはしき事」いともくかしく、數多の世の御榮おはしましてなんと申すもの侍りしかば、泣く泣く思ひ給へ悦びてなむ、斯くさふらひつる」と申す。かのさかのといふ女、いと哀に、

〔語釋〕

(一)俊隆女

(二)病氣がもう直るか直るか

(三)俊隆女が

(五)尋ねて来たる汝等を

(六)我々に對して窮屈に思ふな

〔考異〕

(四)人には一人にも

(七)物ナシ

病つきにけるに、子の許に往かまほしけれども、此の殿の、たゞ一所幼き子を
 持給うておはしける、え見捨て奉らで、心地今や歎む、と思ひ居りける程に、
 京にてはかなくなりけり。申しけることども、今日聞き給ふにつけても、思ひ
 出でられ、胸ふたがり、悲しくおほえ給ふまよに、つくぐと涙のみこほれ給ふ。
 大將にも、昔聞え知らせ給へりければ、然なりと思すに、いと嬉しとおほす。し
 ばしためらひ給ひて、俊隆女盡きせず哀なる、昔の人のことを物し給へば、いと悲し
 くなむ。何かは、昔の人のこと、覺束ならずものし給へばなむ。委しき事は人
 にはな宣ひそ。たゞ、かの人の代とは、とかく尋ねものしたる人をこそ、同じ事
 に思はめ。此處をも、など物心苦しうあつかひ立て給ふ。吾が大將にぞおはすめ
 る。うれへ歎きたる事ども、いとあやしき事なり。忽に、かの攝津守のもとに
 も言ひやらせ給ひてむ。とく物し給はで、今まで然りけること。かの人々、何處
 にとも、はかぐしう聞き置かずなりにしかばなむ、今に心には思ひながら、え尋

〔語釋〕

(一)と「衍文歟

(二)ものしたれにて此
儘我方に仕へよの意歟

(三)これはさかの娘ど
もなるべし。此處脱文あ
らんか

(五)その妻は「歟

〔考異〕
(四)いと「ナシ

ねざりつる。いとこそ嬉しけれと、かくてもものしたる」と宣はす。年若く、いと
 たちある下仕にてぞ仕うまつりける。今も田舎びず、由々しく、かはらかなる顔
 つきして、髪、細脛ばかりにて、時宗かのあらぬ若き人々具し給へるが、みなみ
 な率て参り侍りつる」仲思いとよきことなり。さやうの人々の、いとよう仕うま
 つりつべき君だちものし給ふ」と宣ひ、かの童へ召せば、時宗「然さふらふ」と申
 せば、仲思なほよし。此處にまうで來」とて召し出でて御覽するに、いとをかし
 けにて、白くらくくじき顔したり。仲思いと思ふやうなる者どもかな。遊は
 すや」と宣へば、時宗二人は、笛をなむ吹かまほしう侍る。いま二人は、舞を
 ぞ好み侍る。さやうの事もし侍りぬべしとて、かくいと生憎に、いみじき目をも、
 さまぐくに見侍りつるなり」仲思いとをかしき事かな。みな一所に置きて、さま
 ざま好むらむ舞もせさせむ」と宣ふ。時宗かの近江椽に侍りし時持が妻は、朱
 雀院の御時、采女をなむし侍りし。そが妻は、上人と官なり侍りて、かうぶり賜

〔誤釋〕

(一)「ども」は「と」歟

(三)申立てたらば

(四)他の方法にて目をかけてやるべし

〔異考〕

(二)御代にも出て立ち申さば―御代には出て立ちて申さば

(五)さるべき―さべき

(六)物などまづ―まづ物など

はずべかりしほど、あさましく、後の人に横様に越えられ侍りて、賜はらずなりにしこと」ども申せは、仲忠「いと易きことなり。今の御代にも、出で立ち申さばものしつべきを、今はあぢきなし、ことざまにて、いとよく願みむ。子ども、京にあらば、家をも願みさせむ。誰もく、時々はかよひて住めかし。このわたりにも、さるべき所ものせさせむ」と宣へば、時宗「限なく畏きこと」と申す。仲忠「苦しからむ。物などまづ食へ」と宣ひて賜はす。仲忠「守のもとには、家もとよりよく造りて取らせ、うちのもの、數によりて取らすべき由言ひにやらむ。又かの國に、院方より領する所あり。今よりは、時宗に預け知らせむ」と宣ふ。かの殿、かいねりの綾のひとへがさね、織物のうちき、はかま、一くだり賜はす。又きぬ十四、俊隆女「これは、かの國にあらむ人々にもものせよ。必ずく京に上れ。さてのみなむ、思ふやうにあるべき」となむ宣はす。限なく、返すく悦び聞えさす。

畫詞

こよは寢殿。時宗童へ四人。御前にあり、大將殿。もの宣ひなどす。こよは犬宮の樓よりおり給ふ。

〔語釋〕
(二)汝は暫時京に留れ
(五)なりけりと殿の内なるべし

〔考異〕

(一)あり給ふ―あり給ふべき有様次の巻に見えたり

(三)知らぬ―知らず

(四)かよる―かぐる

(六)急ぎ―ひと

大將殿より、紅のうちき一襲、織物の御さしぬき。仲忠「これは、かよるありきに入るべきものなめり」と宣はす。きぬ廿匹。仲忠「これは、國にあらむ人に物せよ」とて。仲忠「馬につきたらむ者に」とて調布三十賜はす。守のもとに、やがて殿の下家司そへて、くだし遣はす。仲忠「人をやりて、暫もあれ」と宣はすれど、時宗「か限なきことを、とくまかりて、聞かせ侍らむ」と申す。時宗「年頃、田舎に、むづかしき目どもを見、又かくいみじう言ひ懲せられて、泣き歎きて佗しかりつるに、覺えぬ物どもを賜はりたるよりも、まだ知らぬ、清らに光り給ふやうなる殿の御容貌を、けぢかく、今は吾が物と見奉らむとするは、いみじき吾が幸かな。禍は、忽にかふるものなりけり」殿の内めでたきを見るに、物覺えぬまで嬉しくて、急ぎまかでぬ。童はさるべき人におほせ給ひて、仲忠「よく勞はりも

〔語釋〕
(二) 仲忠が

(四) 俊隆女の心

(五) 京極より本邸に

〔考異〕
(一) 顔の「の」ナシ
(三) 朔日にもなりぬ一つ
ごもり
(六) 給ふー給ひつ

のせよ」とて、やがて殿にとどめさせ給ふ。顔の清けに愛敬づき、らうくじきこと、殿上童とも言ひつべし。夜うさり召し出でて、笛賜はせて吹かせ給へる。田舎びす、いとなく吹く。四人ながら皆様々にいとよく吹きたり。いと嬉しきものかなと思す。舞せさせ給ふ。ましてこれは、明け暮れ心に入れたりければ、になし。人々、「いとをかしくさふらひける者かな」と興じ申す。
八月朔日にもなりぬ。九月上の十日の程に歸り給ふべきに、樂人召して、西東にて遊せさせむ、と思して、今よりかづけ物の事などせさせ給ふに、この童へのかたち整ひて、いと思ふやうに舞するを得給へるにつけても、見給ひける夢悲しうおほす。今四人の人々にあててせさせむと思す。いかめしき御莊どもに、きぬども召し集め、あや、織物、羅など殿中のしつらひ儀式忍びていとかめしう、然べき人々に仰せ給ふ。左の大殿の所々にも聞かせ奉り給はず。童へは今四人加へて、とのべさせ給ひて、夜晝しらべ整へさせ給ふ。八月十五日と、この御急ぎ

〔語釋〕
(一) 仲忠が

(五) 侍るには「は」侍る上りは一歟

〔考異〕
(二) けりーナシ

(三) 聞き給へしー聞き侍りし

(四) おがり侍らましかばーおがらましかば

おほす。宮わたり給ふべし。内侍のかみ、犬宮の御方々の人々あはせて四十人、わらは下仕、例の扇、裳、唐衣、心ことにせさせ給ふ。犬宮、いよくひきかへたる様に大人しくおはす。琴は、たどかんの殿と同じさまに、これは今少し音は優りさまに弾き給ふに、今は限なく、この世に思ふ事なくなりぬとおほす。程は八月十日ばかりなりけり。
かくて源中納言、嵯峨院にまわり給ひて、遠みだり脚病いたはり侍るとて、石山などにまうで侍るとてなむ」と御物語申し給ひて、遠云々して、いみじう世になき物の音を聞き給へし。珍らかなるまで、哀にかなしく侍りし。はじめよりは、いま少し心すこく、まだ聞き給はぬ音どもの侍りしは、なほ秘したることや數多侍らむ。いかでこれ聞召させ侍らむ。今すこし高く響きあがり侍らましかば、いとみじうなむ侍るべかりし。官位のごよなく侍るには、かく世の中の上下にすぐれたる、物の上ず物し侍るなむ、めでたき事に侍る。公の御前などにて、打解けて

(語釋)
(三)季英

(考異)
(一)誦しそらし

(二)誦し侍りしザンヒ
て侍りし

(四)などーなんど

(五)少しよくせさせよと
仰せたるをーナシ

(六)かみのいとーかみの
こといと

誦したる折侍らぬを、おほかたの聲、書讀じ侍りしよりも、聲の出づるかぎり、昔の詩ども誦し侍りしなどは、すべて涙留められずこそ侍りしか」院、嵯峨「いとおもしろく、哀なる事かな。いかでこれを、思ふ様に聞くべからむ」中納言、遠犬宮に、手の限、この二年をしへ調へて、此の十五日になむ、樂人ども集めて、左右と樂して樓よりおろすべく侍る。かの日興あることども侍りなむ」院の上、嵯峨「かの日こそ彼處に俄に御幸せめ。如何に」と宣はすれば、遠「ある者の申すは、一院の、かの日ぞ、彼處におはしますべしなど申すなりし。さやうに侍らば、さる御心せしめ給ひてこそよく侍らめ」嵯峨「如何は。九月九日、右大辨に、さりぬべく文作らせて見むとてなむ 女の装など、少し物せさせよと、仰せたるを、二十くだりばかりは、少しよくせさせよと仰せたるを、まづ然ばかの家の琴聞かむ。内侍のかみの、いと聞かまほし。右大將いみじき人なり。天下におもしろく哀に有り難きことどもの留りたる家よ」など宣はせて、中納言まかで給ひぬ。

(語釋)

(一)以下仲忠の心

(二)斯様々々と朱雀院へ
申上げたらば

(三)「きこえ申して」は「聞
えありて」歎一本、きこえ
給ひて」

(五)誤あらんか

(六)「うるはし」は「うるは
しく」歎

(八)「家は」我歎、自分の
分として紫檀の宿床をつ
くらせての意なるべし

(九)「たり」は行歎

(考異)

(四)よりこなたーよりは
こなた

(七)ながらーナシ

朱雀院は、大將に、必すかの日行かむ、ことごとくしからず、中々知らぬやうにて物せられよ、騒がしきやうなり、右の大殿の、迎にもぞとてあると思ふなり、と仰せられけるに、又嵯峨院返すく、忝く仰せられしを、然など啓し申さんに、人たど便なく言ひなしてむ、おのづからきこえ申して、然らば然りと思はむ、おはしまさむ様の用意せむとて、治部卿集の中にある、唐土よりあなた、天然よりこなた、國々のかみを、その年頃の有様を、かの大將書かせ給へる屏風、例に似ず清らに、うるはし。皆ながら唐綾にかきて、縁の錦裏よりはじめて清らなり。寢殿に二所ながらおはしますべくして、御簾の帽額には、大紋の錦をせさせ給ひ、たかく捲き揚げて、御濱床に蒔繪して、家も紫檀のを造らせ給ひて、黄金の筋やり、螺鈿摺りたり、珠入れたり。大方の所の面白きよりも、御しつらひいとめでたし。

嵯峨院の太后の宮、「七十に餘りぬるに、萬の事聞き見るに、琴の音よきなむ飽か

〔語釋〕
〔一〕大后宮に

ぬ。大將の、何時にかありけむ、早う彈きしを、いとみじく世になく覺えし。ましてかの内侍のかみの彈きたらむ、いかで聽かでは、あるべきにもあらず。御供にて聞かむ」と聞え給へば、（二）如何なるべき事にかはあらむ」とは宣へど止り給ふべきならず。内裏の女御にておはする、此の大后の宮御腹の若宮も、承香殿「いとよき事なり。こよにも聞き侍らむ。必ずおはしませ」と聞え給ふ。女一宮は、女御、男君たちのかぎり七所、二の宮とおはすべし。源中納言、かの七月七日のことをさへ、睦しき御中らひに聞え物し給へば、我もく、とまり給へるはなく、おはすべし。御供の人までは、居べき所なし。寢殿の西の廂に大后の宮、北の廂には大殿、大宮、その御腹の女御の君、今の女御はなち奉りて八所、大殿の腹の女君たち五所、母上わたり給ふべき方なり。かく御方々、我もくと宣へば、「大將くるしう宣はむものぞ」と制し聞えさせ給へば、「あぢきなき事なり。然るべく御暇得給ひて、聞き給はざらむにより、世に聞きがたきことを聞き侍らざ

〔考異〕
〔一〕給へるはなく―給ふべきなく

〔三〕大將―大殿

〔語釋〕
〔一〕あて宮は聞きに行くとも其方に行くなといふ意歟

らむこそ」とて一人とどまり給ふべきならず。東の廂には、宮、内侍のかみ、院の女御の御局とおほす。左の大殿の大殿腹の男君たち四人、宮ばら七人の男君たち、「いとむづかしう責めらるゝを、然りぬべからむ物の間に」と切に覺しつゝ、せめ聞え給へど、あるまよに、逃れ聞えざるべき方なきまよに、仲思「明きたる方なきを如何せむ」と聞え給ふ。かよる事を藤壺聞き給ひて、左のおとどに、あて宮「只今、みづから聞ゆべき事なむ」と聞え給へれば、宮に、正類「さればこそ。此の事ならむ。いかに聞えむとすらむ。暇ゆるされ給ふべうはいとよし。定めて、聞召し忍びて車にてとあらば如何せむ。すべていと苦し。大事の聞きにくき事ありぬべかめり。然ばわたりなむ。彼方にはものせらるとも、此方にはなわたり給ひそかし」と聞え給へば、大宮「然もありぬべけれど、久しくをかしき物の音も聞かぬを、さうくしく思ふに、内侍のかみのひき給はむは、いかで、かよる折ならでは聞かむ、と思へばなむ」

(一)自分一人だけ

(二)御許容の御様子はお

(四)今上が

(一)正頼が
(二)などーなど

正頼「こゝに斯く宣はすればこそ」とて歎く。参り給へり。居給ふまよに、あて宮、まろを彼處にまかせて、たゞにあらむと思ひ侍りしを、かう離ちす忍給ひて、むつかしき事をのみ聞き、有り難う聞かまほしきことを、誰もく聞き見給へること。心に思ふことなく、あらまほしき目を見聞かむこそ、思ふやうなるべけれ。十五日、犬宮、内侍のかみ、樂して物し給ひ、院の上もおはして、かの手の限、さまざま弾き給ふべかなるを、後の宮もおはすべかなるに、一人しも、斯く交らふまじく侍るなむ。いとあさましく侍る」とて泣き給ひぬばかり聞え給へば、正頼、いと怪しく。けに有りがたき事を聞かせ給はど、いとよき事にこそ侍らめ。大后の宮も、必ずやおはしますらむ。時にのぞみて、あるまじなど人申さば、如何侍るべからむ。御暇は「あて宮、上は御氣色は侍り。昨夜いみじう聞えしかば、知らずなども宣はず。こればかりは、天下に宣ふとも、行かではえあらじ」と宣ふ折に、わたらせ給へり。おとど、隠に居給ひぬ。あて宮、明日の夜さり、必ず迎へ給へ」と

宣へば、正頼「さればよ」とて出で給ひぬ。

いとまめやかにむつかり申し給ひて、御暇強ひて聞え給へば、今上「はや。いとよかなり」とて、今上出で給ひなば、やがて彼處に物し給へ。萬の人の思はむよりは、大將の朝臣の思はむぞをかしきや「あて宮、みな人も聞き給はぬに、獨りものし侍らばこそ、さも思ふ人も侍らめ。大后の宮よりはじめ奉りて、おはせむには」と申し給へば、今上それはさしもあらじ。けにかの宮おはせば、さあるばかりに、宮ぞ、ものし給はむ。よし聞かむ。さもあらじとて、また内侍のかみの琴きかぬ人は、世にはあらずやあらむ」と宣はすれば、藤壺、大后、必ずおはせむなど人知れずおほす。

新中納言、今は人にもことに見え交り給はぬを、斯くなど聞き給ひて、(四)實忠、夜の御事ならば、忍びて参らまほしくなむ承る。とて、

(四)實忠

(三)早速行き給への意歎

(二)あて宮が今上にねだりて

(一)正頼が

〔考異〕
(一)過ぎにしーそめにし

(二)わが佛え聞えーわが佛のきこえさせぬ

(三)馬檢所ー馬見所ー福
りん所

實思死にかへりおもひ過ぎにし世の中のおかぬことこそ哀なりけれ
もし然るべくば参りなむや。

とあり。見給ひて、よろづの事より如何様にして聞かせ奉らむと思ひ給ひて、

仲思悦びて承りぬ。わが佛え聞えさせぬ程に、いともく珍らしく、嬉し

き事は、いでやけに、

年ふれど誰も忘れぬうき世にはなぐさむことの何かあるべき

まめやかに、世の中の哀に心細くおほえ給へば、しるしばかり、幼き人に、

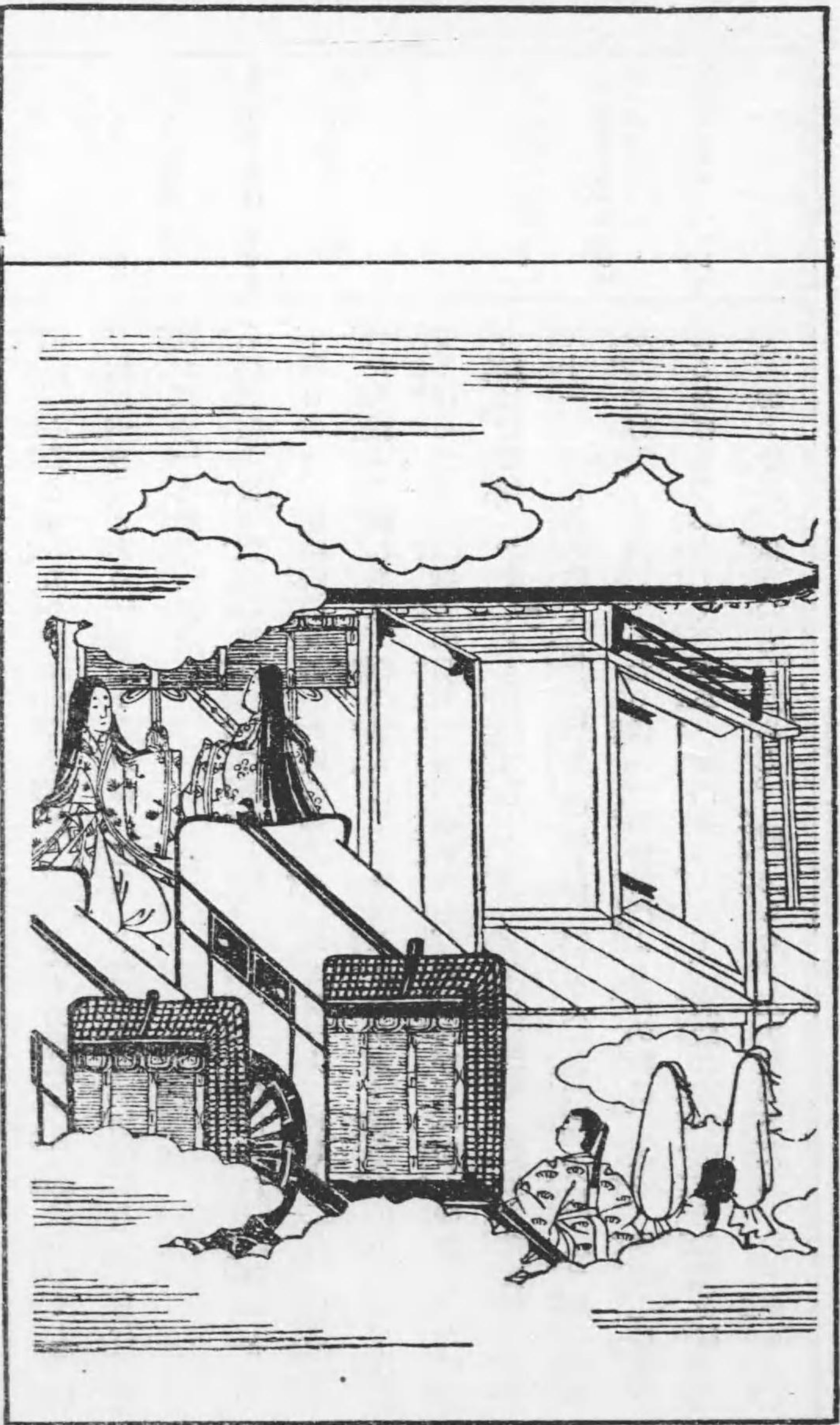
月頃ものし侍りて、忍びたる所侍りがたくも、あながちにてもと思ひ給ふ

るを、と聞えさせれば、馬檢所の法師の心地なむし侍る。

と聞え給ひつ。

世に安からずのよすれば、御方々の北の方たち、御女たち、宮たち、如何様にて

これを聞かむと、おほし給はぬなし。忍びてとおほせど、院二所おはしますべき



〔考異〕
 (一)こくばく―そこばく
 一こくばく
 (二)乞食かたる―賤山が
 つ
 (三)宮―この宮

〔考異〕
 殿前夜より京極に集まる
 人々

(四)なども―などとも
 (五)檳榔毛合せて―びり
 やうげは合せて
 (六)ひたしる―ひたし人

儀式、心こころとなるありさまを言ひ騒さわぎ、「(一)こくばくの限なき宮殿みやどのばらつくして渡り給ふべきことあり」とのよしれば、乞食(二)かたるまで「如何なる事ことならむ。見聞かばや」と思ひ言ふ。(三)

右の大殿の宮、梨壺の御方、一つ所ところにとて、大后の宮、俄にわかにわたり給はむとす。十四日の夜、嵯峨院の女御、大殿の御方々、おとな一人、わらは二人、御供にてわたり給ふ。御たちは、例の儀式にて、その車はおかず。南の方の山のかくれに立て並めたり。二御方の男君たち、姫君たち、御車ながら、「所(四)もゆかし。かの降り給はむ有様、かくなども見給はむ」とて十一人の御同胞、黄金造檳榔毛、合せて十一、ひたしるにて、樓の西東のはし殿にむかへて立つ。大后の宮、絲毛の御車つゞけて、十四してわたり給ふ。西の御門より西の對に、人々、檳榔毛に乗りたるをばまづおろして、御車、中門より入れて、寢殿の坤の方の勾欄をはなちて、おり給ふ。儀式といかめし。曉方なり。左大殿の君たち、いと多く、ひ

〔語釋〕
 (一)「なり」は「なる」歟
 (五)「御しとね」は衍文歟
 (六)誤あるべし
 (考異)
 (一)驚きたまひ―驚きて
 (二)四間に南に―四間を
 俄に南に
 (四)一の宮―二の宮
 (七)おはす―居給ふ

き具して、御前仕うまつり給へり。儀式といかめしうち續きて、三條殿の右大殿の宮、梨壺わたり給ひぬ。西の對なり。かんの殿の人々も、みな坤の御堂の廂、渡殿にうつりて、西の對を嵯峨院、大宮の殿上人、藏人所(一)にしたり。藤壺、わか宮たち、寅の時にまかで給へり。大將、思ひかけ給はぬに、驚きたまひ、俄(二)に東の廂四間に、南によりて二間を、一の宮の御方とおほしたるを、一つにて中をへだてて藤壺のおはし所にし給ひ、次の二間を、庇かけて宮の御方おはす。内裏、東宮の殿上人、いと多く参れり。絲毛のになき御車、檳榔毛十二、たどの二つあり。(四)一の宮、大宮の御方々の人々、かたへは釣殿にうつりぬ。藤壺の女御の、對かけたる渡殿などに、東宮の殿上、一間をわけてしつらひ居たり。南の廂の御階の東は朱雀院の宮たち、御しとね、勾欄の端より西の廂は、嵯峨院、宮たち(五)九所おはす。御裾、隙なくよそひ續けたり。母屋分けて、二つにしつらひて、はしたてり。さるべき大將たち、おとどばかりぞ、内にはおはす。上達部は、勾(六)

(語釋) (二)正頼の六の君

(三)嵯峨太后

(六)梨壺腹の皇子は何の感じもなけれど

(七)梨壺

(考異) (一)居給へる―居ためる

(四)聞かせ―聞き

(五)たとしへなく―さま

(八)おはせねば―おはせ

欄の簀子にぞ居給へる。太政大臣のも、「院の上のおはしませば、参りて聞かむ」と宣ふ。一の院は、嵯峨院おはしませしぬと聞かせ給ひて、後に御對面あるべきにて、おはしませむとし給ふ。東の對は、一院おはしませむ、殿上、藏人所にせられたり。

明けゆくまよに、御方々、南の方の池、中島、釣殿、坤の堂の方、左右の反橋、樓のさまなど見給ふに、限なくおもしろく、めでたしと見給ふ。北の方を見やり給へば、遣水をかしう落し、枝ざしをかしう、珍らかなる木ども、小松ども、遣水のこなたかなたに多かり。對などは、こなたには見えず。はるくと庭のたとしへなく廣く面白きに、苔生ひ、紅葉の木ども見ゆ。藤壺見給ふに、大殿は、いかめしう上藤しう造りたることこそあれ、見所え斯うはあべきならず。かなたこなたを見遣り給ふに、いとみじく面白く見給ふ。二の宮は何事をも思ほさねど、女御の君は、東宮おはせねば后にもなり給はぬを、心よからず思しよに、大將の

(語釋) (三)嵯峨院が

嵯峨院朱雀院御幸。

(四)船屋敷

(考異) (一)言へる―言ひし

(二)きろくしくして―ちろくしくしくナン

(五)あちかしそやかの―あちじはよかの

有様かたち、帝と申すともきしろひ難くおほしたるを、少したけくおほすに、今日の有様、此處のつくり様、人々のいみじう言へる、けにと思ひ聞え給ふ。

未の時ばかりに、嵯峨院おはしましたり。右大將参り給ひて、御階に御車よせて、右の大殿、大納言三人、中納言宰相五所、源中納言、宮たち、いといかめしう清らに、大人々々しくきらくしくして、ひき連れておはします。七十二におはしませど、いと清らに、若く、只今ぞ五十ばかりと見え給へる。御髪白からず、御腰すこしうつぶし給へり。いとよく笑ませ給ひて、嵯峨院におもしろき所と、昔見しを、ゆかしきになむ物しつる。かの池のふなやは、此度は、長そ高くなり

にけり。いと哀に、たど同じやうなりや。我が見し同じ程を見し人あちかし。そや、かの宮内の兼射の朝臣有りける。覺ゆや」と宣はすれば、兼射然侍り。山の木ぞ高くなり侍りける」と申す。一院より、右馬頭なる人御使にて、朱雀右大將の朝臣の家に、わたりおはしましたり、と承るは、まことにや侍ら

〔語釋〕
〔一〕「びく」は「びん」なるべし

む。内侍のかみの幼き人に琴教へて、今日もとの所へ歸り侍るを、かよる序ならでは、聴きがたく侍るを、まことに御幸侍らば、参りてと思ふ給ふるを、例あらぬことならば、びくなくや侍らむ。
(二)

〔異考〕
〔一〕知らねば「知らずなむ」

とある御返事、
巖 承りぬ。こよにも、まだ聴き知らねば、ゆかしき人も侍り。兒のならひ給ふらむ聴かまほしくて、物し給へるに従ひてなむ、まうで來つるを、對面もおほつかなきを、必ず御幸あるべし。例はありとおほえ侍る。

〔三〕給ひつー給へば

と聞え給ひつ。大將御むかへに参り給ふ。左の大殿、右の大殿、それより外は、ある限御供に仕うまつる。すなはちおはしましたり。太政大臣のおとど、次に参り給ふ。院の御子たち、この御腹の御子七所、清らに美しけにて、五所は御かうぶりし給へり。二所はまだ童にて、うち續きて居給ひぬ。一院は、清らにうるはしく、そびやかにおはします。御覽じまはして、朱雀人々みな残なく物するに、内

〔四〕居給ひぬ一院は「居給ひぬ巖院は御物語御堂の御床の上にてし給ふ一院は

〔語釋〕
〔一〕誤あるべし

〔二〕誤あるべし

〔三〕誤あるべし

〔四〕誤あるべし

〔五〕誤あるべし

〔六〕誤あるべし

〔七〕誤あるべし

〔八〕誤あるべし

〔九〕誤あるべし

〔十〕誤あるべし

〔十一〕誤あるべし

〔十二〕誤あるべし

〔十三〕誤あるべし

〔十四〕誤あるべし

〔十五〕誤あるべし

〔十六〕誤あるべし

〔十七〕誤あるべし

〔十八〕誤あるべし

〔十九〕誤あるべし

〔二十〕誤あるべし

〔二十一〕誤あるべし

〔二十二〕誤あるべし

〔二十三〕誤あるべし

〔二十四〕誤あるべし

〔二十五〕誤あるべし

〔二十六〕誤あるべし

〔二十七〕誤あるべし

〔二十八〕誤あるべし

〔二十九〕誤あるべし

〔三十〕誤あるべし

〔三十一〕誤あるべし

〔三十二〕誤あるべし

〔三十三〕誤あるべし

〔三十四〕誤あるべし

〔三十五〕誤あるべし

〔三十六〕誤あるべし

〔三十七〕誤あるべし

〔三十八〕誤あるべし

〔三十九〕誤あるべし

〔四十〕誤あるべし

〔四十一〕誤あるべし

〔四十二〕誤あるべし

〔四十三〕誤あるべし

〔四十四〕誤あるべし

〔四十五〕誤あるべし

〔四十六〕誤あるべし

〔四十七〕誤あるべし

〔四十八〕誤あるべし

〔四十九〕誤あるべし

〔五十〕誤あるべし

〔五十一〕誤あるべし

〔五十二〕誤あるべし

〔五十三〕誤あるべし

〔五十四〕誤あるべし

〔五十五〕誤あるべし

〔五十六〕誤あるべし

〔五十七〕誤あるべし

〔五十八〕誤あるべし

〔五十九〕誤あるべし

〔六十〕誤あるべし

〔六十一〕誤あるべし

〔六十二〕誤あるべし

〔六十三〕誤あるべし

〔六十四〕誤あるべし

〔六十五〕誤あるべし

〔六十六〕誤あるべし

〔六十七〕誤あるべし

〔六十八〕誤あるべし

〔六十九〕誤あるべし

〔七十〕誤あるべし

〔七十一〕誤あるべし

〔七十二〕誤あるべし

〔七十三〕誤あるべし

〔七十四〕誤あるべし

〔七十五〕誤あるべし

〔七十六〕誤あるべし

〔七十七〕誤あるべし

〔七十八〕誤あるべし

〔七十九〕誤あるべし

〔八十〕誤あるべし

〔八十一〕誤あるべし

〔八十二〕誤あるべし

〔八十三〕誤あるべし

〔八十四〕誤あるべし

〔八十五〕誤あるべし

〔八十六〕誤あるべし

〔八十七〕誤あるべし

〔八十八〕誤あるべし

〔八十九〕誤あるべし

〔九十〕誤あるべし

〔九十一〕誤あるべし

〔九十二〕誤あるべし

〔九十三〕誤あるべし

〔九十四〕誤あるべし

〔九十五〕誤あるべし

〔九十六〕誤あるべし

〔九十七〕誤あるべし

〔九十八〕誤あるべし

〔九十九〕誤あるべし

〔一百〕誤あるべし

裏には、誰かさふらはるらむ「左のおとど、正頼大藏卿源朝臣、藏人少將信方、さては六位の男どもなむさふらふ」と啓し給ふ。車、東面をきはにて、西は三四町まで立てたり。次々の下人ども、路なく見ゆ。午かぎりて、酉のはじめに樓よりおり給ふべし。樂人も皆平張にあつまりぬ。一院御覽じて、右大將、左のおとどに、朱雀時やうくなりぬめるは、いづら、遅し」と度々仰せらるれば左のおとど、頭中將、右近藏人少將、こなたかなたにまかりて、「はやとぞ仰せよ」と宣ふ。立ちて事の行事す。西の方の錦のひらばりより大鼓をうちて、靜にやうく樂し出づ。八人の童、四人は孔雀の装束す。四人は胡蝶。左右に立ち出でて、いとをかしう舞ふに、吹物、彈物あてて賜はず。宮たち、「手おそし」と宣ひて、吹き、彈き合せ給へり。院、大將を召して、朱雀かの人々もはや物せられよ」とて、車よせて、かの西東の反橋に寄せさせて、一院の上は氣色おはする御心にて、多くの大臣たち、大宮方々に見せざるに、藤

(語釋)
(三)大宮の輩を倭陸女に用ひさせよ

(四)大宮の事は我世話すべし

(五)誤りあらんか、一本「御かた」を「御くだ物」とかけり

(考異)
(一)心もなげに「心もとなげに

(二)ながら「給ひて

壺をうしろめたく思ふと、心もなげに、一つにては皆狭けなりと御覽じて、かの東の放出の母屋、二間を、屏風立てて、「大宮、内侍のかみは、こよにもものせらるべきなり」と宣はすれば、喜びながら屏風立てしつらひ給ひつ。人々心ことに見給ふ。左のおとど、正頼「遅し。はやく」と仰せらる。嵯峨院、「忝けれど、大宮の御輦、内侍のかみ。一院のは大宮」と仰せらるれば、承りて、右のおとど、いと花やかに行ふ。左のおとど、正頼「内侍のかみの御車寄せさせ給はむや。正頼、大宮に物すべし。右大將の朝臣、思ふとも、身を二つにはえ分けじ」と宣ふ。右大將、仲思「こなたかなたに早々」と宣はすれば、蘇枋の裾濃の裳出だして、畫かき、縫物したる几帳ども、三十人のおとな取り續きて、童四人、繚のうへのはかま著たり。又大宮の御方の人に、紫の裾濃に縫物して、唐組を紐にしたり。三十人、童の長これは少し劣りなる、ながくとある反橋の上に、さし續きたる、いとをかし。まづおとど御かた参りて、しもに、右のおとどに譲り聞え給ひて、犬

(考異)
(一)脇息とりて「脇息をとりて

(二)こくばく「こくばく

宮おろし奉り給ふ。右大將抱き奉り給ひて、几帳のさきに、童、こなたにも、襦、火取、薰物に、銀、黄金の壺二つするもの、脇息とりて歩みたり。長とよのひ、髪長に一尺餘りたるが、容貌うつくしけなり。隙なくつゞきたる几帳、色のうちき、裳の裾どものはづれたる、いとなまめかし。近き車どもよりも遙に見ゆるいとめでたし。左のおとど、几帳に添ひて、はつかに大宮の御様體を見給ふに、いみじく美しけにめでたう見給ふこと、あて宮の兒におはせしにこよなう優り給ひて、あてになまめかしう、見驚くばかりいみじきものかな、こよばくの君だち、一二の宮ばかりこそは、品まさりては見給ひしかど、まだ小き程に、いと斯うは見給はざりき、これは、ゆよしく變化の物と見え給ふ。樂の聲、御前の御子たちよりはじめて、彈物吹物、聲しづかに等しくて、おもしろきこと限なし。嵯峨院、御扇して、拍子うたせ給ふ。一の院、時々唱歌し給ふ。かよる事又あらじと見え聞えたり。

〔語釋〕
(二)桔梗色し歎

〔考異〕
(一)させーナン

(二)給ふー給ひ

(四)すきかけ玉虫のーす
きかけ犬宮玉虫の

御車寄す。四位、五位殿上人、階よりおりて、牛かけて寄せたり。一院、朱雀かの車、巽の隅の勾欄はなちて寄せさせよ」と頭中將に宣はすれば、左右大臣さきに立ちて歩み給へり。右大將、犬宮の御車ひき給へり。右大將、右のおとど、几帳さしておろし奉らむとするに、「例の儀式あるを」とて御氣色賜はり給ひて、まづかんのおとど下り給ふ。次に犬宮の御車寄す。左のおとど手かけ給へば、次々の人おりて寄せたり。几帳、夕日の隙影より、内侍のかみ、紅の黒むまで濃き唐綾のうちあはせ一かさね、三重のはかま、龍膽の織物のうちき、唐のこま、羅かさねたり。地摺の裳、村濃の腰さして、唐の織物の、あか色の二藍かさねて、唐衣著給へり。犬宮、唐撫子のからあやのうちき一襲、きかう色の織物のほそなが、三重かさねの御はかま。内侍のかみ、るざりよりて、下し奉り給ひて、御衣ひき繕ひなどし給ひて、るざり入り給ふすきかけ、玉虫の巢よりすきたる様に、あなめでたと見えたり。小き扇さしかくし給ひて、るざり入り給ふを、一院

〔語釋〕
(三)正頼の心

(四)さかのの孫ども也

〔考異〕

(一)かみのーのーナン

(二)装のーのーナン

さかのの四人の孫人々に愛でらる。

几帳のほころびより御覽じて、いと美しとおほす。内侍のかみの様態、細やかになまめかしう、あな清らの人やと見えたり。たゞ今二十餘ばかりに見えて、裳の裾にたまりたる髪つやくとして、すそ細からず、又こちたからぬ程にて、引き添へられてるざり入り給ふを、左のおとど、几帳さし給ふまよに見給ひて、いとみじかりける人かな、年の程大將の妹といはむにぞよき、仁壽殿の女御には、様體けはひも勝り給へり、昔の心ならましかば、かよるを見過さましや、と妬うおほえ給ひ、辛くおほしたり。

この四人の童、一人はかたち、色いと白く美しけにて、舞も勝れてかしこくするを、御前よりはじめて、「彼はいとをかしき童かな」と興じ給ふ。院、朱雀いと小くて、かしこく舞ふものかな。彼、こよに召し寄せて、樂も靜に仕うまつらせよ」と宣ふに、左のおとど、正頼四人はこの家に侍る童なり」と啓し給へば、朱雀いとをかしく整ひて、いかで斯くあるらむ」と宣ふ。御子たち、御方々、これに目

〔語釋〕
(一)田舎形氣にて恥かしがりて逃げたるならん

(三)せめて二人だけも此弟宮たちに奉りたしと

〔考異〕
(二)いとをかしうーいとをかしう

をつけて、見興じ給ふ。御階のもと近くて、「更に、さばかりの程にて、かく舞ふなし」とめで給ひて左右大臣、袖脱ぎて賜へば、御子たち、殿上人、同じく脱ぎかけ給ふに、舞ひさして逃けてゆけば、「かれ留のよ」と召すに、恥ぢて参らねば、人々興じ給ひて大將に、「誰が子ぞ」と問ひ給へば、仲思しかくの者どもの、兄弟の子どもにて侍り。鄙びて、斯くまかでつるなめり」と啓し給ふ。宮たち、上達部、「宜なりけり。時持は、いと清けに侍りしものなればにこそありけれ。聲いとかしこく出で侍りしものなり」と申し給ひて、召せば、参りたり。仲思「笛なむよく吹く」と申し給へば、「いとをかしき事かな」とて賜ふ。四人ながらいとをかしう、吹かぬ笛なく吹きたてて、まだ小きも、顔かたち敬をかしけにて、かよる才をいと美しくすれば、院の宮たち、我もくと、得むと宣へば、左のおとど東宮の御弟の宮たちも、かよる事するを、然しもあらぬをだにもてなし給ふ、二人をだに、と思ひ給へど、同じやうなる宮たちの、乞ひ領じ給へば、えともかうも宣

〔語釋〕
(一)宮は東宮

(三)あて宮が

(五)二宮歟

〔考異〕
(二)をかしうーをかしう

(四)五の宮「の宮」ナン

●朱雀院、嵯峨院等の秘曲を盡さんことを俊隆女に迫る。俊隆女の煩悶。

はぬを藤壺、中にも勝りたる二人を、いかで宮、二の宮に奉らむ、容貌はまさるもまた有りなむ、小くてさまぐをかし、宮たちもてなし給ふに、嵯峨院さへ、「二人は院にさふらはせむ」と宣ふを羨ましくおほして、二の宮の、御簾のものと近くおはするに、あて宮「かの笙の笛吹くは東宮に奉らむ。横笛吹くは我得む」と大將に宣へ」と聞え給へば、大將の居給へるに、はた斯くと宣へば、仲思「いとよく侍るなり」と聞え給ふ。一院の五の宮六の宮、「我も得むとするなり。いかでか」と宣へば七の宮、「然ば、こよに得むとしつるものをば不益なり」と宣、「然ば、見てやあらむするや」と宣へば、仲思「かの今四人さふらふも、いとよく侍り。それらをも」と申し給へば、「いな、それは舞もえせず、悪ければ、辛きなり」と宣ひて、かたみに幼くおはするどちぞ宣ふ。院の宮たち、あるは「上に申さむ」など宣ふ。院の上、いづれともなく美しと見奉り給ふ。かくて日暮るゝ程に、一院御床より下りさせ給ひて、内侍のかみの几帳のもとに

(語釋)
(二) 處せかるまじくとてし歎

(四) 「御」は衍なるべし

(七) 給かくしは「給へかし」歎

(八) 「忘れねど」歎

(九) 涼

(考異)

(一) 昔時々ー昔も時々

(三) こよなくーはかなく

(五) ようーかう

(六) はかしくしうもー「も」ナシ

おはして、朱雀あさましく、覺束なくもてなして、年頃も、自らこそとてなむ。
今日は、昔時々聞かまほしきことも飽かずなりしかば、ところせかましくとて車
など物せしかど、効なくて止みにき。今は心安きさまにてだに、如何にと人知れ
ぬ志もありき。こよなく思ひおとされたるばかり、世にくち惜しう妬きことは
なくなむ。よしや思ふ心のうちこそ及ばざらめ、易かるべき物の音だに。身の爲
は、かくもてなさるよこそつらけれ」と宣はすれば、内侍のかみ、俊隆女「いと畏
き仰せごとを、明け暮れおろかならず思ひ給へながら、年頃は、宮、わか君たち
の御事を、とかく見給へし程にこそ、時々もえ参り侍らで。御琴は、いとよう聞
かせ給ふべかりけるは、ほれくしうなりに侍れば、はかしくしうも侍らじ。
如何に侍らむ」と聞え給へば、朱雀「いとかしこくも宣へるかな」とて、朱雀「かや
うになむ教へつる」とて引き寄せてきかせ給かくし。かのほそをの曲の物「今三
つ四つは」とありしも、更になむ忘れぬと、中納言の朝臣、「七月七日の夜、また聞

(語釋)
(一) 「のたまふへし」は「も
のし給ひし」歎

(考異)
(二) なにとかーなにかは

(三) 心ばへいかにー心ば
へいまにー心ばへいま
に

えぬ物の音なむありし」とものせしかば、すべて、りうかくの調にはじめて、か
の七日の夜のこと、今宵きかせ給へ。いつか、又かよる夜の事あらむ。嵯峨の上、
年頃ゆかしうせさせ給へる。残少き御世になり給ひたる、斯くておはしました
るいと畏きことに、人知れぬ思ひ過しも心とどめておほされば、たゞ、今日やそ
のしるし見ゆべき。何事も思されぬにつけても、有りがたう聞えしことども、の
たまふへしことども、今日の夜の御心ばへにこそ、愈限なく覺ゆべけれ。大將
の朝臣の悦なども、言ひてまし。なほさままに心に憂くこそ思ほゆれ。此の聞
ゆることどもは、然思はましや。如何に」と宣へば、俊隆女「けに理」と聞えさすべ
き、疎ならぬことをこそ、なにとか啓し侍らましか、とより外にと思ひ給へしなむ。
まことに、琴はあまた侍りともおほえ侍らぬを、りうかく、ほそをばかりこそ。そ
れは大將をりくくに仕うまつりしを聞召され侍らむものを」と聞え給ふ。右のお
とど心、安からず見奉り給ふ。朱雀「左のおとどの心ばへいかに、なほたどならじ

(語釋)
(一)未詳

(五)俊隆

(七)雷鳴盡

(考異)
(二)みづしにーみつゝに

(三)責めさせーめさせ

(四)入れてー「入れ」ナシ

(六)啓しーきこえ

(八)彈き給はずなむーひかずなむーひき給はなむ

はやと思ふに、右大將、心もとなくこそ覺ゆれ。かのりうかく、ほそを、又かの治部卿の朝臣の集の中に、今かみに書き消たれたりし、さいこくに思ひくすべしとありしみづしに」と度々責めさせ給ふに、いみじく清らなる、高麗の錦の袋に(二)入れてあり。とり渡すに、匂ひたるが、えならず、奉り給ふ。朱雀「今一つあり」と仰せらるれば、ともかくもえ啓せず。(三)

内侍のかみ、如何にすべきにか、と思ひ煩ひ給ふほどに、嵯峨院、近くおはしまし(四)て、嵯峨大將の朝臣にもせし事ども、傳へ聞き給ひけむや。昔の人の、勘事、罪にあたるを、今は残なくなりたる身なるを、此の身にゆるし給はど、嬉しくなむ」など宣ふさま、らうくじく愛敬づかせ給へり。俊隆女「いと畏きこと」と啓し給へば、嵯峨さらば、かのりうかくよりしてなん風、はし風などいふなむ。かんなりにて、大將中納言のひきし琴の聲なむあまたある心地せしを、空の雲の驪(五)がしくらうがはしき事ありとて、彈きさして、残その世に彈き給はずなむ。いと聞か(六)

(語釋)
(二)とくー解く 疾く

(三)いかでかはと怪しくなるべし

(五)俊隆女の心

(考異)
(一)編きたるー聞えたる

(四)申しーきこえ

まほしき。又はし風などは、仄(一)に聞きて、ことのさまに聴きたる人なし。もしそれによあらむ、と思ひあてに傳へ聞く様なむありし。それ、今宵聴かせ給はど、此の世にも、世々にも盡きず嬉しくなむ。これをきかせ給はで、後の永き世に、人にきかせ給はど、世中に恨となむすべき。(二)

いまは身のかぎりと思ふするの世にもとの恨をとくもきかなむ(三)

内侍のかみ、源中納言聞き給ひて、かく啓し給はむことのいかでかは、怪しく思ひ給ふ。御返し、(三)

俊隆女「二葉にておもほえぬかな結び松うちとけてこそ人はひくらめ、なむ風は、數多しらべありとも思ほえ侍らぬ」となむ申し給ふ。朱雀院は、氣近くなつかしくて、萬の理なることを宣はせ、嵯峨院は、御年高く、かたじけなくおはしまして、古(四)をかけて逃れがたく宣ふ。如何すべからむ、と思ひわづらひ給ふ。故治部卿は、ほそを、はしふ、二一つの琴を立てて宣ひしやう、世中今は(五)

(考異)
 (一)幸を極めむ時また世に—幸きはめ次には世に

(二)さそらへむ—さすらへむ

(三)宣ひしかば空洞の獸の—宣ひおきしをおほかみ獸の

(四)給へしに—給へしを

(五)然るべき—さべき

(六)給はぬ大將の御様も—給はず大將の御様を見給ひ

(七)こくばく—こくばく

(八)すべて—ナン

かぎりの幸を極めむ時、また世にいふかひなくなりさそらへむ時にを」と宣ひしかば、空洞の獸の中にして、ほそを風の聲のものの限は弾き給へしに、人々聞きつけて物せられしかば、弾きさしてき、今然るべき年の程にもし給はぬ大將の御様も、内侍のかみになさせ給ひし御心ばへも、限なく、昔の人の宣ひしありさまを思ひ出で給ふに、今日のありさま、位を去り給へど、二所の帝、これを聞かせ給ひにおはしましたり、式部卿の宮はじめて、こよばくの、時にあひ盛とおはします、内裏、東宮の上達部、つどひ給へり、后ときこゆる中に、勝れ給へる太皇太后宮、女王、左の大殿の北の方をはじめて五所、女御は式部卿の宮の御女を加へて三人おはす。たゞ人は、公、私のやんごとなく重きものに思はれたる太政大臣、上達部のかぎり十五人、三位、左右大辨頭、藏人、すべて殿上人おほくあるかぎり残るなし、聞き知り給ふも、さらぬも数々はかりなき中に、さてもほそを風は、少しもなくとも、その曲の物の、果の音を弾かむことはいと易し。はし風

(語釋)
 (一)院の一の宮の御腹の犬宮の御祖母となり大臣の北の方となれども、などあるべき歟、なほち「太」ち

俊隆女りうかく風を弾く、琴聲内裏に聞ゆ、今上、少將信方をして琴の聲を聴ねしむ。

(考異)
 (一)觸れむ—觸れなむ
 (二)りうかく風—風ナ
 (三)音を—音をば
 (四)いろく—いろく
 (五)いろく—いろく

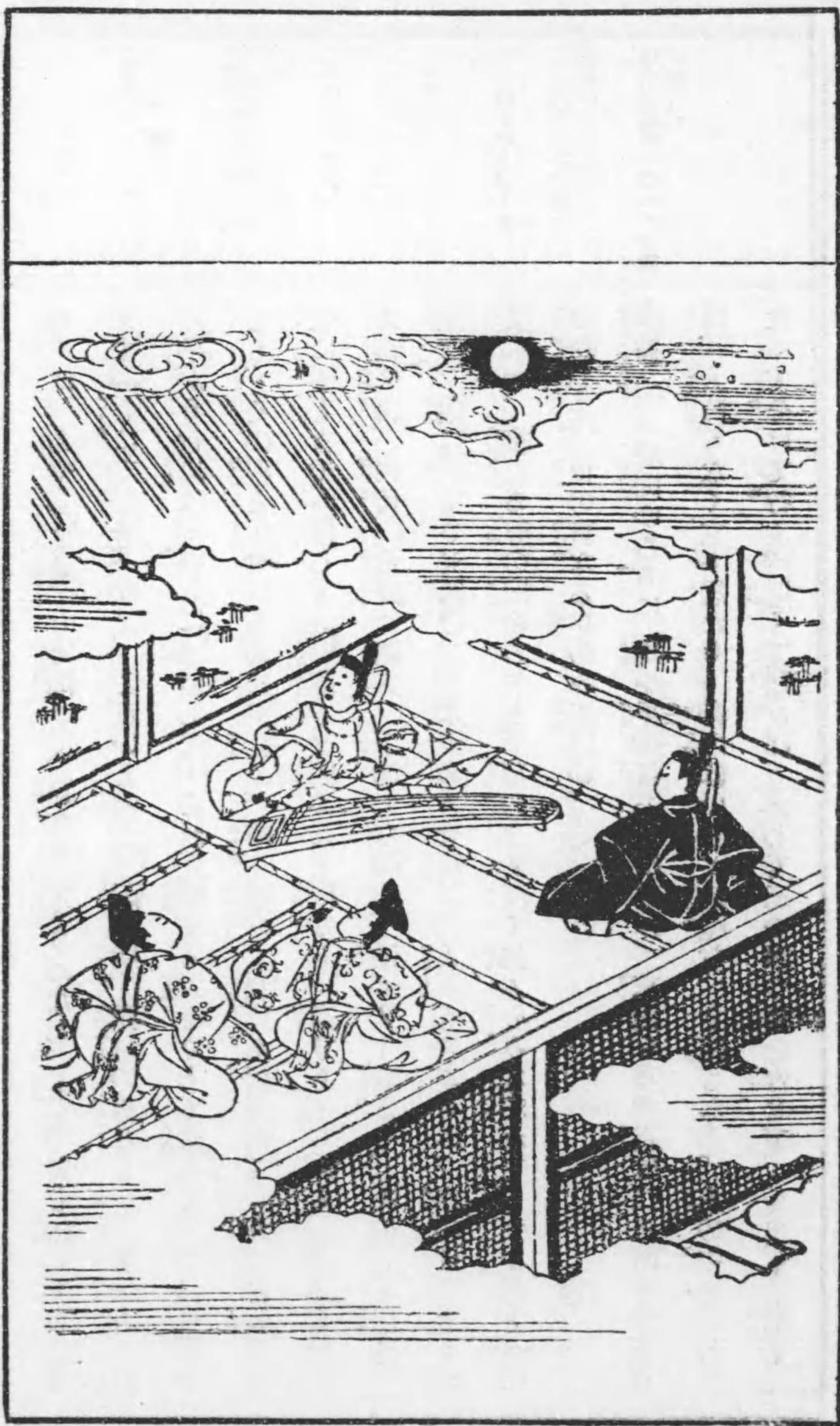
に手觸れむこと、昔のこと思ひ出づるに、心くだけで悲し、七日の夜は柵機に奉るべきには、犬宮に聴き知らせ奉らむと、それもたゞ忍びてかき鳴らしとなり、かく、帝と申せど、世に心ことに思はれ給へる院の一の宮、犬宮の御おぼごとなり、大臣の北の方と思へども、なほ心ゆき極まることとも思ほえず、二所の帝かしこくとも、はし風はしばし、と思ひみだれ給ふ。十五夜の月の、明かに限なく、靜に澄みておもしろし。「心もとなし」とあまた度嘆き宣はすれば、まづ習ひはじめのりうかく風を、秋の調に弾きならし給ふ。音高く、清涼殿にて弾き給ひしには勝れて、世になくおもしろく、明かなり。萬の樂、笛の音をはやし、諸のおもしろき聲を整へたり。二所の上、宮たち、御方方、りうかくの聲をほのかに聞きしもありしかど、「まだ斯うはあらざりき」と驚き給ふ。耳に入り、心にしみて面白き事、かよる事あらむやと勝れて聞ゆ。次にほそをを、曲の調にて一つ弾き給ふに、いろくの霰しばく降り、雲忽に出

(考異)
(一)殿上人一殿上人

(二)給へば巽の給へば
東巽の

で來、星さわぎ、空のけしき恐ろしけにはあらで、珍らかなる雲立ちわたる。廂
に居給へる人々、狭くて、人氣に熱かはしくおほえ給へる、忽に涼しく心地
たのもしく命延び、世中めでたからむ榮をあつめて見聞かむやうなり。同じ調な
がら、はるかに澄みのほりたる聲、心細く哀にて、上は空をひどかし、下は地の
底をゆるがす。四方の山、林に聞きわかれて、悲しう哀なること、世の中は常なき
ことも、忽に思ほえて、涙落つること留めがたく哀なり。帝よりはじめ奉り、そ
こばくの上下、聞き給ふに涙落さぬなし。

此の琴の音聞ゆること、響風に隨ひて、近くは内裏に、夜さりの威儀のおものに
就かせ給はむとする程に、心ほそ悲しう、哀なる物の音、風につけて聞ゆるを、
驚きあやしがらせ給ひて、今上殿上人、此の物の音は聞くや。何處にかあらむ。
いと怪し」と仰せ給ふ。「然侍る。いとあやし」と申す。強ひて聞かせ給へば、巽の
方より聞ゆ。藏人の少將、「面白くとも、京極の大將の家の琴の聲、内裏まで聞え



樓の上(下)

(考異)
(一)空一響

(二)早め一ナシ

(三)聞けば一聞くは

信方奏聲を尋ねて京極に到る。

むやは。あやし」と男女方聞きて、哀がり涙落さぬなし。上もいと悲しくおはします御心にて、今上「なほ、これいと怪し。藏人所、瀧口の男ども、少將信方、寮に早からむ馬はや召しに遣はして、これが聲する方をさして参りて、目に見えずとも、その程と申せ」とおはせ給ふ。帝、限なく哀におほされて、かつは物の變化にやとまでおほして、涙落させ給ふこと限なし。高きもさらぬも、さふらひ給ふ御乳母、内侍、命婦、藏人、下のしなもの、泣くく哀がり、あやしと思ふ。上は、端に出でさせ給ひて、ながめさせ給ふ。人々もさふらふ。空のけしきも例に似ず、哀なる聲の聞ゆること、萬のこと深く思ふ心みな忘れて、たゞひとへに物悲しう、世の哀なる事のみ思ほゆ。

少將樂の聲聞ゆる方に、馬を早め打ちてゆけば、京極なり。道は二三町をかぎり、人際もなく立ち居たり。御門はいと足踏むべき隙もなし。人の中を、わりなくて分けて行く。近くて聞けば、まして三つ四つ聲を合せて、さまざま哀なり。

(考異)
(一)何ぞ一なぞ一なんぞ

(二)奏せよ一申せよ

いふかひなけなる姿したるものも、哀がり面白がり居たり。辛うじて参りて御階の下にて啓せむと思ふに、樂の聲、琴の響に聞きつけ給ふべくもあらず。強ひて、聲のかぎりを出だして、「藏人少將藤原信方、内裏よりさふらふ」と申す。内侍のかみ、疾く聞きつけ給ひて、琴を弾きやみ給ふ。上たち、聞きつけさせ給ひて、「何ぞ」と問はせ給ふ。信方「しかん、聞え侍りつるを、上聞召しつけて、「此の聲の聞えむ所を尋て奏せよ」となむ仰せられつる。こなたに聞え侍りつれば」と啓す。御涙どもかませ給ひて、「いよく、珍らかなりける事かな」と人々驚き給はぬなし。朱雀「内裏におほつかなく思さるらむ。疾く参りて奏せよ。昔ほのかに聞き侍りしに、飽かずおほえ侍りしを、然りぬべき折になど聞きて、ものして侍るを、耳近く哀に聞き侍りしが、内裏まで聞召しけるかな」と仰せらる。院の御前よりはじめ奉りて例の儀式にこと加へて、みな御酒など度々まるれり。しばし有りて、嵯峨院、さらに、嵯峨「今宵なむ、露心地に思ふことなく覺ゆる。

(一)誤あるべし

(五)嵯峨院が

(考異)
(二)これを「かれを

(三)聲に合せて此の童べ
四人舞ひて侍らば「ナシ

(四)侍らば「侍らむは「

昔、内裏にて折節の節會、花の宴の折には、面白くかしこき文を興じ、よろづ思ふ事なくて、身をまかせて、年月を過し、をりくの面白かるべき遊をし、琴弾かせしに、朝臣の世よりなむ、有りがたく勝れては覺えし。此の琴の聲になむ、世に心もなく物覺えつるに、今宵なむ、天の樂も斯くやあらむ、と覺ゆる」と宣ふに、源中納言「眞ほそを風は、犬宮の産屋に、大將のたゞいさよかかき鳴らして侍りしは、たゞ面白くなむ侍りし。今宵聞き侍るには、いづれなれど、調ことにかはりて、又なくさまぐに哀に侍りけり。まして、七日の夜の琴は、いみじくこそは侍りしか。これをいさよかかき鳴らし給へらむ聲に合せて、此の童べ四人舞ひて侍らば、いかに面白くになく侍らむ」と啓し給へば、これに勝りて、けに如何ならむ、と思ほす。一院、哀なる事を心深くおもほす御心に、ましてまだ聞かせ給はぬ様の、いと珍らかに悲しう思さるよに、世々を経とも忘れがたき人かなと、愈あさましき御心添ひて、朱鷺さて、かのはし風をなほかき鳴らし給へ」

と宣はす。

夜半ばかりになりゆく。切に、とかく啓して逃れ給ふを、責めて肯き給はず。

朱鷺「何かは、せぬわざくの事のあらむかし」とていと近くるざり寄せ給ふに、いとどむくつけく、世を何とか、今はまして思すまじき御心なるに、思ひ煩ひて、

俊隆女「いと怪しく、さらに珍らかなる様の侍らぬを、あいなう侍るに、左のおとど、春日詣などに、みな聞きなしたるなむ侍らむ。大將に仰せごことを」と申し給へば、

いとよく打笑はせ給ひて、朱鷺「疾くこそ、かく教へ聞え給ふべかりけれ」とて大將を近く召して、責めさせ給へど、疾に立たねば、「一院の御許されなめり。早

う」と宣はすれば、内侍のかみ、扇をうち鳴らし給へば、立ちて、樓に昇りて、

取りて参りたり。嵯峨院、やがて取らせ給ひて御覽するに、琴の様も例に似ず、

清くめでたう、美しげなることを、昔より、同じ唐土にわたりて、持て上りたり

し、彌行が琴どもにも似ず、治部卿の數多わたしたるにも似ず。御手すさびに、

(語釋)

(一)俊隆女が

(二)「何とか」は「何とも」

(四)はし風の琴を仲忠が

(五)「ことを」の「を」衍文

(考異)
(三)なるに「なれば

(六)どもにも似ず「も」

〔語釋〕
(一)「あめれと上たちも」
歎

(三)「女が髪に垂れたる髪を耳にはさむこと、常ははたらかんずるとききの仕度」

(四)「晋の王質が石室山に入り仙人の圍碁を見て斧の柄の朽るを知らざりし故事」

〔考異〕
(二)「こゝ」
く—こくばく

(五)「仙人—山人」

(六)「嗚り—ナレ」

緒を一筋鳴らさせ給ふに、ひどきいと珍らかなり。怪しとて、次の緒をかき鳴らさせ給ふに、露ばかりの音もせず、聲もなし。いと恐ろしき物にこそあめれ。上たちも怪しがり給ひて、几帳の内へさし入れさせ給ひつ。
内侍のかみ、賜はりて、引きよせ給ふに、まづ涙落ちて、昔宣ひしこと思ひ出で給ふことどもあり。強ひて涙を念じ、心をしづめて弾かむとし給ふ。こよばくの御子たち、上達部見て、これを如何ならむと、心を惑はして思ほえ給ふ。御方方、あるは耳はさみをし給ひて、晝のやうなる御殿油を、おしはりて、端近く居給ふ。内裏の御使も、山中に入りて多くの年を過しけむ例のやうに覺えて、歸り参るべき心地もせて居たり。此の琴は、かの作り出で給へりし琴の中の、勝れたる一のひどきにて山中の仙人の勝れたりし手は、樂の師の心とよのへて、深き遺言せし琴なり。唯、はじめの下れる師の教へたる調一つを、まづかき鳴らし給へるに、ありつるよりも聲のひどき高くまさりて雷いと騒がしく鳴りひらめきて、

〔考異〕
(一)「雨よりも—雨のごとく」

地震のやうに土うごく。いとうたておどろくしかりければ、たゞ緒一條をしのびやかに弾き給ふに、俄に池の水たよえて、遣水より、ふかさ二寸ばかり水流れ出でぬ。人々あやしみ驚きぬ。一條はおもしろく、二條は悲しく、哀なる事はじめよりは勝れたり。此の音を聞くに、愚なるものは忽に心さとく明かなり、怒り腹立ちたらむものは、心かにしづまり、荒く烈しからむ風も靜になり、病にしづみいたく苦しからむものも、忽に病おこたり 動き難からむものも、これを聞きて驚かざらむや、とおほゆ。いみじき岩、木、鬼の心なりとも、聞きては涙落さざらんや、と聞ゆ。源中納言、いといみじく、萬のこと覺えず、心にしみて悲しくおほえ給ふ。一院の上は、御目より、涙雨よりもしげく落させ給ふを見奉り給ふに、けに如何にきこしめすらむ、と悲しくおほえ給ふ人々、多く、見まはし給へば、一人として、も、疎に思ひ、泣き給はぬなし。大將は、いまだ此年頃聞き給はぬに、親ともおほえ給はず氣怒ろしきまで、悲しうおほえ給ふ。

(語釋)
(三) 涙あふれし

四人の童べ、細くやはらかなる聲の面白きを出だして、秋の野の蟲の鳴かむよりも哀なることをいふを、同じ聲に合せて舞ふに、愈哀がらせ給ひて、御扇して拍子うたせ給ふ。朱雀院の、

おもしろく哀にためしなき事をきよて苦しきはなにのなににせむ

といとめでたくをかしき御聲に合せて誦せさせ給へば、嵯峨院

哀なることのしるしの見えざらば何をか後のかたみにはせむ

(考異)
(一) 面白きを「を」ナシ

と聞えさせ給へば、人々めで聞ゆ。朱雀「今しばし」と宣はすれば、俊隆女「日頃みだり心地の惱ましく侍るけにや」とて弾きさし給ひつ。朱雀院、なかく此度は、

いよく飽かずおほえさせ給ひて、内侍のかみに、斯く、

朱雀琴の音のあかざりしより白雲のおりるて今日ぞうれしかりける

御返事、

俊隆女塵つもる山もなにせむ雲かよることのほかなる宿をうれしき

(二)「ふを」を「ナシ

俊隆女、犬官をしてりうかく風を彈かしむ。妙なる音。人々の驚嘆。

(語釋)

(二) 朱雀が

(三) 俊隆女の心

(五) 調子の變るは何故ぞ

(考異)

(一)「とは」は「ナシ

(四)「りうかく風」風「ナシ

とは、身にこそ思ふ給ふれ」と聞え給ふ様のいとめでたければ、いかで萬に斯かりけむとおもほす。

犬宮に、りうかく風を、かよる大方の聲に合せて、弾かせ奉りて、試みむと

思ひて、弾かせ奉り給ふ。院の上、朱雀「かはるなるは」と宣はすれば、俊隆女「り

うかく風を、曉の調にもし侍る」とて我弾き給ふやうにて、弾かせ奉り給

ふ。曉になりけるに、いとみじく面白く、樂の聲、鼓の聲を、しばし整へ

させ給ひて、みな一度におし入るとやうに消ちて、たゞ琴の聲のかぎり、上にの

ほりて、澄み響くこと、大將の御手よりはまさりたり。大將のみぞ、人知れずあ

やしと思ひ給ふ。源中納言の、驚怪しく、りうかくの聲は、曉なれど少しこそ

かはれ。此の斯うさまの音は、大將は同じやうにはえ傳へ給はざりけることかな

と宣ふを、近き程なれば、一院の上、朱雀「けにまだ聞かざりつ。萬の樂の聲みな

消ち、琴の聲のかぎり、聲々におもしろう哀なるは、さる調をはなれてありける

〔語釋〕
(一) 眠あるべし

(二) 樂人等の申す也

(三) 犬宮が彈くなりとは知
ちせんとして

(四) わきて一まして

(五) いと一ナレ

(六) 見給ふ一見給はする

(七) 給ふを念じさせ給ひ
て一給ふ念じて

には、かの樂にぞ。いま少し、樂の聲高く、仕うまつれ。あやしく樂の音のたれ
てあるかな」とて遣はす。「樂の音、例かぎりあれば、曉に合せて仕うまつる」
と申す。なほ琴の聲はさまざまの響あまたに別れて、面白うて、樂の聲はしづみ
て細う聞ゆ。ほのくくと明けゆくに、風の音はせで、空すこし霧りわたりすみた
り。折の面白きに、琴の聲わきて哀なり。内侍のかみ、一院にかくと聞かせ奉
らむ。とて、俊隆女「いともも彈かせ給ふかな」と聞え給ふに、おどろかせ給ひて、
几帳のかたびらふと引き揚げて、御覽すれば、内侍のかみの彈き給ふにはあらで、
燈影のあかきに、犬宮のいと白う美しけにて、彈き居給へるなりけり。早斯くな
りにけりと見給ふに、いといみじくかなしく覺えさせ給ふに、涙こほれさせ給ふ
を念じさせ給ひて、朱雀「これは、此の兒の彈くなりけり」と宣はするに、「如何に
如何に」と人々驚きて、哀に、「物のついではいみじかりけるものかな」と聞きさわ
ぎ給ふに、けに「理と聞えたり。「たどの人は、一生を添ひ居て習ふとも、更にえ

〔考異〕
(一) しちがーかしち

かくは侍らじ。これは、然るべくて彈き給ふなりけり」と聞ゆ。右の大殿此の中
にすぐれて嬉しうおほえ給ふこと限なくて、兼雅「喜にも、涙とどめられず侍り
ける」と啓し給ふをば、女御の君、一の宮の御心、いと哀にうれしくおほえ給ふ。
嵯峨院「老は厭ふまじかりけり。いみじう聞かまほしと思ひし、昔の手をひき、
末の世にかく有りがたき事の留まりぬること」と興じ給ひて、いとになく上手に
吹かせ給ふ高麗笛を、これに合せて吹かせ給ふに、さらに兒の彈き給ふやうなら
ず、手のなりにけることと、いみじく哀なるにえ堪へずと宣はせて、立ちて舞は
せ給ひつよ。
嵯峨ひめ小松ひきつることに忍びあへず白きしらがの新羅舞せむ
と宣はするに、右のおとど、
兼雅雲の上のしたにもかよふ末の世にひきとどめつることに嬉し
式部卿宮、

〔語釋〕
〔五〕俊隆の靈
〔六〕俊隆女

〔考異〕
〔一〕水もー水の
〔二〕書かぬなりーかぬ
さは本のまくなり
〔三〕さちーさぢや

嵯峨院の奏請によりて
俊隆に中納言を贈られ俊
隆女正二位に叙せらる。
朱雀院の奏請によりてさ
かの孫四人衛門尉にな
るる。

〔四〕珍らかなるー珍らし
かな

この世にはあらぬこととぞ思ほゆる空にはひどき水もながれて
右大將うだいしやう

仲忠ちゆうしゆうことの音ねの昔むかしにすめる曉あかつきは水もながれて悲かなしかりけり
となむ。人々ひとびとありけれど書かかぬなり。源中納言げんちゆうなごんは、大將だいしやうに、遠何事たにごとをか思おもひ給たまふ
と聞きえ給たまへば、藤壺ふぢつばの御局ごにやみを見みやりて、仲忠ちゆうしゆういかでなほ物ものをば思おもはぬぞ。心憂こころうの
御心ごころや」と宣のたまへば、いらへ、遠とほなどかは。如何いか聞きなきさむ」とて笑わらひ給たまひぬ。

朱雀院すざくゑん今宵こんせうの内侍ないしのかみの祿ろくに、いかなる事ことをせむ。犬宮いぬみやに、いと上手じやうずに、同じ
ごと弾ひき給たまふにつけても、いかで珍めづらかなることをせむ、とおほす。萬兩まんりやうの黄金こがね
も悪わるくおほして、嵯峨院さかゑゑんに、朱雀すざく世よを去さり侍はべりて、今宵こんせうの祿ろくをこそ、え心のまよに
侍はべるまじけれ」と申し給たまへば、嵯峨さかゑけに、如何いかはあるべからむ。ことには、世よを
さりて久ひさしくなりたり。大將だいしやうを、人ひとより越こして、大臣だいじんになして、ことにて大變たいきやう
せさせたらむ。昔むかしの靈れいも、少すこしうれしと見るべきを、かの正身さうじみには、正二位さうじにの加か

〔語釋〕

〔一〕我その由を今上に申
上げん

〔四〕誤あらんか

〔考異〕
〔二〕それがしーナシ

〔三〕はじめてーめして

〔五〕左右大臣左大將ー左
大臣左大將ー右大臣右大
將

〔六〕給へるー給ひつる

階かゐをものして、珍めづらかなることをとどめ置おかむなむ、かの身みに榮はえあるべき。こと
に聞きえむ」

内大臣ないだいじんに右大將うだいしやう藤原ふぢはらの朝臣あそんそれがし、内侍ないしのかみ正二位さうじにに加階かし給たまふべし。
中宮ちゆうぐう、東宮とうぐう、大臣家だいじんけの大變たいきやうに準なへて、内侍ないしのかみの家いへに大變たいきやうゆるされむ。數
のまよに女大變おんなだいきやうあるべし。その宣旨せんじをはじめて、嵯峨院さかゑゑんも奏そうしくだす。かの
日の設まうけの物は、院ゐんよりおくるべし。次々つぎつぎの太政大臣たいじやうだいじん、同じく傳つたへて用意よういせら
るべし。朱雀院すざくゑんの女おんなの宮みやを、男おとこに準なへて、四品しほんの位くらゐ賜たまふべし。この由よしをお
ほせ給たまふべし。

とかよせ給たまひて、左右大臣さうざうだいじん左大將さだいしやうのをばかよせ給たまはで、つかさ位くらゐをこれに書かきつ
けて、近ちかう召めして賜たまふに、二三人ふたにさんは書かき出いでて奉たてまつり給たまふ。右大將うだいしやう、その御氣色ごけしき
を賜たまはりて、仲忠ちゆうしゆう仰おほせごとは、限かぎなくかしこけれど、さらに此この度たびの大臣だいじんの宣旨せんじ
は、承うけたまはらじ。強しひて御願ごがへりみさふらはど、忝かたじけなく御幸ごゆきせしめ給たまへる、畏かしこまらむ

爲に、ところにかうぶりを賜はらむ」と度々啓し給へば、朱雀院は、嵯峨院へ、
朱雀「啓せらるよまよにも」と聞え給へば、唯御消息にて、左大辨召して、嵯峨院
内裏に奏せさせ給ふ。

〔語釋〕

(一)「ところ」は此京極の
舊邸をさふ歟

〔考異〕

(二)「こと」は思ふ―こと
に思ひ

嵯峨年高くなり侍りて、心地のほれぐしうなり侍るに、此の内侍のかみの家、
昔見給へしゆかしさにまうで来て、琴ひかせて聞き侍るに、珍らかなる事
どもなむ。故治部卿の朝臣、おほやけ人として侍りしあとだに、身を公に
したがへて、唐土の使にまうで、あたの風にあひて、多くの年月を経て、父
母の顔も相見ずして、悲しき目を見て、たまぐ歸り侍りて後、同じきやう
に、いくばくも侍らぬ程になくなり侍りにき。内侍のかみ、男ならましかば、
一度に大臣にもなさまほしくなむ。今宵のことには思ふ給ふる。これ、いと
いと易きことに侍るを、唯今宣旨くだし給へ。
と奏せさせ給ふ。嵯峨「そのかうぶりには、右大將の朝臣大臣に、と思ふ給ふれ

〔語釋〕
(一)「さ」がの孫

(二)右大辨忠澄が

(三)仲忠が大臣を辭した
る由を

ど、度々逃れ申せばなむ。故治部卿の朝臣、三位になむ侍りし。贈位の中納言にな
させ給へ」と奏せしめ給ふ。一院は、朱雀「嵯峨院の御幸侍るに、對面賜はらむと
てなむものし侍る。勞らむと思ひ給ふる童四人、左右の衛門尉に缺侍らむに、こ
れ同じうはなさまほしくなむ」と奏せさせ給ふ。事のよしを奏す。委しく問はせ
給ひ、聞召して、今与けにいと珍らかなりける人の琴の聲なり。輕々しからずば
参りても聞くべかりけるをとなむ覺えし」と宣ひて、嵯峨院の御返、
今上畏まりて承りぬ。けに、難く例なきことに侍りとも、仰せられむことは、
いかで。ましていと易きことどもに侍り。

右大將のことを聞かせ給ひて、今与なほ用意ある人なりや」と宣はせて、治部卿
を中納言になさせ給ひ、京極にかうぶり給ふ。内侍のかみのことも、奏し給ふま
まなり。朱雀院の御返、
今上かねて仰せられ、氣色承らましかば、自らも参り侍るべかりけるものを。

衛門のつかさどもは、行末の缺も心もとなく侍り。今も、唯仰せられむになむ。

〔語釋〕
〔二〕大將になきを「なるべし」

〔考異〕
〔一〕この事—二の事

〔三〕給ひつる—給へる

と奏せさせ給ふ。左大辨立ち歸り参りて啓すれば、宣旨の疾く下りたるを、院の上たちもよろこばせ給ひて、上達部の中に告げさせ給ひて、宣旨高く讀むを、内侍のかみ聞き給ふに、治部卿の所に、涙おち悲しくて、身の内侍のかみになり給ひしよりも嬉しくおほえ給ふこと限なし。右大將、この事の喜のよし奏せさせて、舞踏し給ふ。嵯峨院は、たちまちに、思す様に花やかなることの、大將のなきを、なほ飽かず思さる。御方々より、童べの舞ひつるに、かづけさせ給ふ物、いろく濃く薄くさまざまなる織物、かいねりのめでたく擣ちたる、朝ほらけに、いとくをかし。御方々、「世にまた類なく物し給ひける人かな」と宣はぬなし。犬宮の彈き給ひつるさまを、親宮の、かの五十日の餅まわりし程の、昨日今日とおほすに、いと哀なり。藤壺これをわが御子と思はましかばと思す。

〔兩院以下樓御覽、嵯峨院の懷舊〕

〔考異〕
〔一〕上の—一院のうへの
〔二〕下に—レリに

院の上二所、左右大臣、宮たち、上達部おほん供にて樓御覽じにのほらせ給ふ。嵯峨院は、西の對よりおはします。上の御子たち、上達部左右別けて、御後に歩みつどきたり。樓の芳しき匂、かぎりなし。御方々御覽じまはすに、をかしくなまめかしく、見所ある、樓の中のありさま、御覽じて、「いみじくをかしく、めでたくもしたるかな」と仰せらる。まして嵯峨院は、らうくじく、花やかにめでさせ給ひて、嵯峨院の音を聞くと、ことの有様を見るとこそ、天女の花園もかくやあらむと覺ゆれ」と宣ふ。朱雀院、こまかに御覽するに、飽かずめでたければ、朱雀院に、ことに、容貌よろしからざらむ人の、居るべき所の様にはあらざりけり」と宣はす。やんごとなき限、隙もなく、樓のめぐりの勾欄にさふらひ給ふ。山の高きより落つる瀧の、傘の柄さしたるやうにて、岩の上に落ちかよりて沸きかへる下に、をかしけなる五葉の小松、紅葉の木、薄ども、濡れたるに隨ひて動く、いとおもしろきを御覽じて、朱雀院、

〔語釋〕
(二)あかねば」歎

〔考異〕
(二)櫻—櫻

(三)枝を見るかな—枝見
つるかな

(四)なるあはれ昔を—な
りむかしを

(五)奏し給ふ七八尺—申
し給ふ七八本—奏し給ふ
七八本

すむ人も宿もわかねばまどろして世をつくすべき心地こそすれ
右のおとどに、朱雀(二)「羨ましの家のあるじや」と宣へば、いと疾く、

兼雅「やよもせば枝さしまさる木の下にたどり木と思ふばかりを
今日よりは、ましていと畏くこそ」と啓し給ふ。心ばへ、哀なりと聞かせ給ふ。

嵯峨院、樓のかみにさし上りて、いといかめしき森のやうにて、櫻の木あり、

嵯峨「あはれ、此の木見るこそいと恐ろしけれ。昔十餘歳にて、春ごとに來つゝ、書

見るとて、見困じ—下りつゝ遊びし。いで、この樓なくば、及びなむや」とて、

嵯峨「春きては我が袖かけしさくら花いまは木高き枝を見るかな
近うさふらひ給ふ源中納言、(三)

涼かねてより雲かよりけるさくら花うべこそ末の木高かりけれ

宮内卿、年七十なる、思保あはれ昔を思ひ出で侍れば、あの岩のものと(四)の松の木は、

かの山に侍りしを、子日におはしまして引き植ゑ侍りしぞかし」と奏し給ふ。七

七



樓の上(下)

八尺ばかりして、上に平みたる松を見やりて、宮内卿兼躬、

ひき植ゑし子の日の松も老いにけり千世のするにもあひ見つるかな

〔語釋〕

(三)「右大辨に」なるべし

此の歌を、嵯峨院、いみじう哀がり給ひて、一院に、嵯峨「この返には、民部卿を

あまたの人望み申すなるを、この朝臣を、必ずなさせ給へ」と奏せさせ給ひつ。

(四)「内侍のかみに大將」なるべし

朱雀「これのみこそ、古人の留まりたるはあれ。いと哀なり」と申し給ふ。嵯峨「い

(五)俊隆渡唐中の作をあつめたるもの

みじうおもしろき所なりや。時々物して、然るべからむ折に、左大辨に文作らせ

●仲忠、兩院以下に贈物を奉る。還幸。

て、聞かむ」など宣はすれば人々、「けにをかしう侍らむ」と啓す。

(一)朝臣を―朝臣をば

歸らせ給ひなむとす。朱雀院、大宮の御方に御對面せさせ給ふ。内侍のかみ、大

〔考異〕

將、仲忠いと忝き御幸を、いかど仕うまつるべからむ。唐土の集の中に、小册

(二)奏せさせ―申させ

子に、所々畫かき給ひて、歌よみて、三卷ありしを、一卷を朱雀院に奉らむ。嵯

(一)金にて口のへり取りたる

峨院には如何」と宣へば、俊隆女「高麗笛を好ませ給ふめるに、唐土の帝の御返賜

(二)今夜の返禮には

ひけるに賜はせたる、高麗笛を奉らむ。上達部は、例の作法の御装あり。若

くおはします宮たちには、なべての様にはあらず、いかでをかしき様ならむ物こ

そよからめ」と聞え給へば、仲忠「然用意して侍り」とて、皆さまぐにまるらせ

給ふ。からの色紙の畫は、一卷といへども、四十枚ばかりなり。柴檀の箱の黄金

の口置きたるに入れたり。御覽じて、朱雀「こよにこそ、今宵の物には、不死薬に

てもがな、と思へ。さても、これはいと見まほしく思ふものかな」と宣はす。嵯

峨院の御笛の袋は、色よりはじめて、いと清らにうるはしき錦の袋にて、璃瑠の

細き函に入れたる、透きて見えたり。人々興じ給ふ。上も好ませ給ふ物にて、い

と御氣色よし。式部卿の宮三所の大員には、女のよそひ、衣篋に入れたり。さて

の外は、例のことなり。御子たちには、銀の小鷹を作りて、黄金の透餌袋に入れ

て、皆ながら鈴つけて奉り給ふ。珍らかになまめかしうし給へり。嵯峨院、「飽

かぬ物の音を、中々になむ覺ゆる。いま一度だに、いかで必ずとなむ思ふ。それ

は、來年の櫻の花の折をなむ、ものし給はむにや」と宣はす。朱雀院近う寄せ

(考異)
(一)「御志も」も「ナシ」

(二)大殿は「は」ナシ

給ひて、朱雀いと飽かずのみ思ひきこゆるを、いかでか又、かやうにては聞ゆべからむ。犬宮の、いと美しう物し給へる喜は、聞えむ方なきに、なほ限なき御志もこもりたる身をこそまかせ奉らむと思へ」と、まめやかなる事ども、有りがたうおほえ給ふ様なれば、あはれにまめくしう宣ふを、御いらへ 今めかしからず、心恥かしき程に聞え給ふ。右の大殿は、^(三)とくも出でさせ給ひなむと、心安からずおほえ給ふ。嵯峨院、内侍のかみには、蒔繪の小辛櫃一かけに、女によそひ、又、女の装束三十くだり、皆裳唐衣具したり。女房の中につかはす。朱雀院、衣笠一よろひに、唐綾織物の夏冬のさうぞく、又女房の中に、女の装束二十くだり、わらは四人、下仕四人、織物のかざみ、線の上のはかま具したり。左右の樂人、みな二人の御方々より祿賜ふ。事みな果てて、歸り給ひぬ。御方々、飽かすいみじかりつるものかな、常にかよる物の音を聞く、この人のかたち有様を、如何ならむとゆかしく、あかぬ心地し

(語釋)
(一)「親をも子をも」歟

(二)宣はぬなしとなむ一宣はぬなし女大甕の有様季英の辨の女にきん教へ給ふことなども多くあるべけれどさのみは煩はしうてさしおきぬ又事のついでに聞ゆべしとぞ一宣はぬなし次の巻に女大甕の有様大法會のことはあめりき季英の辨のむすめにきん教へ給ふことなど錢れり一つにては多かめれば中よりわけたるなめりと本にこそ待るめれ

給ひてかへり給ひぬ。大將の御心はへもめづらかに、愈世になき様にて、親も子をもちてなしかしづき給ふこととおほし宣はぬなしとなむ。^(三)

宇津保物語終

昭和五年十二月十日
昭和五年十二月十五日

印刷
發行

有朋堂文庫
宇津保物語 下卷 (非賣品)

編輯者

塚本哲三
東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼

三浦捷一
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所
東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

終